
イマジネーション・ラグーン

遊森 謡子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

イマジネーション・ラグーン

【Nコード】

N4764U

【作者名】

遊森 謡子

【あらすじ】

小説家が、自分の書いた物語の中で創造主（女神）になるのはわかるよ。でもなんで、しがない出版社員の私が物語の中にトリップして、巫女になるの！？ 二重人格の神官との微妙な恋愛が進行するなか、世界は少しずつ変化を遂げて行く……私、帰れるの？ ちよっぴり謎解き要素もアリの、異世界トリップ恋愛ファンタジー。9/20本編完結。「その後のふたり」の章は、オフィスラブ系の現代恋愛ものになります。そちらだけ読む方のために、章の最初に本編あらすじ（ネタバレ版）を入れました。

ブローグ

うちみたいな弱小出版社でも、忙しいものは忙しい。

今日は、出版社で最も忙しい日の一つ、『見本出し』の日だしね。始業してすぐ、宅配のお兄さんが重い段ボール箱を担いでやってきた。中には、茶色のクラフト紙に包まれたかたまりが二つ。印刷所から見本として送られてきた、出来立てはやはやの新刊本です。ああ、紙とインクのいい匂い！

これを数か所ある取次に持っていけば、仕入れ部数が決定されて全国の書店に配本される流れになるんだけど、取次が見本出しを受け付けるのは、基本的に午前中のみ。

ここは新宿の外れ、あまりのんびりしていると、大手取次のあるお茶の水や飯田橋で午前中のうちに見本出しを済ませることができなくなる。社員たちがあわただしく見本本を袋に詰め、出かけていった。

すっかり閑散とした部屋で、一人でお留守番の私はため息をついた。

やれやれ、見本を送りだすとほっとするな。さて、配送する分の見本出しも終わらせちゃおう。

遠方の取次宛ての伝票を書こうとした私は、開け放したままのドアからふんわりしたシフォンのチュニックがのぞいているのに気がついた。

「あつ、愛海先生！」

「おはようございます、璃玖さん。ごめんなさい、今日って忙しい日だった？」

エッセイストの愛海先生——もちろん名字もあるけど、ペンネームでは下の名前だけを名乗っている——だった。

うちの出版社から出している雑誌に連載を持っているので、普段は雑誌部の方と付き合いのある先生なんだけど、その連載をまとめた本をわが書籍部で出している関係で、私も顔見知り。

そうそう、私の名前は「宮代^{みやしろ} 璃玖^{りく}」と言うんだけど、

「私は海で、宮代さんは『陸』なのね！」

と愛海先生が面白がってくれて、以来下の名前で呼んでくれる。フレンドリーな先生だ。

これで、さらさらストレートの長い黒髪に、テレビ出演依頼が引きも切らないという美しい顔^{かんばせ}なのだから……天は二物を与えるよなあ。

「おはようございます！ 今日 isNew 刊の見本出しで、出払っちゃってるんです。倉本にご用ですか？」

愛海先生の本の担当をしている主任の名前を上げると、愛海先生はうなずいた。

そして目元をほんのり染めながら、大判の封筒を私に見せるように胸の前に上げた。

「例のファンタジーね。設定資料と、出だしの所だけ書いたから、見てもらおうと思って」

思わず、わお、と声が漏れる。

愛海先生、もともとはエッセイストじゃなくて、ファンタジー小説家になりたかったのだそうだ。今までエッセイを書いて経験を積むうちに、書きたいことが表現できるようになってきたと実感したので、子どものころからずっと温めてきた物語を書きたいと思ったんだって。

それで、うちの倉本主任に、世に出せる作品かどうか見てもらい

たい、という話を持ってきたのがほんの三日前。

人気エッセイストが書くファンタジー小説だもん、話題性は十分だよね！

ちなみに、愛海先生はいまどき珍しい手書き原稿派。直接持ってきてくれたんだ。

「私も読みたい！ 倉本の次に読んでいいですか？」

「は、恥ずかし……！ ん、でも感想聞きたいな」

はにかむ愛海先生。そこで私は、お茶も出していないことにやつと気がついた。

「あ、すみません、どうぞお座りになって下さい！」

ソファのあるパーテーションの向こうに手を向けると、愛海先生はニッコリ笑って、

「うつん、ちよつと寄らせてもらったただだから、いいの。これ、

倉本さんに渡しておいて下さい」

と封筒を私に渡した。

「それじゃ」

軽く会釈をして、身をひるがえす。ツヤツヤの黒髪が、背中ですらりと揺れた。

封をしていない封筒を、指先でチラリと開いてのぞくと、原稿用紙の一行目に綺麗な文字で『プロローグ』と書かれているのが見えた。

「うわー、倉本主任、早く帰ってこないかな！」

うずうずしている所へ、電話のベル。書店からの注文電話だろう。私は急いで電話を取りながら、封筒を倉本主任のデスクに置いた。

結局、その物語は、プロローグから先に進むことはなかった。

その夜、愛海先生が、交通事故で亡くなってしまったから。

倉本主任は部屋に入ってくると、塩が入っていたらしい開封済みの小袋をごみ箱に捨てた。

自分のデスクの足元に鞆を置き、黒いネクタイの結び目に指を入れて緩める。

「お疲れ様です……」

声をかけると、うん、とうなずいて、

「ファンがずいぶん来てたよ。……残念だな」
と椅子に沈み込んでため息をついた。

今日は、愛海先生のお葬式だった。先生のご実家は、静岡県の海に面した街にあり、ご実家近くの斎場で執り行われたそれに、倉本主任を始めうちの会社から何人かが出席していた。

倉本主任は、デスクの上から封筒を取り上げた。愛海先生の原稿だ。

「この原稿、ご遺族にお返ししないな。雑誌部の方でもお返しするものがあるって言ってたから、一緒に入れてもらって」

「はい」

私は手を伸ばして、封筒を受け取る。この封筒を持っではにかんでいた先生の笑顔が思い浮かんで、目頭がじわりと熱くなった。

愛海先生……いつか、作家御用達の、お茶の水の『山の上ホテル』でカンヅメになれるくらい、有名な作家になるんだって言ってたのに。

倉本主任はロッカーで普通のスーツに着替えると、ホワイトボードの予定表に『○○印刷↓直帰』と書き込み、
「それじゃ、お疲れ」

と私の肩を一つ叩いて、また鞆を下げて部屋を出ていった。

時計は、夕方の五時を回っていた。このくらいの時刻になると、書店からの注文電話も減って、その日にやり残した仕事をゆったりと片付けることができるようになる。

部屋には、私一人だった。個人のお客さんのデータを入力し終わると、椅子の背にもたれてぐうつと伸びをする。

机の上の封筒が目に入った。

「……先生、約束通り、読んでもいいですか？」

私はぽそつと呟き、そつと合掌すると、封筒から原稿用紙を取り出した。

薄緑の罫線の中のきれいな文字が、すべるように、私を物語の世界へと誘った。

プロローグだけなのに、かなり入りこんで読んでいたと思う。

さらさら……

さらさら……

何かがこぼれ落ちるような音が耳に入り、私は我に返った。

どこから聞こえるのかと、原稿から顔を上げて、あたりを見回す。

「……えっ？」

パソコンのディスプレイが、角の所から砂のように崩れ始めていた。

がた、と立ち上がると、原稿用紙がデスクの上に落ちる。そのデスクも、角から白く変化してさらさらと崩れていく。

振り向くと、椅子も。キャビネットも。コピー機も。

やはり白っぽく変化しながら崩れ落ち、床に砂の山を作っていた。

「や、なんなのこれ……！」

後ずさった足が、ザッ、と砂を踏む。

とにかく部屋を出なくちゃ！

踵を返した私は、ハッとして天井を見上げた。

蛍光灯が一気に崩れて、大量の砂が私の上に降って来るところだった。

「うわ……つぶ……！！」

私は手で顔をかばいながらしゃがみこみ、目を閉じた。ざあつ、と身体に砂が降り注ぐ……。

次に目を開けた時、視界に飛び込んできたのは、抜けるような青空。エメラルドグリーンの海。真っ白な砂浜。

私は穏やかな波打ち際の砂の上に、たった一人で座りこんでいた。

1 見覚えのある女神

「……???」

私は、一通りあたりを見渡した。

と言つても、何しろ、空と海と砂だけ。シンプル。

海の向こうは水平線、砂の彼方は地平線。実にわかりやすい。

人の子一人いないし、家の一軒、車の一台もなし。あつという間に見終わってしまう。

……こんな場所、日本にあつたっけ。鳥取砂丘だつて、もっと起伏があつて、林なんかも見えて……。

いや、だいたい、会社にいたはずなのに、なんでこんなことに？
言つ言葉の一つも思い浮かばない。

身じろぎすると、服の隙間に入り込んだ砂が、ざらざらして気持ち悪い。

……とりあえず、身体から砂を落とそう。

私は立ち上がると、スカートのウエストからシャツを引っ張り出し、シャツの胸元をバタバタやって服の中の砂を落とした。

髪をまとめていたバレッタも外して、頭を振る。天然のウェーブヘアからも、砂がパラパラと落ちる。

手足だけでも流そう。

社内用に履いていたミュールを脱ぎ、砂の入りこんだストッキングも思い切つて脱いでしまつて、私は用心深く波打ち際に足を浸した。少し温まつた海水が、さざなみを寄せている。

数歩進んで、膝下まで海につかり、私はかがんで手を洗つた。

ぺろり、と指をなめてみると、普通に海水だった。塩辛い。

鮮やかな青をした小魚が、ちょんちょんと足にぶつかつて来る。

その小魚の影が、砂地に映って揺れている。

鼻の下に、脇の下に、じわりと汗が浮いた。

……このままここに立っていたら、日焼けして真っ赤っかのヒリヒリで大変なことになるんじゃないだろうか。これだけ天気が良いんだから。でも、日陰になるような場所がない……。

もう一度あたりを見まわしてから、海に視線を戻すと。

少し離れた水面に、人が立っていた。

真っ白な長い髪、アクアマリンの瞳。透き通るように光っていたけれど、その姿は間違いなく、

「愛海先生！」

私はこの状況に陥ってから、初めて声を上げた。

でも、様子が変。いや、髪や瞳の色も変だし水の上に立ってるだけでも十分変なんだけど。

愛海先生の身体は、半分透けていた。瞳はぼんやりしていて、今にも眠りそうな表情。

服装も変わっていて、インドのサリーみたいに上半身に斜めがけした白い布が、風もないのにふわりと浮かんで足元を取り巻いている。ウエストは少し肌が見えていて、その下はロングスカート。そのスカートも白く、裾がふわりと広がって水中に没していた。

額や首、手首には、虹色に光る貝殻のようなアクセサリーが連なり、絡まりついている。

その姿は先生の美しい顔と相まって、まるで海の女神のようだった。

先生はゆっくりとこちらに視線を向けた。

『……璃玖さん……？』

「そうです！ 聞こえてますか！？」

私は夢中だった。だって、こんな状況で知ってる人に会えたんだもん。

たとえ相手が死んでたって、すぐりつくでしょ普通！ お花畑の向こうにおばあちゃんが見えたら、そっち逝っちゃうでしょ普通！

「ここはどこ……！」

一歩踏み出した時、ずるっ、と足元の砂が崩れ落ちた。

「！」

声もなく、私は頭まで水中に沈んでいた。遠浅だと思っていた浜が、ここから急に深くなっていたのだ。

うそ、私、泳げないんだけど……！

必死で水を掻いて、水上に頭を出そうとして——その前に、水中の景色が目飛び込んできた。

ピンクの魚の群れは帯がたなびくように泳ぎ、黄色の魚の群れは海藻の森をかすめて飛び去る。

海底は一面、珊瑚礁。木々のように密集する珊瑚、段々畑のように連なる平らな珊瑚。黄色、紫、緑に青……色が海上からの光線に照らされて乱舞する。

そんな華やかな世界を、誰かが泳いでくる。愛海先生だ！

でもそれは、あまりにファンタジックな光景だった。

海水を巻き込んで泡の渦を作りながら、私の周りを一周して目の前で止まった先生の身体は。

下半身が白いうろこにおおわれ、時おり虹色に光っていた。

人魚？ いや、なんか違う。下半身が長すぎ！ 全長三メートル以上ある。ヘビ？ ドラゴン？

先生はふわりと微笑み、私の右手をつかむと、水面ではなく底へ向かって泳ぎ出した。

な、なんで、なんで！？　だめーっ、溺れるー！！

だんだん気が遠くなっていく。

気を失う直前、海の底の珊瑚の林の間に、紺色の髪をした男の人が立っているのが見えた気がした……。

2 絵にも描けない(前書き)

夏なので、涼しく行きましょう。

2 絵にも描けない

目が覚めて辺りを見回した瞬間、私は悶絶しそうになった。
なにこれこっぱずかしい——！！

私は巨大なホタテ貝の中にいた。開いた貝殻の中にふわふわのベツドがしつらえられていて、その中で身体に白い布を巻き付けるようにして横たわっていたのだ。

ベッドの真ん中に立って手で大事なところを隠して、「はい女神様の誕生です」って世界の名画ゴッゴでもしろと！？

あまりの恥ずかしさにベッドから逃げ出し、ベッド脇に座り込んであたりを見回す。白い天井と壁、何か光るものがあちらこちら埋め込まれた床、丸テーブルに長椅子。

そして、大きな丸い窓が目に入った。

……まるで、水族館の中にいるようだった。

私が今いる部屋は、信じられないことに海中にあるらしい。

窓の向こうには海底の珊瑚礁が広がり、色鮮やかな魚たちがすぐそばを横切る。白い、ややドーム状の建物の連なりも見える。視線を上げてみれば、海面に揺れる光が見えた。

頭の中で、「竜宮城に――来てみれば――」という、あの歌がぐるぐる回っている。

私は、愛海先生の書いた小説のプロローグを思い出していた。

あの物語は、一人の女の子が海で溺れかけ、海の底のお城にたどり着く所から始まっている。

まさか、まさか、ここは……？

いきなりノックの音がした。

ヒイ、とか変な声を上げていると、ドアが開いて、紺色の髪を結い上げた妙齡の女性が入ってきた。ベアトップのヘソ出しルック、膝丈の巻きスカートを着ている。両手に服らしきものを抱えていた。「まあ、お気づきになったんですね、巫女さま」

ぱっ、とほほ笑むと、目じりに笑いじわが刻まれた。

ミコ？ 誰それ？

「全身びしょ濡れでしたので、失礼ながら服は脱がさせていただきますました。こちらにお召し替えになってください」

女性は笑顔でベッドの縁に服を置き、

「私はズーイと申します。外に控えておりますので、終わりましたらお呼び下さい」

と出ていった。ドアが閉まる。私はただ、口をパクパクさせていた。

ふ、服……とにかくこの裸同然の格好じゃヤダ。服。

広げてみると、その服は愛海先生が着ていたのと同系統で、インドっぽい雰囲気。だけどサリーみたいな布はなくて、何と言うか……か、身体の線が出まくりですね。

トップスはピタミみたいな感じなんだけど、襟ぐりは広くV字に開いているし、丈が短くておへそは丸見え。もし私の胸があと一カップ小さかったら、馬鹿にすんなー！ とか、どうせどうせ！ とか叫んで着なかったかも。

下は足首までの巻きスカートにサッシュベルトなので、足を晒す必要はなくてほっとしたけど。

気がついたら、砂浜において来たはずの私のミユールが部屋に置いてあって、履きなれたそれを履くことにした。

とにかく、ここはどこなのかを確かめよう。

「ず、ズーイさん」

ドアの外に声をかけると、さっきの女性が顔を出してくれた。

「よくお似合いですよ」

「あの、ここは、なんて言う場所ですか？」

「名前ですか？ ラグーン城です」

……うそでしょ……。

私は立ちつくした。

それは、先生の設定資料集に書いてあった名前だ。読んだ時、先生ネーミングセンスないな、『珊瑚礁城』って、まんまじゃん！
って思ったのを覚えてる。

それに、ズーイさんの髪の色、瞳の色も、先生が設定したラグーン城の住人そのままだった。

私はパツと自分の髪を引っ張った。勢いがつきすぎて痛いけど、その痛みで夢ではないことが分かったし、私の髪は黒かった。黒が好きなのでカラーリングはしてない。

なんで、しがない二十六歳のOLの私が、『ラグーン城』にいるの！？

「神官が、あなたを発見されたのですよ。何でも、女神マーナが連れて来られたとか……」

話しかけられて、我に帰る。

「は、はあ」

「詳しくは神官にお聞き下さい。目が覚めたらお会いしたいのとこのですが、大丈夫ですか？」

心臓がバクバクしすぎて頭がガンガンするほどだけど、とにかくついて行くしかない。この部屋にいても現状は把握できない。

ここが先生の作った世界だと、仮定するとして。

それなら、たぶんそんなに危険はない、と思う。初めて物語の構想を聞いた時、「あんまり悪役とか出てこないから、物語としてはぬるいかもしれないわ」なんて言ってたもん。

「わかり、ました」

私はどうにかうなずいて、ズーイさんの後に続いて部屋を出た。

お城はいくつもの建物が渡り廊下でつながっていて、合間に小さな庭がたくさんある。一つ一つにテーマカラーがあるらしくて、ピンクの珊瑚の林になっている庭、緑のマリモみたいなものがたくさん転がった庭、黄色のイソギンチャクが絨毯のように広がった庭なんかがあった。

上を見上げると、遠い水面で陽光がきらめいて揺れ、魚の群がゆったりと過ぎていった。

一番大きな建物に入った。白い珊瑚の壁や床に、虹色の貝殻があちこち埋め込まれてきらきらしている。壁には等間隔で巻き貝が飛び出していて、殻を透かして中から光があふれている。これが照明なのかな。

廊下の突き当たりは、ドアなどはないまま大きなホールにつながっていた。

そこは天井がなく、巨大な金魚鉢みたいな形をしていて、見上げるとやっぱり陽光きらめく水面が見えている。金魚鉢の縁からは、巻き貝が縦にいくつもつながったものがたくさん下がっていて、様々な色に光っている。

奥は一段高くなっていて、やはり珊瑚でできているのか真っ白な長椅子が一つ。

そのやたら大きな長椅子の端っこの方に、さっき気を失う前に見た、あの青年が座っていた。

3 出版社員イコール巫女

陽に焼けた肌、一つに結ばれた紺色の髪、青のような緑のような不思議な色の瞳。

年のころは、私と同じかちょっと上くらい。その青年は、膝丈の白い着物のような服にサッシュベルトを締め、ぴったりしたズボンにサンダルを履いていた。ひろがった袖には、異国風の模様が入っている。

「ご苦労さま。下がっていいよ」

青年に言われ、ズーイさんは軽くひざを曲げるようなあいさつをして、あっさりと行ってしまった。

「どうぞ。具合はいかがですか？ 不自由なことはありませんか」
長椅子の、空いたスペースを示された。一つの長椅子に一緒に座るんですか？ 近……。

「はい…… 大丈夫です」

私は返事をしながら、反対の端に浅く腰掛けた。

「僕はラグリーン城の神官で、ザンと言います。あなたは？」

偉ぶるでもなく、自然体で尋ねられた。

「あっ」

知ってる、ザンって名前……これも設定資料にあったよ。確か結構、重要な役回りだったはず。

「ええっと、璃玖、です」

「リク。よろしく」

「よよよろしく……」

なんだか、現実感がなくて変な感じだ。愛海先生の作ったキャラクターと話をしてるって。

私が読んだプロローグには、こんな自己紹介シーンはなかったけど、これはキャラクターがすでに自分の意志で動いているってこと？ それとも愛海先生の頭の中では、すでにこういう会話もできあがってたのかな。

「あなたは、どこから来たんですか？」

聞かれて、正直に答える。

「職場からです。働いていたら、いつの間にか……来てしまったみたい」

「女神マーナの元で、働いていた？」

ええっと……なんて言えばいいのかな。本を作る仕事だと言ってしまつと、この世界が未完の物語の世界だと、伝えることになりはしない？

それがいいことなのか、私には判断つきません！

「愛海先生の元でというか……愛海先生の考えたことを他の人に伝える仕事というか」

「やはり、あなたは女神の言葉を伝える巫女なんですね」

あれ？ いいのかこんな方向で？

「海の中を、女神マーナに手を引かれてあなたがやってきた時は驚きました、きっとこれは我々にとって僥倖に違いない」

ザンは、屈託のない笑みを浮かべた。すいつ、と近くの空間を泳ぎ去る真っ赤な魚にも、優しい目を向けている。

「僕は神官と呼ばれていますが、女神の血筋を受け継ぐもの、というただそれだけの意味です。ものすごい神通力があるわけでも、民を率いるカリスマがあるわけでもありません。気軽に接して下さいね」

さ、さすがは愛海先生の作ったキャラクター、めっちゃいい人！
イケメンなんだけど、中身は少年みたいに無邪気というか……こ
っちも見えていて全然警戒心がわいてこないわ。

「あ、ありがとう。私もそんな特別な人間って訳じゃないから……
愛海先生に名前を覚えてもらってるだけで」

ははは、と笑ったら、ザンが目を見開いて身を乗り出した。近く
にいた魚が驚いたように、向きを変えて泳ぎ去った。

「名前を！？ 名前を呼ばれるということは、マーナの声が聞こえ
るということですね！？ さすがは巫女どのだ」

……ああ……またなんか話が変な方向へ……。

「マーナはどんな風に語りかけてくるのですか？」

「えー？ どんなつて、さっきは海の上で会って名前を呼ばれただ
けけど」

「そうか……なるほど、海上で……」

ザンは腕組みをする。

「な、何か？」

「僕たちは、海の上には出られないんです。水のあるところでしか
生きられない」

ははあ。それで、海の上はあんなに何もないわけね。今のところ
物語に出てこないなら、設定上必要ないもんね。

じゃあ、この人たちは、この城の中でだけ暮らしているってこ
とか……。

……で。今の話から、わかったことがある。

ザンが女神マーナと話したことがないってことは、愛海先生はこ
のラグーン城には入ってこないと考えられる。

それなら、愛海先生と接触するためには、水の中かもしれない。海の上に出なくてはならない。

私はあいにくと、水中で話をする能力は持ち合わせていない。つまり、愛海先生とさつきみたいには話をしようと思っただろうにかして海の上に出ないとならないのだ。

……だから！ 私、泳げないんだってば！

ザンは私の右手を取って、軽く握手をした。

「どうかまた、マーナの言葉を我々に伝えて下さい。歓迎します、巫女どの……リク」

というわけで、私は巫女決定、らしいです。

4 会社と神社（前書き）

昨日は『海の日』だったのに、更新できませんでした…

4 会社と神社

あれから、どれくらい時間が経ってるんだろう。

私はぶらぶらと、ラグーン城のなかを散歩しながら考えていた。

……いや、ぶっちゃけ道に迷っちゃったんだけどね。

ザンが「ズーイを呼びましょう」って言うてくれたけど、だいたいの方向はわかってるし二回くらいしか曲がらなかったから、さっきの部屋に帰りつくくらい訳ないわ、とか思ってた一人です。言っただけ。とんでもありませんでした。

まあ、そんなにとてつもなく広い場所じゃないみたいだから、歩いてるうちにどうにかなるでしょ。

私は会社に思いをはせた。

……私がないこと、誰か気づいてくれたかな。会社、砂だらけでビツクリだろうな。

いや待て。あの日は金曜日で、しかも夜になってた。倉本主任は印刷所に色校正に行って、そのまま直帰。他の社員さんも書店営業から直帰で、会社に残って戸締りする予定だったのは私。

うちの会社は貧乏で、わが書籍部は在庫保管スペースを確保するために、ものすごいボロビルを借りていた。警備員なんて常駐してない。

じゃあ、土日出勤する人がいない限り、一人暮らしの私が行方不明なことに、月曜日まで誰も気づいてくれないってことじゃないの！？

上を見上げると、相変わらず水面は明るくきらめいて揺れている。エイだろつか、空飛ぶ絨毯みたいなものが陽光を遮り、影が水中にストライプを作った。

今日は一晩明けて、土曜日なのかな。あーあ、どうせ倉本主任は印刷所の美人営業さんと楽しく飲み明かしたんだろうな、私がこんな目に遭つてるとも知らないで。くそう、くらっシュ（「倉」本「主」任の略称だ）め！

内心八つ当たりしながら歩いていると、渡り廊下の外、庭の珊瑚の林の奥に、見覚えのある小さな建物が見えた。庭に下りて近寄ってみる。

「お社…かな？」

ちゃんとした神社、と言う感じではなくて、^{摂社}とか^{末社}つていうの？ よく神社の脇にぽつんと建つて、あれみたい。

私の背より少し高いくらいの、小さなお社だった。赤い屋根に白い壁、赤い格子の扉。前には白いつくりのようなものが立ててあり、榊の枝が挿してある…と思つたら、これ榊じゃないわ。ワカメだ。

……私は漠然とした不安を覚えた。

亡くなっている愛海先生……その先生の世界に作られた、小さなお社。これは何を祀つてあるんだろう。

私は首を振つた。今はこんなこと気にしてる場合じゃない、元の世界に返るためにはどうしたらいいのかを考えなきゃ。

やっぱり、この世界の創造主である愛海先生に会う必要があると思う。

ということは、何か海上に出る手立てを考えないと。

今私がいるラグーン城の中は、空気なのか水なのかわからないもので満たされている。息はできるし、身体は浮かばないんだけど、空気よりも存在感のあるものが身体にまとわりついているのを感じる。

お社を離れ、庭の外へ向かって歩いてみると、ある地点から急に視界の青が濃くなっていた。手を伸ばしてみると、小さな抵抗があつてから手が向こうへ抜ける。冷たい水を感じた。

えいや、と顔を突き出してみる。

「！……げほ、ごほ」

顔を戻し、両手でぬぐった。やっぱり、ここから向こうは海だ。息ができない。

それじゃあ、どうやって海上へ行けばいいのか。

潜水艦？……この世界にありそうか、璃玖？

それじゃ、シュノーケルとか酸素ボンベ？ いやいや、もっとありそうなものがあるじゃないの。

「……かめ？」

私はつぶやく。浦島太郎みたいに、陸地と竜宮城を行き来するなら、交通手段は亀でしょう。

そのとき、目の前が陰った。顔を上げると、まるで私の声が聞こえたかのように、大きなウミガメが庭に泳いできて着陸（？）したところだった。

ウミガメは首をゆっくりともたげ、つぶらな瞳でこちらを見た。

「……ベタだけど、小説としてどうこうよりも、まず帰ることを考えないとね」

つぶやいた私は、ウミガメの前にしゃがみこんで言った。

「もしもしカメよ」

やっぱ、カメに話しかける時には「もしもし」だよね。ウミガメは私をじつと見ている。

「海の上まで、乗せてくれるかい？」

すると、ウミガメは少し身体の向きを変えて、私に背中を向けた。乗せてくれるらしい。ファンタジーだ。

「ありがとう……」

よっ、と不安定な甲羅にまたがる。

いきなり、ウミガメが急発進した。大きな前足をオールのように使ってぐいぐいと進み、濃い青の中へ。

「ぐぶー!!!」

ちょ、カメに乗っても息できないじゃないの！ 絵本の浦島太郎はあんなに涼しい顔してたのにー！

身体を起こすこともできず、甲羅のふちに手をかけて伏せたまま、私はウミガメと一緒にぐいぐいと水中を昇って行く。

いつの間にか白い姿が、綺麗な泡をたくさん連れてウミガメの横を泳いでいた。

どうにか横を向くと、白い髪をなびかせた愛海先生がニッコリと笑って、上を指さした。

5 登場人物のモデル

「がはあ！ ぜい、ぜい、ぜい」

ま、また気を失うかと思った！

強い陽射しが、濡れた身体に降ってくる。

海の真ん中だった。いつの間にか陸地は見えなくなっていて、私の乗ったウミガメだけがぼっかりと浮いている。

ざあつ、と音がして、飛沫をまばゆく反射させながら、すぐ目の前に愛海先生が現れた。昨日と同じ、白い髪にアクアマリンの瞳。水の上に立っているように見えるけど、水中に没した衣装の裾がヘビのような尻尾をおおっていることを、私はもう知っている。

「ま、まなみ、せんせい」

やっと息の整ってきた私に、愛海先生は歌うように言った。

「璃玖さん、私の世界にようこそー」

愛海先生——今は、この世界の創造主である女神マーナ——は、目を細めてほほえみながら、私の周りをゆっくりと回っている。白く長い衣装が、先生の動きをトレースして水中を揺らめく。

「ラグーン城はどうー？」

「あ、ええ、綺麗だし涼しいです……」

先生を目で追いながら、私は考える。

……ちよつと待って。先生、自分が亡くなっていることには気づいてるのかな……？ そこは一応触れないようにしよう。

あ、この「女神マーナ」だって、先生の創造の産物かもしれないのか。ああややこしい。

でも、いわゆる異世界トリップもののファンタジーだと、言葉が通じないパターンがあるけど、その点はラッキーだったと言わざる

を得ないな。愛海先生が日本語で書いた世界だから、公用語が日本語だって点に置いては。

先生は機嫌よく笑っている。

「この世界はね、私が小学生の頃に思いついたのよー。ふふ」

「そうですか。それで、あの、どうして私はここにいるんでしょうか？」

先生は、ああ、と両手を合わせて、

「それはね、いざお話を書き始めたときに、ヒロインの女の子のモデルにしたからー」

「……誰を？」

「璃玖さんをー！」

……ちよつと待って（さっきからこればかりだけど）。

まさか私も、今ここにいる私も、先生の創造の産物ってこと？

急に自分の存在が頼りないものに思え、めまいがした。太陽がジリジリと照りつけているのに、背筋がすうつと冷える。

「でも璃玖さん、私が書いたのと違うわねー」

先生が人差し指をあごに当てて、首を傾げる。美人がやると様になるポーズ。

「あ……そういえば、お話ではヒロインは小学校高学年くらいの女の子ですもんね」

私はやっと、自分を立て直した。

どうみても、今のこの私の身体は小学生のものではない。私は自分のピタＴ（？）からのぞく胸の谷間を見下ろした。あちらこちら、ちゃんと大人の女に育ってます、ええ。

「良かった、私はちゃんと二十六歳会社員の私だ……」

それでも、モデルになったという理由で、ヒロインと私が重なってしまつて物語の中に入り込んでしまつたのか。

ところで、さつきから気になるのは、先生の様子。いつもとちよつと違う。いちいち語尾をのぼす、このしゃべり方。

以前にも、先生がこのしゃべり方をしているところを見たことがある。

「先生……もしかして、酔つてます？」

ちなみに、エッセイストの先生がよくエッセイのテーマにするのは、「お酒と美味しいつまみ」だ。

先生は両手を頬に当てて、うふふ、と微笑んだ。

「え、わかるー？　だつてさつきまで気持ちよく飲んでたんだものー」

……そうだ。確か先生が亡くなったのは、作家仲間と飲んだ帰りに乗ったタクシーが、深夜の首都高で玉突き事故に巻き込まれたから。

私はなんと答えていいかわからなくなった。

「そうそう、璃玖さん、ザンと会つたー？」

先生が私の顔をのぞき込むようにした。

「あ、はい。すごくフレンドリーな神官さんですね」

私が答えると、先生はますます機嫌良さそうに微笑んだ。

「それでしょー、彼にもモデルがいるのよー」

「え、そうなんですか？　まさか、担当の倉本とかじゃないですよー」

私は、どつかで飲み明かした翌朝に出社した、酒臭くて無精ヒゲちよぼちよぼの「くらッシュ」を思い浮かべた。似てねえ似てねえ。「違う違うー。私の弟ー」

弟さん？

「先生、弟さんいらしたんでがぼがぼごぼぼ」

いきなり、今までおとなしくしていたウミガメくんが沈降を開始して、私は水中に没した。

わ、悪かった、悪かったわよ、ずっと私みたいな重いに乗ったまま浮いててくれたんだものね！

でもお願い、沈むときは予告してえええ！

甲羅にしがみつinaながら、ゴボゴボと昇っていく気泡を見上げると、海上で愛海先生がにっこりと手を振るのが見えた。

息も絶え絶えに、私は海中のラグーン城に戻ってきた。

先生に会いに行くたびにこれって、身体がもちませんかな！

甲羅から庭にすべり落ちた私を置いて、ウミガメは海中を泳ぎ去っていく。私はそれを見送り、思わずその場に突っ伏した。つ、疲れた……。

「巫女殿！ 大丈夫ですか？」

誰かが駆け寄ってきて、私の横にひざをついた。

「あ、だ、だいじょび……」

ちよっぴり噛みつつ顔を上げる。

あ。もろタイプ。

そこにいたのは、がっしりとした身体をザンと同じような衣装に包んだ、ちよっと強面の男性だった。紺色の髪は短く刈り込んであり、額に複雑な文様の入ったハチマキのようなものを巻いている。

「立てますか？」

大きな手が差し出され、反射的に自分の手を預けると、そっと引き起こしてくれた。

「あつ、ありがとうございます」

うわー、私ワイルド系に弱いんだよねえ、どうしょコレ。一年ちよつと前に別れた彼氏もこういうタイプでさ。

……ああ、このキャラクターにもモデルがいたりしてね、先生の元カレとか。

そう考えたら、サクツと冷めた。熱しくいし冷めやすい、あまり恋愛には向いてない私。

「俺はリュウと言います。ズーイと同じく、巫女殿のご用を果たすために存在します。何か男手が必要な時は、何でも言ってお下さい」
リュウは片膝をつき、きつちりと一度頭を下げると、また立ち上がった。

「お疲れのようですね、部屋までお送りします。やはり、女神の神託を受けるには、尋常ではないエネルギーがいるのですね」

そうね。肺活量という名のエネルギーがね。

6 警告の『夜』

リュウと渡り廊下をいくつか渡って、やっと見覚えのある建物に戻つてくると、入り口のところでズーイさんが両手をもみ絞りながら立っていた。

「ああ、巫女さま！　なかなか戻ってこられないので、心配しました」

「あつ、ごめんなさい！」

あわてて謝ると、横からリュウが口添えをしてくれる。

「巫女殿は、女神マーナの神託を受けておられたのです」

「まあ、そうでしたか」

「あの……」

私はつい、口を挟む。

「良かったら、お二人とも私のことは璃玖と呼んでください。どうもその巫女っていうのはしっくり来なくて。あ、敬称も抜きで」

ただの会社員なのに巫女と言われると、なんだか身分詐称みたくいで罪悪感があつてね……それに特にズーイさん、私よりも年上っぽいし。

「そうですか？　巫……リクが、そうおっしゃるなら」

「リク、ですね。わかりました」

わりと柔軟に、ズーイさんもリュウも対応してくれた。

部屋に入ると、リュウは「俺は、続きの間かこの建物の周辺にいますので」と出ていった。

海につかった後の私は、部屋に付属のシャワールームを借りた。何でも、ここからさらに井戸を掘って真水を引いているそうで。

「ああ……そういうえば結局、この世界から出る方法を聞けないまま、先生との話が終わっちゃったよ……」

後頭部にシャワーを受けながら、白い壁に手についてガツクリ。最低あと一回は、愛海先生に会いに海上に行かないとならない。

……大丈夫か私。

ため息をつきながら、用意されていたガーゼ地の浴衣みたいなものを着てシャワールームを出ると、心配したズーイさんが休むように勧めてくれた。例の恥ずかしいホタテベッドにちよつと横になる。（このベッドって、みんなこの形なのかしら。ザンはともかく、あのワイルド系のリュウもホタテベッドで寝てんのかな……うわー似合わない……）

余計なことを考えていたら、さすがに疲れていたのか、あつと言う間に眠りに落ちてしまった。

はっ、と起き上がると、そこはやはりホタテベッドの上だった。しばらく眠ったせいとか、頭がすっきりしている。

……夢オチはなし、か。

「昼寝なんて久しぶりにしたな。おなかすいた……」

窓に近寄り、海上を見上げる。遠い水面では、やはり陽光がキラキラしている。

なんか……時間の経過がわからないところだなあ。私の体内時計の感覚では、そろそろ暗くなってきてもいいような気がするんだけど。

ノックの音がして、ズーイさんが顔を出す。

「お目覚めですか？ そろそろ夕食をと思ひまして」

「わあ、嬉しいです。あの、甘えてしまっていていいんでしょうか」

ここへ来てから、色々とお世話になってしまってるよね。お話の中とはいえ。

するとズーイさんは私を安心させるように微笑み、

「何もお気になされないようにおもてなしせよと、神官の仰せです。ここは豊かなお城ですし、リクもお好きなように過ごして下さいね」

と言ってくれた。

……うーん、ありがたいけど、何だか警戒してしまう。本当に浦島太郎みたいになっただろうしう。元の世界に戻ったら、ものすごい時間が経過してたりして。

やっぱりなるべく早く、元の世界に戻る方法を見つけなくちゃ。

「夕食ですが、神官と、神官のお父上お母上が、一緒にいかがかと……どうでしょうか」

ズーイさんが尋ねてきた。え、ザンのお父さんとお母さん？

ザンは愛海先生の弟がモデルなんだから……ザンのご両親はやっぱり、先生のご両親がモデルなのかな。それならきっと、フレンドリーな人だよな。

「はい、喜んで」

私はうなずいた。もしかしたら、色々動き回ってるうちに、ここから出るヒントも見つかるかもしれない。

また渡り廊下をてくてく歩いて、あの金魚鉢ホールに向かう。……ネーミングがあんまりだな。せめて英語で『フィッシュボウル』とでも呼ぼうか。まんまだけど。

フィッシュボウルに到着してみると、真ん中に大きくて真っ白なテーブルが出してあった。まるでクラゲみたいな形をした柔らかそうなスツールがいくつか置いてあって、食事の用意がしてある。

キター！ 舟盛り！ やっぱり海の中だもん、魚がメインだよなえ。それに、大皿にマグロのカブト焼きがどーんと乗っているし、七輪みたいなものが置いてあって網の上で貝が何種類もグツグツ言ってるし、色鮮やかな海藻麺とか海藻サラダがたっぷり。わんだほい。

鯛やヒラメは『舞い踊って』はいなかったけど、その辺の空間を色鮮やかな魚たちが時々通り過ぎて、フィッシュボウルを華やかに

していた。

「お魚は、どうやって獲ってくるんですか？」

「この人は海には入れないんだよね？　と思ってズーイさんに聞くと、

「生け簀があります」

せっかく海の中なのに、養殖ですか、はは。あ、でもブリとか、意外と天然モノより養殖モノの方が脂が乗ってて美味しかったりするよね。

ズーイさんの追加説明によると、網を使って天然ものも少しは獲るらしいです。

そこへ、ザンが入ってきた。

「こんばんは、リク」

「あ、こんばんは」

座りかけていた私は、一応立ち上がった。

「海上に行って、女神マーナの神託を受けたそうですね」

「ええ、まあ」

女神、酔っ払ってたけどね。

するとザンは頬笑みを浮かべたまま、こう言った。

「あまり勝手に動き回らないでくださいね。色々心配しますから」

あれ？

「あ……ごめんなさい」

反射的に謝ると、ザンは無邪気な笑みを深くして、

「いえ、でもお疲れさまでした。さすが巫女殿ですね。女神とはどんなお話を……あ、こちらが僕の両親です」

と、後ろから来た二人の方を向いた。

ザンの視線が逸れた時、私は自分の肩に力が入っていたのに気づ

いて、ゆっくり深呼吸をした。

……何だか、さっきの話し方……最初に会った時の印象とはちょっと違った、よね。また元に戻ったけど……。

ザンの両親は、想像通りのフレンドリーなおじさんおばさんだった。二人とも白髪交じりの長髪で、ふっくらした身体つきに陽気な身振り手振り。名前は、おじさんがシュリさんでおばさんがヤーエさん。

美味しい魚や、お酒も少し勧めてくれながら、この世界の豆知識を教えてくれたり、女神との会話を聞きたがつたりするザンとその両親。私もどうか差し障りのない範囲で受け答えをする。

私がザンの人柄を褒めたら女神が喜んでいた、と話すと、ザンは照れるしご両親は浮かれるし。

……理想の親子って、こんな感じかな。

でも私は、さっきのザンの「似合わない」ものの言いが気になって、どこか上の空だった。

食事が終わると、シュリさんとヤーエさんは「楽しくて飲み過ぎしてしまった」とニコニコしながら、先に退出していった。

「あ、じゃあ私も。ごちそうさまでした」

立ち上がると、ザンが「今、ズーイを呼びます」と言っ、壁にくっついていてるときわ大きな巻貝の所に行っ、何かしゃべった。へえ、あれもしかして伝声管とかインターホンのもの？

私に向き直ったザンは、

「そろそろ『夜』の時間ですから、灯りを持って来させましょう。渡り廊下は暗くなりますから」
と言った。

今なら十分明るいけどな……？

思ったとたん、ふうっ、と当たりが薄暗くなった。フィッシュボウルのふちから下がった巻貝の灯りが、その照度を少し落としたのだ。

私があたりを見回しているとズーイさんが入ってきて、軽く膝を折るあいさつをした。

「それでは、おやすみなさい、リク。明日また、少しお会いする時間を下さい」

「はい……おやすみなさい」

私はとにかく返事をする、ズーイさんの後に続いてフィッシュボウルを出た。

本当に渡り廊下は暗くなっていて、ところどころに巻貝の灯りが点っているだけ。その灯りも、さっきまでと違ってほんのりとか光っていない。庭にも灯籠があつたような気がするんだけど、それも今は点っておらず、魚たちやイソギンチャクの姿はかろうじて見えるものの色が沈みこんで見えた。

ズーイさんは手に巻貝の形をした燭台を持っていて、それで私の足元を照らしながら歩いてくれた。

上を見上げる。

相変わらず、水面では陽光がきらめいて、通り過ぎる魚がいくつもの影を落としている。

これが、『夜』？ ラグーン城の照明を落としただけだね。海上はまだ昼間じゃないの。

しかしとうとう、部屋に戻ってズーイさんが「それでは、おやすみなさいませ」と出て行っても、ホタテベッドに入ってしばらく窓

の外をにらんでいても、海上が明るいのとは変わらなかった。

「この世界には、陽が沈んで月や星が出て…という、私の馴染んだ『夜』がないのだ。」

7 不安と疑惑（前書き）

現在、改稿作業を勧めております。ストーリーには影響はありませんが一つだけ、女神「マナ」を「マーナ」にさせて下さい！せっかくズーイとかヤーエとか、女性陣が「-」の入った名前なので、揃えたくまりました。てへ。

7 不安と疑惑

「ふわ……」

私はあくびをしながら、ベッドから足を下ろした。目じりの涙を拭く。

昨日は昼寝をしたせいもあり、それにこの世界の『夜』のことが気になって、なかなか寝付かれなかったのだ。

ベッドサイドの巻貝ランプは明るく光り、よく見ると天井も全体的に内側から光を発しているらしい。窓際に寄ると、外の庭に建てられた様々な形の灯籠も、明るい光を点している。ラグーン城では、昼間は灯りを点し、夜になると消すわけだ。

向こうに見える、一番大きなドーム状のラグーン城も、それ自体が大きな照明であるかのように、再び色鮮やかな姿を取り戻していた。

「全然気づかなかった…海の上は昼間でも、海底は本来、暗いはずなのよね」

私はつぶやいた。

澄んだ海でも、水深二十メートルくらいでもう夕方のような暗さだと聞いたことがある。ラグーン城の『夜』はもう少し暗く感じたので、それより深いのかも知れない。ここはファンタジー小説の世界だけど、こういう所はリアルだ。

それにしても、地上に本物の夜が来ないというのは、愛海先生の考えた設定なんだろうか。一体、どんな理由で？ 今度会えたら聞いてみよう。

ノックの音がして、ズーイさんが顔を出した。

「お目覚めですか？ 朝食ですよ」

部屋のテーブルに並べてくれたのは、海藻サラダ系のもの。うーん、炭水化物がないのが寂しい。

そして私は再び、フィッシュボウルに来ていた。

ザンが昨日、「明日お会いする時間を下さい」と言っていたので、こちらから出向いてみたのだ。色々気になることはあるけど、それならなおさら自分から動くべし。

フィッシュボウルの中は、がらんとしている。耳をすませると、水泡がぽこぽこ立ち上る音や、ずっと遠くの方で、ドドド……と低く響く音。海の中って、シーンとしてるわけじゃないのね。

すぐそばの空間を泳ぎ去る魚たちを目で追っていると、

「リク、こっちです」

ザンの声がした。奥の、一段高くなっている所はまるでステージのようになっている、両脇にカーテンが垂れているんだけど、その影からザンが顔を出している。

「こちらへどうぞ」

私も段に上がって、舞台の袖のような所に入る。すると、そこにもドアのない出入り口があった。

ザンに続いて何気なくそこを出た私は、目の前に広がる光景に息を飲んだ。

そこは広いテラスになっていて、眼下に緩やかに下降する海底の百八十度のパノラマが広がっていた。

山もある。海藻の森もある。柔らかな珊瑚の林が海流にゆらめく。その合間に、海底を流れる海水の動きが、大河のように見えていた。魚の群れがそれに乗って移動するので、はつきりと視覚化して見える。

そして、街があった。

白いドーム状の小さな家々が、大河の両脇に密集して大きな街を作っているのだ。街中に灯りが星屑のように広がり、海底を照らし出している。人影が動いているのもわかる。

「街……」

私は呆然とした。

「城下街です。まだお見せしてませんでしたね」
隣にザンが立つ。

そう、そうだよ。今私がいるのはお城であって、その外には普通の家だつてあるわけだ。そしてそこでは人々が、私の世界と同じように暮らしを営んでいる。物語の中だとしても。

ん？ 街の外れの方、海藻の森のあたりが、水が濁って見える。

「何だかあのあたり、濁ってるのね」

指さして聞くと、ザンがうなずいて教えてくれた。

「ああ大丈夫、プランクトンがたくさん発生してるだけです」

「プランクトン……」

濁ってるからダメってわけでもないのかな。ザンがもう少し細かく説明してくれた。

「海藻が枯れて、溶けて栄養になるんです。そこへプランクトンが……」

——途中から、私は他のことで頭が一杯になっていた。

いや、決してザンの言っていることが難しくて頭に入らなかったわけじゃないよ！

子どもの頃からこの世界をイメージしてただけあって、愛海先生 of 作った物語はかなりの広がりを見せている。でも、先生は物語を完成することなく死んでしまった。

これ、大丈夫なの？ 先生が細部まで設定せずに死んでしまったこれからも、この人々の暮らしはちゃんと成り立っていくんだろうか？ そして、この海に生息しているたくさんの生き物たちは？

だって、世界は循環している。海も陸も空も、密接につながっているはず。でも、陸上は一面砂の世界になってしまっているし、空に夜は訪れない。月がないなら、潮の満ち引きだってないのかも。物語の中だということで、不安定さは最初から感じていたけど、生命の息吹を身体中で感じた私は、本格的に心配になってきてしまった。

ああ、もう……誰か相談相手がいいのに。

「リク？」

ザンに声をかけられて、我に帰った。

「あつ、ごめんなさい。すごい光景でびっくりしちゃって。それにこのお城って、裏側があったのね……って違う、こっちが表側になるのか」

そう、私が泊まらせてもらってる部屋のある方が、城の裏手になるんだろう。

「ザンは、表側に住んでるの？」

聞くと、僕の家はあそこです、と教えてくれた。テラスからフィッシュボウルに沿って岩棚があり、その先のちょっと広くなった所にやはりドーム状の建物が一つあった。

「あそこに、両親と暮らしています」

「そっか。本当に優しくて素敵なお両親だね」

私が言つと、ザンはにこりとした。

「ええ、良くしてもらってます」

え、と私が口ごもると、ザンは続けた。

「本当の両親ではないんです」

ザンは自分の家の方を見やった。

「僕は、女神マーナの弟としてこの世界に誕生したのですが、その時にはすでにある程度成長した姿でした。両親——シュリとヤーエは、この城を女神から預かっている城主なのですが、僕を可愛がって育ててくれたんです」

「そうなんだ……」

私もザンの視線をたどる。ちょうど向こうでその家の両開きのドアが開いて、ヤーエさんが出てきたところだった。ザンと同じような合わせの上着にサッシュベルト、ゆったりしたパンツのようなものを履いている。

ヤーエさんはこちらに気づいて、手を振ってくれた。ザンが軽く手を上げ、私もつられて振り返す。ヤーエさんは、今出てきたドアの方をちょいちょいと指さした。寄っていかない？ という感じかな。

不完全とはいえ、愛海先生が生み出したこの世界が、愛おしくなってきた。ううん、不完全だからこそ……かもしれない。

私はザンに向き直って言った。

「あの、私もちよつと頑張ってみようかな。み、巫女として？ 何かあったら女神さまにも伝えてみますから。そうしたら、この世界ももっと豊かになるかもしれないし」

すると、ザンはこう言った。

「居心地良くしてどーすんだ」

「え？」

「あれ？」

私と、そして当のザンが、きょとんとして顔を見合わせた。

私の中に、ザンの二重人格疑惑が芽生えた瞬間だった。

8 編集？

結局、私はザンの家には行かなかった。ヤーエさんは用があるようで、いつの間にか家の前からいなくなっていた。

「えーと……僕、今なにかおかしいと言いました、ね。忘れて下さい」

ザンが、疑問符をいっぱい浮かべて首をかしげたまま、私に言う。私はどうしていいかわからないまま、へらつと笑って、

「はは、気にしてないから。そ、そうだ、今日中にもう一度、先生に会いに……えっと、女神さまにご神託を受けに行きたいと思ってるんですけど、いいですか？」
と聞いた。

だって昨夜、勝手に動くなって言われたしね……ああ、あの時かなんか変だなんて思ってたんだ。そうだった。

「あ、はい、わかりました」

ザンは気を取り直したように、

「そう、リュウから報告を受けたんですが、ウミガメの助けがあるとはいえ、リクもさすがに海上との行き来がとても大変そうだから……。あそこを見て下さい」と後ろを振り返った。

後ろにはもちろんフィッシュボウルがあるんだけど、ボウルの外側には階段が作りつけられていて、縁まで歩いて登れるようになっていた。階段を目で追って見上げて行くと、ボウルの縁に沿って巨大な筒状の珊瑚がいっぱいくっついてるのが見えた。並んでくっついている様は、まるでパイプオルガンのようだ。

そして、その珊瑚から、一定間隔で大量の水泡がぶわつと吹き出して、高みへと上って行くのが見えた。

「ウミガメと一緒に、あの泡に乗って行ったらどうかと思うんです。そうすれば、少なくとも行きは短時間で海上まで行けるでしょう?」

あつ。私はようやく思い出した。

これ先生の設定資料にあったよ! プロローグの方をじっくり読みたくて、ついつい資料の方は斜め読みしちゃってたから、内容がうる覚えだったけど、あつたあつた!

でもこれ、エンディングに使うネタじゃなかったつけね。ヒロインがついに地上に戻るという場面はこんな感じ、って書いてあったような。涙、涙のお別れシーンで使うはずのそれを、今ここで使っているんでしょうか?

はい、いいですよ。背に腹は代えられない。まさか先生だつて、ヒロイン(私だ)が何回もラグリーン城と海上を行き来するなんて思ってたなかっただろうし。

「ありがとう! そうさせてもらっわ。えっと、またカメさんに来てもらわないといけないけど、どう……」

言いかけたとたん、急にフィッシュボウルを回り込んで巨大なウミガメが姿を現した。すーっと滑るように、私の前までやって来る。

「なんかこの子、この前もタイミング良く来てくれたんだよね。まるで、こつちの話を聞いてるみたい」

私はつぶやいた。

「そうなんですか? 何か、巫女としての力を使ってカメを呼んでいるのかと思いました」

ザンに不思議そうに言われて、思わず首を横にぶんぶん振る。ないないないない。

でもザンは本当にそう思ってるみたいで、

「水の中は音がよく伝わりますからね。きっとウミガメには、リクの声が届いているんですよ」

と、青緑色の瞳を細めて微笑んだ。

「ま、まあそうだとしても……いつも悪いな、乗せてもらって。こういう時って、お礼に何か食べさせてあげたらいいのかな」

「そうですね、ズーイに用意してもらっておきます。アオウミガメは海藻とか海草を食べますよ」

ちょっと待って、海藻と海草ってどう違うんでしょうか。

聞くと、ザンは「海藻」藻類。胞子で増える。ワカメとか昆布とかはこっち」「海草」花が咲いて種で増える。陸から海に戻ったもの」と教えてくれた。

この世界を理解するには、まだまだ勉強が必要なようです。

ウミガメくんの背に乗せてもらい、空気の中——というかこの少しとろりとした空間をフィッシュボウルの上に向かう。そしてパイプオルガン珊瑚の上で待機していると、少しして下からぶわっと水泡の塊が駆け上ってきた。

「へぶっ」

一気に海水の中に突入して、ウミガメくんごと上昇する。圧力っ、圧力が半端ないっ！

「っぶあ！」

でもありがたいことに、溺れる恐怖を味わうことなく短時間で、海上に出ることができた。

今日は、ずうっと遠くの方に浜が見えていた。あそこに上がったら楽なんだけど、ちよっと遠すぎるかな……それに、陽が容赦なく照りつけているから、結局あまり長い時間は海上にいられないよね。ウミガメくんが疲れないように、私はその背から降りて水中に入ると、甲羅に軽くつかまるようにした。こうしておけば、ウミガメ

くんも前回ほどにはすぐに疲れずに済むだろう。

「先生！ 愛海せんせい」

呼ばわつてみる。

とたんにすぐそばの海中から真つ白な姿が、ドルフィンジャンプして現れた。愛海先生だ。空中で一回転、長い尾が弧を描き、きらきらと飛沫を光らせながら再び海中へ。

そしてまた先生は、すうつと海上に立つようにして現れた。

「あー気持ちいい、こんにちは璃玖さん」

……まだ酔つてるよ。

「こんにちは愛海先生。今日は単刀直入にお聞きます」

私は先生を見上げた。こくん、と喉を鳴らしてから、聞く。

「私、なるべく早めに会社に戻りたいんですけど、戻るにはどうしたらいいんでしょう？」

すると先生は、軽く首をかしげた。

数秒の間が、雄弁に事実を物語る。じわりと額に汗が浮くのを感じる。

「そういえば、私も家に戻りたいけど……ここには私の家、ないわよねー」

ああつやつぱり！ 先生は、戻る方法を、ご存じない！

それに、今ではつきりした。先生は、自分が亡くなっていることには、気づいていない。少なくともはつきりとは。

「でも、私にとってはここも『還るべき場所』みたいなものねー、とても馴染んだ、心地いい世界だからー」

ご機嫌でくるりと一回転する先生。

「そんなあ……」

私はシヨックで目が回りそうになった。いや、きっと、きっと何か方法はあるはず。考えよう。あきらめちゃダメだ。ただ……長期戦は覚悟しないとならないかも。

「だから、私の作ったこの世界を大事に育てていきたいわ。ラグーン城や城下街に近づくとな、中の人が“女神さま”って呼んでくれるのがわかるの。きっと何かできることがあると思うのよねー」
愛海先生は腕を組んで、自分の言葉にうんうんとうなずいた。

私はそれに応えて言った。

「そうですね。私も協力しますよ。一応、女神さまの声を聞く巫女、ってことになってるので」

「ホント!？」

先生が顔を輝かせたので、あわてて付け加える。

「でも元の世界に、会社に戻るまでですよ！　くらッシュ、いえ、担当の倉本の代わりです」

そうよ。私もペーパーとは言え編集者のはしくれだもん。というか、酔っ払ってる先生一人には任せておけない。もし先生の物語が変な方向へ突っ走りそうになったら、軌道修正するのも編集者の役目だと思う。

「私、先生の世界を、『編集』してみようと思います!」

8 編集？（後書き）

次話で第一章終了！

9 死者の還る場所

そう決心したら、気持ちがすんとあるべき所に収まった感じがした。そして私は、思い出した質問をしようとした。

「あの、ザンって」

……言いかけて、やめた。

まだ、どう質問すればいいのかわからない。彼の言動が変だなんて。もう少し考えてからにしよう。

「なあにー？」

「いえ……えっと、どうしてこの世界には『夜』が来ないんですか？ つまり、海の上の『夜』ってことですけど」

別の質問に切り替える。これも、この世界を理解するのに必要そうな質問だった。

すると、急に先生の顔から笑みが消えた。

腕が力なく垂れ、アクアマリンの瞳が憂いを帯びて伏せられる。

「夜の海辺は嫌い。……辛い記憶だから、嫌なの」

辛い記憶……？

「弟との、最後の思い出なの。夜にこっそり家を抜け出して、一緒に海を見に行ったのが……」

「弟さんとの？」

最後の記憶？

先生はゆっくりと顔を上げて、私を見て寂しそうに微笑んだ。

「あのね、ザンは、私の願望なの。弟があのまま成長していたら、

きつとこんな風だろうな、っていう」

「……それじゃあ」

私は絶句した。

先生の弟さんも、亡くなっているってこと……？

待って。愛海先生も亡くなっていて、ザンのモデルである弟さんも、亡くなっている？ということは。

「まさか、私も？」

ぼろっとつぶやいたとたん、急に怖くなった。

「あの……今日は、ラグリーン城に戻ります。それじゃあ」

私は上の空で先生に言くと、ウミガメくん「戻ろう」と言った。賢いウミガメくんは、私が甲羅につかまり直すと、大きく前脚をかいて海中に入った。

「璃玖さん？ どうしたのー？」

愛海先生の声が、かすかに聞こえた。

息を止め、目をぎゅっと閉じたまま、私は海の中をウミガメくん「に引」張られて降りて行った。途中で、ふっと水の抵抗が緩くなる。とん、と着地の衝撃があり、目を開いた。広い空間、白い床、連なる巻貝の灯り。

「ごほっ……フィッシュボウルの中？」

咳き込みながらつぶやいて、ウミガメくんの背中から降りると、ウミガメくんはすいっと浮かび上がってフィッシュボウルの上から出て行った。

あ……お礼のご飯、またあげそこねちゃった。ごめん。

私はのろのろと立ち上がると、自分の部屋のある建物に戻り始めた。

愛海先生は亡くなっている。
先生の弟も、おそろく。

昔、本が何かで読んだ気がする。海は古来、“死者の還る場所”
だと考えられていた、って。

ここは物語の中の世界だと、私は思いこんでいたけど、まさか。
「死者の国なの……？」

歩きながらつぶやく。私は、会社からこの世界にただ迷い込んだ
のではなく、本当は会社で突然死してここに来たんじゃ？

庭の奥に建つ、あの小さなお社が目に入って立ち止まる。あれは、
先生が弟さんを悼んで建てたものだろうか。

それとも、私を、悼むため……？
ぶんぶんと首を振る。そんなはずは……。でも、心当たりと言え
るものがなくもないので、一笑に付すことができない。

私が泳げない理由、それは別に水が怖いからではない。子どもの
頃に身体が弱くて、水泳の授業をほとんど見学していたからだった。
でも、成長につれて克服して、今では風邪さえほとんど引かない
丈夫な身体になったのに。そのはずなのに……そうじゃなかったん
だろうか。

私に、何があっただろう？ 今ごろ、会社で、誰にも発見され
ることなく……？

部屋に戻ると、ズーイさんとリュウがびっくりした顔をして、

「リク！？」

「顔色が……」

とすごく心配してくれた。

「あ、大丈夫です。あの、また女神さまの神託を受けに海上に行っ

て来たから、疲れちゃって」

私は口の端を上げて見せた。

「ちよつと横になりますね」

「そうですね……そうですね、お休みになって下さい」

ズーイさんがかいがいしくベッドの支度を整え、ベッドサイドに飲み物を置いてくれて、

「続きの部屋におりますから、お目覚めになったら声をかけて下さいね。お食事をご用意しますから」
と言ってくれた。

食欲なんて全然なかったけど、私はうなずいて、ホタテベッドにもぐりこんだ。

横になって、延々と考えを巡らせてみる。でも、もやもやするばかりで、いい考えなんてちつとも浮かばなかった。

いつの間にかまどろんでいたらしい。気がついたら、部屋は薄暗くなっていた。ゆっくりと起き上がって窓の外を見ると、もう庭の灯籠の灯りも落とされている。

ズーイさんが、テーブルに食事を置いてくれる所だった。彼女ははつとして近寄ってきて、青緑色の瞳を心配そうに揺らめかせて私の顔を見る。

「まだちよつと、お疲れのようですね……」

「大丈夫、大丈夫ですよ。あ、お腹空いたな」

自分を浮上させようと思って立ち上がり、ちゃんとテーブルについて、魚介のスープをもらって飲んだ。味はよくわからなかったけど、温かさに少し気持ちいが緩む。

半分しか飲めずに器を置いたけど、ズーイさんは少しほつとしたようだった。

「神官から、手紙を預かっております。きつと心配なのですよ」

細長く折って結ばれた手紙を渡された。ザンから……？

「今夜もゆつくりお休み下さいね。リュウも私もおりますから、何かあったら声をかけて下さい」

ズーイさんは私を安心させるように微笑むと、食器を持って部屋を出て行った。

ドアが閉まってから、私は手紙をほどいて開いた。お見舞いの手紙だろうか。あ、良かった、文字も日本語だ……。

そこには、こう書いてあった。

『真夜中に、フィッシュボウルで』

「???」

私は首をかしげた。その文字を、何度か読み直す。何だか、急いで書いたらしくていかにも走り書きと言う感じの、その手紙。いや、意味はわかるよ。真夜中にフィッシュボウルに来てくれたことでしょ。何の話だろう……ちょっと怖いような気がするけど。それよりも。

私、ザンの前で、あの金魚鉢ホールのことを『フィッシュボウル』って呼んだことあったっけ……？

【第一章 完】

1 真夜中の金魚鉢

夜のフィッシュボウルは、かすかな青い光に染まっていた。
海は深くなるにつれ、赤い波長の光から吸収していく。そして残った、純粋な青。

まだ、ザンは来てないみたい……。

私はフィッシュボウルの真ん中に立つてぐるりと見回し、誰もいないのを確認すると、奥の一段高くなった場所に腰かけた。

白い床も、青く染まっている。足元を、数匹の細長い魚が追いかけてっこしながらすり抜けていく。

音を立てないようにこっそり部屋を出てきたから、ズーイさんやリュウにはたぶん気づかれてないと思う。でも、あんまり長く部屋を空けてもすればれたら、また心配をかけてしまうので申し訳ない。一応、上掛けの中に適当なモノを詰めて、寝てるっぽく見せかけては来たけどね。

いないことに気づかれたら、後で「また女神に呼ばれちゃって！」って言うしかないか。お手軽に呼び出される巫女だなー。

時計がないから、真夜中って言うのがいつなのかよくわからないけど、お城の中は静まり返っていた。

ラグーン城にはもちろん、掃除や料理や他の色々を担当する様々な人たちもいて——まあ、それほど数は多くないみたいだけど——昼間は歩いていると何人かとすれ違っただけど、今夜ここへ来る途中には、誰とも会わなかった。もしかして、通いで来てるのかな。夜は下の街へ帰るのかも。

——あの人たちも、みんな、現実世界では亡くなっている人たち

なのかな。ズーイさんも、リュウも、そしてシュリさんやヤーエさんも……？

考えに沈んでいた私に、後ろから声がかかった。

「みやしろ
宮代」

振り向いた。

少し離れた所に、ザンが立っている。紺色の髪が、この青い空間では黒っぽく見えた。

少し遅れて、驚きが脳を揺さぶった。無意識に立ち上がる。

この人、「リク」って呼ばなかった！

「今、なんて？」

上ずる声で聞き返すと、ザンはこちらに近づいてきて段差を降り、私のすぐ隣に立った。

「宮代、俺だ。倉本」

私は黙って彼を凝視した。

あの、青いような緑のような、不思議な色の瞳は、今は明かりを点した闇夜のように黒く光っていた。でも、姿かたちは、この世界で初めて出会った人物、ザンだ。

それなのに、倉本主任……だと？

私は聞いた。

「フルネームをどうぞ」

ザンは軽く目をすがめた。あ、今の表情は初めて見る……ザンらしく、ない。

「倉本 鷹^{たか}」

合ってる。

いや待て、ここが愛海先生の作った世界なら、先生が知ってることをザンが知ってるのは当たり前だ。何か……そう、私と倉本主任しか知らないようなことを聞いてみないと。

「倉本主任が担当したピラティスダイエット本、印刷直前に発見されたミスは？」

尋ねると、ザンは口をへの字に曲げてから答えた。

「カバーの写真が裏焼きだった」

合ってる。

カバーの校正紙を見て、写真の女性タレントのホクロの位置が左右逆なのに気づいたのは、私だ。結局あれ誰のミスだったんだろ。

ともかく間違いない、姿はザンだけど、今私と会話してるのは倉本主任だ！

「どういうことですか？」

私が聞くと、ザン（倉本主任）は「信じたか」と言いながら、さつき私がそうしていたように段差に座った。

「時間がない。手短に行くぞ」

あつ、と私は思った。いつも打ち合わせの時に、倉本主任が言う決まり文句だ。「手短に行くぞ」。

私は少し安心した気分で、隣に腰かけた。

「まず俺、倉本は今、会社の出版部の部屋にいる」
しよっぱなから「？」な言葉が飛び出した。

ザンの顔をした倉本主任の話は、こうだった。

金曜の夜、彼は他社の編集さんたちと、愛海先生の追悼飲み会をやった。お酒が大好きだった愛海先生を偲んで、それは深夜まで及んだ。

当然のように終電を逃し、倉本主任は会社に泊まりに来た。

はいはい、それ用に寝袋置いてるもんね、くらッシュ。

出版部の部屋には明かりがついていた。誰かが残業してるのかと入ってみたけど、誰もいない。

私のデスクがいかにも作業中で、バッグも携帯も置きっぱなし、デスクの下には通勤用の靴もそのまま。しかし私の私がない。

そして椅子が倒れ、床に原稿用紙の束が落ちていた。様子がおかしいのでいぶかしみつつも、原稿の束を拾おうとすると……。

「原稿用紙が、発光してるんだよな。で、すぐそばのコピー用紙の束に、その光が移ってるんだ。見てみると、こう……コピー用紙にじわじわと文字が浮かび上がっていて」

こう、と何か表現しようとしたらしい倉本主任は手を浮かせたけど、結局そのまま膝の上に下ろす。

「その文字、筆跡が愛海先生の字なんだ。宮代が先生から預かった原稿はプロローグだけだったけど、続きが——本編が少しずつ、浮かび上がってきてるんだよ」

「続き、って……」

「宮代がラグーン城に到着して。ズーイに世話になって。神官ザンに巫女って呼ばれて」

「ちょちょちょ、ちよつと待って下さい」

私はあわてて遮った。

「ずっと、私の行動を小説として読んでたってことですか!？」

「そういうこと」

ザン、いや倉本主任がうなずく。

一瞬呆然となった私は、即座に立ち直って急きこんで聞いた。

「あの、ひとつ確認したいんですが。愛海先生の書いたプロローグは三人称で書かれてましたが、浮かび上がってきた本編もそうですか？」

彼は答えた。

「そうだけど？」

よ、良かったあ——！

私は思い切り、安堵のため息をついた。

だって本編が、ヒロイン（私だ）の一人称であってごらんよ！私の考えたことがダダ漏れになってた可能性があるじゃないの！ただでさえ不思議な世界なんだから。

リュウを見たときに元カレのことを考えたこととか、やっぱり知られたくないじゃん、上司になんて。

「ただし、ヒロイン視点の三人称だったけど。たまに神視点も入るし」

「ぎょぎょっ」

げ、じゃあ私の行動が、他のキャラクターよりは細かく書かれているということにっ。しかも神視点？　ってことは、キャラクター自身の知りえない、愛海先生しか知らない出来事も入ってきてるわけ？

うわーん、先生、あまり私について変なこと書かないで下さいよ！？

「何」

倉本主任にじろりと見つめられて、私はぶんぶんと首を横に振った。

「何でもございませぬ。続きをどうぞ。そう、どうして倉本主任が、ザンの姿でこんな風に？」

1 真夜中の金魚鉢（後書き）

ザンニ重人格疑惑の真相、次話に続きます。なんとなくビクビクしながら更新中（笑）

2 半分だけトリップ

すると、倉本主任はため息をついた。

「まあ、順番に行こう。浮かび上がる文字を追っていて、宮代がどういうわけか「中」にいるのがわかった。信じられなかったけど、目の前で怪現象が起こってるんだから信じざるを得ない。それで、宮代をこっちに戻せないかと思ったんだ」

主任の話は続く。

私を連れ戻そうと考えているうちに、浮かび上がる文字による小説は、私がフィッシュボウルでザンと初めて会話した後の場面にさしかかった。部屋に戻る途中、元の世界に帰るためには先生に会いに行かないと……と思っていた場面だ。

その時、私は「かめ？」とつぶやいたのだけど、その台詞を倉本主任が見た。そして私が、カメに乗って海の上に行けなかと考えていることに気づいた。

とつさに、倉本主任は、自分のデスクの赤ペンを手に取ると、先生の文字の続きに割り込むようにして、こう書き入れた。

『ウミガメがやってきた』

「えええ！？　じゃあ、あのときやたらタイミング良くカメが現れたのは、倉本主任が赤入れたからってこと！？」

「そうなるな。小説はそのまま、カメが来たものとして進んだ。宮代が自分からカメに乗ったせいかな」

倉本主任は飄々と続ける。

「で、女神に会えればこっちに帰ってこれるかと思ったんだが。まあ、そううまくは行かなかったな」

倉本主任の言葉に、私は答える。

「だって、先生が、自分が亡くなったことにはつきり気づいてないし……酔ってるし」

「ともかくだ。それで、こっちに帰る次の手を俺が必死で考えようとしてるのに、宮代……お前はのんきにメシ食ってるわ、巫女としてこの世界を豊かにするとか言ってるわ。『勝手に動くな』と言ったのに」

それを聞いて、私は失礼ながら思わず、人差し指を彼につきつけた。
「あーっ！ ザンがいきなり『勝手に動くな』なんて言い出したの、あれ主任が書いた台詞なんだ！」

「数年のつきあいだが、宮代の性格はだいたいわかってるつもりだからな。何かやらかしそうだと思って釘をさした」

当たり前みたいな顔をして、倉本主任がうなずく。

「その後の、『居心地よくしてどーすんだ』も!？」

「俺が元の世界に戻そうとしてるのに、お前はラグーンの世界になじみかけてる。そりや俺も突っ込むわ！」

頭を小突かれた。ひーん。

「ごめんなさいごめんなさい!……え、でも」

私はぱつと顔を上げた。

「そうやって、ザンの台詞にまで割り込めるんですか？ 今のこの会話も全部書いてる？」

倉本主任は腕を組んだ。

「そこが俺にもよくわからない。今、俺はザンの身体で、宮代と会話してるだろう？ これ、俺は『書いてない』んだ」
「????」

「宮代、先生から渡された封筒の中身、全部見た？」
話が変わった。私はついていくのに必死だ。

「あ、いえ……ちゃんとは。設定資料も全部は読んでないですし」

「絵が一枚、入ってたんだ。いや…地図かな？ ラグーン城の絵？」
何でそんな疑問符だらけ？

「とにかく、この絵を手に行っていると、ザンの視点でそっちの様子が見えるんだ」

「……よくわからないんですが」

倉本主任は、私をじわりと見た。そ、そんな、可哀想な子を見るような目はやめて下さいよう。

「まあ、絵を持っている間だけ、俺とザンが二重人格になってると思ってくれ。ザンの中に俺がいる。でも、ザンは俺には気づいてない。そういう状態の二重人格だ。なんかもう、そっちの世界もこっちの世界も両方ファンタジーだな」

絵を持っている間だけ。それに、意識だけ？

それじゃあ、主任は半分だけこちらの世界にトリップしてるような状態なの？

「じゃあ、ザンは今……？」

「眠ってる。眠ってる間なら宮代と会話できると思って、真夜中に呼び出したんだ。あの手紙も、夕方ザンがうとうとした隙に急いで書いて、ズーイを呼んで持たせた。ザンは知らない」

うわ、そんな危険な橋を！

「よくそんな、思い切ったことをしましたね」

本気で感心してそう言うと、倉本主任はまたため息をついて、私を見た。

「宮代が、不安がってたからだろうが」

あつ……。私の、ために。

「いいか、宮代の姿は会社から消えている。先生のように死んで小説の世界に行ったなら、死体が消えるのは変だろう。宮代が死んだと考えるのは早計だ」

「そ、そうか。そうですね」

私が何度もうなずくと、倉本主任は少し微笑んだ。

「どんな影響があるかわからなかったから、物語の登場人物として振る舞ってるんだろう？ 大変だと思うがもう少し様子を見て、宮代が元の世界に戻る方法を考えよう。お前は一人じゃない。それを言いに来たんだ」

彼は私の腕を横からポン、と叩いた。暖かく柔らかい、血の通った感触がした。

「ありがとうございます」

するり、とお礼の言葉が出た。主任が念押しとばかりに睨む。

「あんまり無茶なことはしてくれるなよ」

「はいっ。気をつけます」

私は思わず「気をつけ」をした。本当、気をつけなくちゃ。

主任はちよつと視線をあたりに巡らせた。

「さて……あまり長く話してるわけにもいかない。俺はそろそろ戻る。ザンが目覚める前にな」

「戻っちゃうんですか」

思わず、引きとめるようなことを言ってしまう。

倉本主任は少し黙って私を見て、それから困ったように微笑んだ。

「……そんな顔するな」

私は思わず頬に手をやった。ど、どんな顔！？

「次の『夜』も、ここで会おう。な」

主任は言ってくれた。また、ザンが寝てる隙に来てくれるんだ。

そう、やっと相談相手ができたんだ、私。

「はい、また！」

笑顔で敬礼して見せると、主任は一つうなずいてから、フィッシュボウルの奥のカーテンの影に消えた。

私は一人、フィッシュボウルに取り残された。

——寂しがつてる場合じゃないよね、うん。心強い味方が来てくれた。きつと、元の世界に帰れるよ、私。

考えることは色々ある。とにかく部屋に戻ろっ、と踵を返した。

フィツシュボウルの入口に、リュウが立っていた。

「あ……」

私はあわてた。もしかして、会話、聞かれてた!?

リュウは戸惑った声で言った。

「やつと見つけた……リク、こちらにいらしたんですか。でも、なぜこんな夜中に、神官と」

ザン（倉本主任）と会ってる所は見られたけど、会話は聞かれてない。たぶん。

とつさに判断した私は、ふっ……と下を向いてから、上目づかいでリュウを見た。

「あの……恥ずかしいから、内緒にしてくれる?」

リュウはハッ、と息を飲んで、うなずいた。

「す、すみません、気の利かないことで」

無茶するなって言われたけど、この状況でこれ以上の対応はないでしょくらッシュ!

神官と巫女の恋愛フラグ!

3 街からの客人

翌朝の朝食はしっかりいただきました。昨夜はほとんど食べてないからね。ズーイさんも私の食べっぷりを見て喜んでた。

食事の後に部屋を出ると、ドアのすぐ外にリュウが直立不動で立っていた。

「おはようございます、リク。具合はいかがですか」

微妙にリュウの視線がぶれるのは、照れてるんですかねコレ。ワイルド系の顔なのに、意外とウブだなー。

「おはようございます。もうすっかり大丈夫！ フィ……じゃない、あのホールまで行ってきましたね」

「お供しましょうか？」

「一人で大丈夫です」

「あ……そう、そうですね。失礼しました」

軽く頭を下げるリュウ。はは、ザンと二人きりで会ったと思ってるんですな。気を遣わせてごめんね。

渡り廊下をいくつも渡りながら、昨夜の出来事を反芻する。

愛海先生には、先生が亡くなっていることを話していない私。そしてザン以下、この世界の住人には、ここが未完の小説の世界なのだということを話していない私。話すところの世界がどうなってしまうのか、わからないためだ。

この二つのことを隠したまま、倉本主任と会って自由に話すためには、やはり神官と巫女が恋仲で、しかもその関係を隠しているという設定がベストだと、改めて思う。

だってザンは、自分が夜中に倉本主任として私と会ってたことを知らない。そんなザンに、誰かが「巫女どのとイイ仲になっちゃっ

たみたいじゃないすか」「なーんて突っ込んだら困る。でも、そんな人はいないでしょ？ 神官様なんだし。

あ、シュリさんやーエさんだけは突っ込むかもしれないな。あのお二人にはできれば知られたくない。リュウが黙っててくれるといいんだけど……まあ、口は堅そうだけどね。

フィッシュボウルの入り口の手前まで来て、中から人の話し声があることに気づいた。ザンと……誰だろう？ 聞き覚えのない男性の声。

出直そうかと迷っていると、後ろから給仕の女性がトレイに飲み物のグラスを載せてやってきた。

「巫女さま、おはようございます」

「おはようございます。お客様？」

こちらの話し声が聞こえたらしい。

「リク！」

中から呼ばれて覗き込むと、ザンが駆け寄って来るところだった。うは、男性が自分に向かって駆け寄って来るところって、ちょっとキュンと来るね。

「昨日、体調を崩したと聞いて……もう大丈夫なんですか？」

私の前で急停止したザンは、顔色を確認しているのか、長身を少しかがめて覗き込むように私を見た。

「平気平気、全然大丈夫です！ 昨日はちょっと、ええっと……女神さまと長く話し過ぎて、っていうか。でももう回復したから」

自分が死んでるんじゃないかと思って落ち込んだけど、もう倉本主任と話して落ち着いたから……なんて、説明できないわな。

「本当に大丈夫ですか？ 今日海上には出ないで、ゆっくり休んで下さい」

きっぱりと言われてしまった。ああ……愛海先生に会いに行つて

来るよーって言いに来たのに、禁止されてしまったわ。仕方ない、様子を見てからにしよう。

「わかった」

私はザンの顔を見返しながら言った。

青と緑のまじりあつた瞳……昨夜はこの瞳が黒く光って、違う表情を持っていた。倉本主任の表情。

ザンは愛海先生に似て、少し女性的と言ってもいい綺麗な顔をしている。でも、身体つきは細身ながらも筋肉質で、男性以外の何物でもない。

一方の倉本主任は、ザンとは逆に顔が怖いんだよね。夜に自転車であ走っていて、警察官の職務質問（「その自転車、あなたのですか？」）に引つかかったこと数回、と聞いたことがあるけど、さもあらんという感じ。ま、まあ、よく言えば、キケンなかほり？

彼女がいるのかどうかは知らないけど、何となく女の人にも警戒されそうだなー。気さくな、いい上司なんだけどね。

今はザンとして私の前にいる彼だけど、会社ではそんな倉本主任がザンの中から私を見ているのかな？ 自分のデスクであの怖い顔をして、右手に赤ペン、左手に地図を持って？

想像したら可笑しくなつて、思わずザンの瞳を見つめたまま頬を緩めてしまった。

「リク……？」

ザンの瞳が戸惑つたように揺れて、私ははっとした。

いかんいかん、わけもわからず笑いかけられても困るよね。気を付けなきゃ。

「お客様でしょ？」

聞くと、我に返つたようにザンはうなずいた。

「ええ。リクもどうぞ」
「？」

うながされて中に入ると、フィッシュボウルの中央に大きなテールブルが出ていて、そこに男性が一人立っていた。

第一印象は、『ベテランの漁師さん』。見た目は四十代後半くらい、短く刈り込んだ髪によく陽に焼けた肌、貫頭衣からのぞく腕は隆々と盛り上がっている。濃いタイプのハンサムなおじさまだったけど、少し疲れたような目元が印象的だった。

「街の代表をつとめておられる、ナキ殿です」

紹介されて、あいさつをした。ごつごつした手と握手する。ナキさんね。

「リクが現れた話を聞いて、ちょっと面白い提案をしに来てくれたんですよ」

「巫女どののことは、街でもずいぶん噂になっていますよ。女神マーナに会いに、海上に行かれていそうですね。ずいぶん苦労されているとか」

ナキさん——つまり町長さん？ はそう言うと、テーブルの上に広げられた紙を私に示した。

「これは、ラグーン城を中心とした地図です。ここに載っている範囲は、私たちが住むことのできる場所です」

地図。最近聞いたばかりの単語に、私は身を乗り出した。

それは、絵地図のようなものだった。いわゆる地図記号の入った地図じゃなくて、お城の位置にはお城の絵が描いてあるし、街も小さなドーム状の家をたくさん連ねて描いてある。

街の周りには、昨日テラスから見たような海草の森、海流の河などが描き込まれていて、さらに街を挟んでお城の反対側に、山がい

くつか描いてあった。

「山がある……」

私がつぶやくと、ザンが横でうなずいた。

「昨日はあまり視界が良くなって、見えにくかったかもしれませんがね。昔の海底火山のあとです」

「この中央の、イ・ハイ山が一番高いのですが」

ナキさんが、その山の絵を指さす。

「この頂上に、塔を建ててはいかがかと、今ザン殿に提案していたところです」

4 建設計画

「塔？」

ナキさんを見ると、彼は軽い身振りで、両手を下から上へスーッと上げた。割と細身の塔を表してるっぽい。

「海上まで届けば一番いいですがね。届かなくとも、ある程度の高さがあれば、巫女どのも海上まで行きやすくなるでしょう？ 何か、簡単に塔を上る手段を作れば」

「わ、私のために！？」

ナキさんは例えば、海底と海上をつなぐエレベーターみたいなものを考えてるの？

「はは、そうですね、第一は巫女どのがご神託を受ける時のために。それに、我々は海上に出ることは叶いませんが、例えば内部をこの空気で満たした塔を海の上まで届かせることができれば、街の者もついに海上の世界を目の当たりにできるわけで。いや、つまり自分が見てみたいだけなのですがね」

ナキさんは微笑む。

私は、潜水艦の潜望鏡のようなものが海の上に突き出ている所を想像した。外から見ると、潜望鏡のレンズの中でお目目がぱちくりしている、昔のアニメみたいな様子を。

空と砂浜しか見えないと思うけど、初めて目の当たりにする海の上の世界は、ここの人々の目を楽しませるに違いない。海とは違う空の青、太陽の強い光に照らされた輝く砂浜、寄せる白い波。

「すごい計画ですね」

心から感心して言うと、ナキさんはまたちょっと笑った。

「さっそく、街の者と話し合って設計図を起こしてみます。楽しみ

にしています。何かアイデアがあったら、どんどん言ってみてくださいね」

ナキさんが帰って行き、ザンと私はフィッシュボウルに残された。私はしばらく地図を眺めていた。この絵地図、ザンが描いたんだって、うまいなあ。こうしてみると、街の家々は密集してるけど、周りの土地もそれなりに動けるんだね。

ふと、ザンが話しかけてきた。

「リク、山を見に行ってみますか？ 街を通って」

「今から？ いいの？」

「ああ、ズーイとリュウには知らせておかないとね。心配しますから」

ちょうどグラスを下げにやってきた女性に伝言を頼むと、私たちはフィッシュボウルの奥から城の正面に出た。

テラスから明るい街を一望する。

身体を取り巻く空気もどきに流れが感じられ、髪が揺れた。きつと海流に影響されてるんだろうな。

いきなり、ザンがテラスの手すりの上に上ったので、私は仰天した。この下、一応三階建てくらいの高さがあるんだけど！？

「ちよつ、危ないザン、降りて！」

駆け寄ってザンを見上げると、彼はちよつと目を見張ってから、悪戯っぽく笑った。

「ああ……そうか。リク、ちよつと」

私の方へいったん降りると、

「失礼」

私の膝裏に手が……って、何で抱っこ？……えええ？？？

「ぞ……」

「僕に任せてみて下さい」

ザンは、私を抱えているにもかかわらず、軽い動作でテラスの手すりに腰かけると、長い足をひよいと上げて、座った場所を中心にぐるりと回転した。

テラスの、外側へ。

「――！」

ザンが足で軽くどこかを蹴り、私たちは宙に投げ出された。とっさに、ザンの首にしがみつく。

こういうときって時間がゆっくり感じられるものなのか、落下のスピードが緩やかなような……緩やか？

とん、と軽い振動があり、ザンの足が海底の砂を少し舞い上げた。彼は私をそつと降ろしてくれた。ラグーン城の前庭なのか、ソフトコーラルがゆらゆらと揺れている。

「びっくりしましたか？ こうやって降りても大丈夫なんですよ」
口をパクパクさせている私に、ザンは笑いかけた。笑顔が近くて、私はあわてて一歩離れる。

「海の上の世界よりも、空気に抵抗があるので。まあ、逆に飛び上がるのは無理ですけどね」

「心臓止まるかと思ったよ……！」
ため息をつく私に、すみません、とザンは肩をすくめた。

ん？ 待つて、今の会話で何かおかしいところなかった？

私はもう一度会話を振り返ろうとしたけど、ザンが

「それじゃ、行きましよう」

と歩き出してしまったので、ひとまず後をついて行くことにした。

うーん、今の会話、倉本主任も読んでいるはずだから、後で聞い

てみよう。何がおかしかったのか。

前庭はそのまま緩やかな坂道になり、街へと続いていた。

街の家々はやはり小さなドーム状をしていて、それらがくっつきあうようにぎっしりと並んでいる。その間の砂地の道を、ザンと歩いて行った。

街の中心の方は屋台村になっていて、生活に必要なものはそこで売り買いされているらしい。

あまり人通りは多くなかったけど、時々すれ違う人々はこちらに会釈してくれるし、子どもたちも笑いかけてくれる。

街の人々は、男性は貫頭衣とぴったりしたズボンにサッシュベルト、女性はズーイさんのようにベアトップと巻きスカートという服装で、ザンや私のような服装の人は見かけなかった。

だからきつと街の人は、私たちを見ただけで『神官』『巫女』だとわかるのだろう。

なんか、目立つちゃって嫌だなあ。私も一般女性と同じ格好したい……。

そんなことを思っていると、ザンが

「リク、あれがイ・ハイ山です」

と指さした。私は顔を上げた。

前方の、街が途切れたその先に、山が見えた。

「わ、本当に海底の山だ……」

思ったより高くない。登ってもそんなに苦にならなさそうだ。海藻や海草などは生えていない、ごつごつした殺風景な黒い山だった。「僕の記憶は四、五歳のころからですが、ずっと変わらなかった景色がついに変わるのかと思うと、ちょっとドキドキしますね」

ザンは、じつと山を眺めた。

私は、山の頂上に塔が立っている所を想像した。

そしてふと、聖書に出てくる『バベルの塔』を思い出した。人間が天まで届く塔を建てようとして、結局挫折する話だったわけ？人間の業や奢りを戒める内容だったような気がする。

海底から、女神のいる地上まで届く、高い塔——そんな塔を建てても、大丈夫なのかな？ 愛海先生は怒ったりしないと思うけど……。

一抹の不安を覚えた私は、愛海先生に聞いてみなくては、と心にメモをした。

ラグーン城に戻るころにはずいぶん時間が経ってしまったて、結局愛海先生に会いに行かないまま、『夜』になってしまった。私は夕食後、倉本主任に会える真夜中まで、部屋で退屈な時間を過ごした。あー、何かヒマつぶしがあるな、これ。

4 建設計画（後書き）

次話、再び倉本主任との逢引き。なんか怒ってる……？

アルファポリスファンタジー小説大賞に、『離宮の乳母さま』と『イマジネーション・ラグーン』をエントリーしました。詳細は活動報告もしくはアルファさまホームページにて（バナーから行けます）。初エントリー、楽しませてもらっちゃいます！

投票すると抽選で賞金が出るそうですよー 一緒に楽しみましょう

5 ほっとする時間（前書き）

9 / 2 修正 話が次の内容と前後してましたすみません！！

5 ほっとする時間

城が寝静まった頃、私がまたこっそりとフィッシュボウルに行く
と、ザン（倉本主任）はすでに待ち構えていた。

「こんばんは、倉本主任」

近づいて、瞳が黒いのを確認してから話しかける。

「……みやしる」

あ、あれ？　なんか、怒られる時の雰囲気かひしひしと。原因は、
アレ……？

「あのう、神官と巫女が付き合ってることにしたの、まずかったで
すか？」

「……いや……確かに色々都合はいいし、展開が早まっただけと
言えばそれだけなんだが」

倉本主任は視線を逸らすと、ながーい溜息をついた。

「元々、ヒロインは神官にほのかな恋心を抱く設定になってたよう
だからな。あくまでも、ほのかな、だぞ」

「ええ、そりゃ、もともとヒロインは小学校高学年くらいって設定
でしたから、そんな愛憎渦巻く展開にはなりようが……」

答えた私は一つ大事なことに気がついて、あ、と声を上げた。

「そういえば、いわゆる『巫女』って処女が基本なのかなあ」

がく、と倉本主任の膝から一瞬力が抜ける。わあ、ザンの身体で
こういうリアクションって新鮮。

「……つく。今の台詞には突っ込まないでおいてやる。だが、少な
くともこっちの世界で男と変な関係は持つなよ！　ザンに限らず、
だ！」

「言われなくてもわかってますよう」

私は肩をすくめ、上目づかいで主任の様子を窺った。何だか今日、機嫌悪いな。

「そうだ主任、今日、変だと思ったことがあったんですよ」

話を進めよう。私は城から出た時のことを主任に話した。テラスから飛び降りてもここでは大丈夫なのだ、と言った時のザンの説明に、何か違和感を感じた事を。

倉本主任はうなずき、私に座るようにうながした。二人並んで、長椅子に腰かける。

「物語的に、変だよな。ザンが地上の世界を知ってるみたいなセリフだ」

「え？」

「『海の上の世界よりも、空気に抵抗がある』って説明してただろう。あれは、この世界しか知らない人間には言えないセリフだと思う」

「あっ……」

そうだよな。ここの人は生まれた時から、こういう空気の中で暮らしてるんだから。

「ザンは、記憶があるのは四、五歳のころからだと言っていました。それからずっとここにいます」

「じゃあ、ここに来る前は地上にいた設定なのかな。それならまあおかしくはないが……いや、でもやっぱりちょっと不自然か？」

「たいしたことじゃないですけど、つじつまが合っていないと何だか変な感じがして」

はあ、と私はため息をついた。小さな緊張が続いてるから、地味に疲れるんだよね……。

「今日は、塔の話が出ていたな」

倉本主任の言葉に、顔を上げる。

「一応、この世界では、海の上は女神の領域なんだよな。女神と巫女しか立ち入ることのできない世界。そこと海底がつながる……」

「はい。だから、この話はちよつと愛海先生にもしてみようと思つて」

「そうだな」

「あの、倉本主任」

私は尋ねた。

「そつちつて、今はいつなんですか？」

「土曜日の午後。宮代がいなくなつた金曜日の、翌日の夕方」

「あ、こちらの方が時間が早く流れてるんですね」

戻つたとき、浦島太郎にはならなさそうね。

倉本主任は横目で私を見た。

「あんまりそつちでのんびりしていると、逆・浦島太郎になるかもしれないぞ」

「うわあ。元の世界に戻れても、私だけおばあちゃんになつちゃつてたり？ それイヤ。」

「あ……倉本主任、まさかずつと起きてるんですか!？」

「別に、一日徹夜くらい大したことない」

「食事は!？」

「さつきコンビニに走つて買つてきた」

言葉が続けられなくなった。迷惑かけまくつてるな、私……。

「お前のせいじゃないんだから、気にするな」

私の表情から心中を察してくれたのか、倉本主任は軽く私の頭をポンと叩いた。そして、さつさと話を戻す。

「とにかく、その白い塔ができれば、あがるには長い時間がかかるだろう」

な」

あれ？ 倉本主任の声を聞いてたら、何だか眠くなってきちゃった。私は自分の声を意識しながら、ゆっくり返事をする。

「はい……完成を待つつもりはないです」

「そうだな。その前に、物語を破綻させずにヒロインが地上に戻る話を、俺の手で書き込めないものかと……璃玖？」

はっ、と私は顔を上げた。うわ、ウトウトしてた。

「お前な……まあ、疲れてるんだろうが」

「すみません……何だかホツとするんです。主任と話してると」
うー、目がしばしばする。私は子どもみたいに目をこすった。

「……とにかく、明日は愛海先生に会えるように行動してくれよ」
倉本主任の声が、少し遠い……。

身体が何か、がっしりしたものにもたれていた。温かくて気持ちいい。

「そりゃ、この身体で何かしたりはしないけどさ……」

つぶやきが振動になって伝わってくる。くらッシュ、意外と渋い美声。

そつえばさつき、私のこと「璃玖」って名前で呼んだ。いつもザンにそう呼ばれてるから、自然すぎて気がつかなかったな。

もう一つ、倉本主任の言葉で「あれ？」って思ったんだけど……
なんだっけ……？

目が覚めたら、自分の部屋のホタテベッドの上だった。部屋の中も、窓の外も明るくなっている。

朝！？ うわあ、倉本主任、ザンの身体でここまで運んでくれたのコレ？ ということは。

「おはようございます、リク」
あいさつするズーイさんの笑顔が、なんか意味深でした。……で
すよねー。

朝食後、私はまたフィッシュボウルの方へ向かい、出かけようと
しているザンを呼び止めて許可をもらってから、ウミガメくんを呼
んで海上へと向かった。

5 ほっとする時間（後書き）

次話、遊森的に2回目の盛り上がりです。楽しみにしてます（遊森が）

6 一・年・後（前書き）

前回と今回の話で、少し内容が前後してしまった部分がありました。前回は9/2午前中にお読みになった方、同じ話がチラリと出てくるかもしれません。修正済みです、失礼いたしました。

6 一・年・後

「海底から海の上に届く、塔をー？」

愛海先生は、面白そうに瞳をきらめかせた。

「原作者……女神さまが面白がってどうするんですかっ」

「だって、私も予想してなかったものー、こんな展開。キャラが勝手に動くって、こういうことを言うのねー」

そして、ぽんつと手を打った。

「そっか！ あ的地図に描いてあったの、塔だったんだ！」

「地図？ 小説と一緒に封筒に入ってたものですか？」

倉本主任の話を思い出して、私が言うと、先生は「そうそう」とうなずく。

「それって、先生が描いたんじゃない？」

「ううん、違うの。ヨウちゃんが……弟が描いたの、四歳の時」

四歳の子が描いた、地図？

ははあ、それで倉本主任、「地図のような絵のような」みたいな言い方をしたのね。

「当時七歳の私が海の底のお話を思いついて、弟に話したら、弟が描いてくれたのよー。参考にと思って、小説と一緒に入れておいたのー」

先生はクスクスと笑った。

「青いクレヨン一色で、お城やら街やらがガッツと描いてあって、わかりにくい絵だね。山の上に棒みたいなのが描いてあって、てつきり海底火山が噴火してるところだと思ってただけど、あれが塔だったんだわー。なるほどなるほど」

先生はうなずいてるけど、女神さまはたった今、それに気づいた

のよね？　なのに、お話の中ではすでに塔の話が出てるのは何でだろ？　弟さん〃ザンが考えたのかなあ。

先生は飛沫を輝かせながら、私の周りをすいーっと泳いでまた海の上にすらりと立った。

「そっか、海の上を見に来るのかー。空と砂浜だけで、みんな喜んでくれるかしら？」

「初めての光景だから、きっと感動だと思いますよ。でも例えば、緑があってもいいかも」

何気なく提案してみると、先生が身を乗り出した。

「それいいわね璃玖さん！　森があってもいいかもしれない！」
「森、ですか？」

「うん。今はこんなだけどー」

先生は手を振って、辺りを示した。

「もうちよつと何とかしようかなって。ほら、森の養分が水に溶けて川に流れて、海が豊かになるって話、聞いたことないー？」

「ああ、あります。そういえば」

『森は海の恋人』だっけ？　そんな言葉も耳にしたことがあるような。

「いいと思わない？　ラグーン世界にとっても、ここを見に来る人にとっても」

先生は機嫌良く笑って、

「塔ができるまでにはずいぶん時間がかかるだろうから、その間に少しは木々が育つかない？」

「え、女神様でも『森ができました』の一文で森を出現させることはできないんですか？」

驚いて聞いてみる。

「だってなんか、後から急につじつま合わせするみたいで変じゃない？ 整合性がないっていうかー」

ほう。ヨッパーが整合性を説きますか。

でもきつと先生基準では、いくらファンタジーだからってやりたい放題やるのはどうか、っていう美学みたいなものがあるのかも。

「そうですね。でも、塔の方は大工事でしょうから、完成を見届けるほど長くは私ここにいられませんよ。早く会社に帰らないと」

私はウミガメ君の甲羅につかまっただま、ため息をつく。できれば月曜までに戻りたいんだけどなー。

まあ見本出しも終わってるし、数日なら倉本主任が有休でどうにかごまかしてくれると思うけど。

「ふふ。それなら、早く塔を見られるようにしてあげよつかー」

先生が私に顔を寄せて、内緒話をするように言った。その神々しさ（女神なんだから神々しいの当たり前だけど）に、ドキドキする。

「み、見られるように、って？」

「時間の経過よ。お話の展開には必要よねー！」

先生はふわりと身を起こして、両手を広げた。先生を取り巻く真っ白な光が、急に強くなった。

「行くわよー」

「え？ え？」

まぶしさに目を開けていられなくなって、私は目を覆いながら叫んだ。

「時間の経過ってなにー！？」

——光が収まって、私はおそろおそろ目を開けた。

自分も、目の前の愛海先生も、何も変わってないように見える、けど……。

先生がちよいちょいと後ろを指さすので、私は振り向いた。

遠くに見える砂浜に、鮮やかな若葉色の一帯が出現していた。

「一年経って、森の苗木がずいぶん育ってきたところよー」

うふふ、と嬉しそうな愛海先生。

私は自分のあごが、ガクンと落ちるのを感じた。

「っせんせ……一年って、ラグーンの世界も？ 一年後になってるんですか!？」

「もちろん、そうよー。塔もずいぶんできてるんじゃないかしら、計画倒れになってなければだけど」

「下、どうなってるんですか!？」

声をうわすらせる私に、女神様は首を傾げてにつこり。

「さあ。みんなそれぞれの生活を営んで、私はタッチしてないわ」

「先生！ 私は早く会社に戻りたいんですってば!」

半泣きになって言うと、先生はちよつと「しまった」的な顔をして、私の手を取った。

「ごめんなさい、それもちゃんと考える！ 私の考えた世界なのに、どうしたらいいのかわからなかったけど、もしかして璃玖さんがヒロインとしての役割を終えたら、帰れるのかしらー？」

「ヒロインとしての、役割？」

涙が引っ込んで、私は聞き返した。

「そう。ヒロインが何か行動して、物語として何か区切りがついたらいいんじゃないかな、なんて思うの。もちろん、『めでたしめで

たし』系でねー？」

私は、透き通る海の中で魚が泳いでいるのを見つめながら、しばらく考え込んでしまった。

役割……。

ウミガメ君の背につかまって、海の中を戻って行く。

ラグーン城とその周辺が見えてきて、私は目を見張った。

うわー、ホントに塔ができてるよ！

まだ上の方がいかにも建設中という感じだったけど、サンゴだか石灰石だかできた真つ白な塔が、イ・ハイ山の山頂に建っていた。まるでねじった棒状のキャンディみたいで、メルヘンチックで可愛い。誰のデザインかなあ。

海の上までは、あとほんの数メートルというところ。完成したら、一体どうなるんだろう……。

ラグーン城のフィッシュボウルに戻る。

ズーイさんに頼んで、フィッシュボウルの隅に海藻を入れた壺を用意してあった。それは今日も、ちゃんとそこにある。

取り出して彼（雄雌の区別つかないけど）に差し出すと、彼はパクリとくわえて悠々と上から出ていった。どこかお気に入りの場所で食べるのかしら。

私はこの一年、ここでどんな風に過ごしたことになるんだろう？ もうつ先生、無茶苦茶なんだからっ、何が整合性だ！

「リク」

声がして、私はおそろおそろ振り向いた。

奥のカーテンの陰から、ザンが入ってくるところだった。

少し髪型が変わってる。前髪を伸ばしたらしい。一年後のザンなの……？

「お帰り。今日はずいぶん時間がかかったから、ちょっと心配したよ」

近寄ってくるザンの口調が、以前と違う。フレンドリーになった、っていうよりはむしろ……甘さ増量？

嫌な予感が、イヤーな予感がします！

固まる私の前に立ったザンは、甘やかな笑みを浮かべて私の頭を自分の胸に引き寄せると、私のおでこに——キスをした。

「疲れてない？ あちらで何か飲み物でもいいかですか、婚約者どの？」

7 婚約者

このままじゃ私、愛海先生の義妹になっちゃうんですが。

自分の部屋の窓枠にあごを乗せて、私はぼつねんと窓の外を眺めていた。

もう『夜』で、明かりは落ちているけど、街にはまばらに常夜灯らしき明かりが見える。都会の星空のように。

そう、私の部屋も違う場所になってたのです。お城の中ではあるんだけど、別棟のザンの家やフィッシュボウルにかなり近い、お城の正面側。

そりゃ、部屋がフィッシュボウルに近い方が、夜中に倉本主任に会うのが楽だなーと思ってたことは認めるよ。でもまさか、こんなことになるとは。

ホタテベッドまで、前の部屋よりグレードアップしてる。貝パールのようなものがあっちこっちビーズのようにちりばめてあって、キラキラしすぎて落ち着かないったら。

私はため息をついた。

さっきフィッシュボウルでザンに衝撃の言葉を告げられてからは、呆然としている間に手を引かれ、ザンの家の裏にある庭に連れて行かれて、そのベンチでお茶した。

並んで座った身体の距離が近い、今までとは段違いに近い。完璧に恋人同士の距離。

シュリさんがどこから帰ってきて、

「やあ、リク」

とにつこりしていたけど、その笑みもなんだか「全てわかっているよ」的な笑みで、あああ親公認かい！と心の中で叫んでしまったよ。

……そりゃそうか、恋人じゃなくて婚約者だもん……。

「あの塔、考えてたのよりちょっと可愛らしすぎたよ。白にしたから余計」

なんてザンに照れ笑いをされ、私は曖昧に微笑みながら首を横に振る。ザンが考えたんだね、あの塔のデザイン。

「今日、漁師たちの会合にちよつと顔を出したんだけど」

ザンは続ける。

「リクが女神マーナに頼んでくれた『海の上の森』のこと、みんな喜んでいたよ。海がさらに豊かになるって」

「そ、そう。良かった」

まっすぐ見つめられ、私はさりげなく飲み物のグラスを手取ることで視線をそらした。

ザンのひたむきな瞳にドキドキするのも、そしてそれを倉本主任に気づかれるのも、本当にほんつとーに困る。

うつ、早く一人になって落ち着きたい。すでに結婚してましたーじゃなくて良かった。ザンと一緒にの部屋じゃなくて本当に良かったよ。

先生の小説は全年齢向けファンタジーだから、もちろんそういうシーンはないだろうけど、ザンを通して倉本主任がいると思うと色々と悶絶モノですから。

「何だか……リクは僕にはもったいないような女ひとだな」

ザンが、ふと目を伏せた。長いまつげが影を落とす。

「僕は、君のように女神の声を聞くわけでもないし……自分が何のためにここにいいのか、わからなくなる時があるんだ」

私はつい、ザンをじっと見つめた。

この世界の人たちは、物語が完結していなくても、たくましく地に（海底に）足を着けて、生活を営んでいきつつあると思ってた。でもザンは違うんだ……どうして？ やっぱ、生い立ちに関係があるの？

それを理解するには、私はザンのここでの人生を知らなさすぎる。だって、どうせ別れる人だと思って、この人の表面しか見てこなかったんだもの。

色々聞いてみたいことはあったけど、ここを去る予定の私は、聞くべきじゃないと思った。

「何かあると、みんながザンに報告しに来るじゃない。この世界全体を把握してる人って、必要だと思うけど？」

私は、それだけ言った。こんな上っ面な励ましで、ごめん。

「そうかな」

それでもザンは表情を緩めると、そつと手を伸ばして私の髪を撫でた。

「リクのことを幸せにできたら、自分がここににいる意味も実感できるかな。……大切にするからね」

また、宝物みたいに大事に、胸に抱き寄せられた。少しざらつく生地でできた服の向こうで、脈打つ鼓動。

ハッ、されるがままになってる場合じゃない！ 私はパツと身体を離れた。

「リク？」

「つうえほっ、げほ！ んあ、なんかむせちゃった、何だろねえ、ははは」

どんなごまかしだよ。

……今夜も倉本主任に怒られそうな予感……。

私は、まさに海の底に沈んだような気分で落ち込みながら、真夜中を待った。

はい、『くらッシユ愛の説教部屋』です。

ザン、じゃなくて今は倉本主任の彼が、腕を組んでむっつりしている前で、私はしおらしくうなだれていた。

真夜中のフィッシュボウル。白い壁も床も、泳ぐ魚たちも、澄んだ青に染まっている。

そんな幻想的な空間で交わされる言葉が、これ。

「お前、俺にナニを読ませたいんだ!？」

「私のせいですか!？」

「神官と巫女が恋愛関係っていう設定にしたのはお前だが!」

「うわあんそうでしたごめんなさいごめんなさい」

で、でもさ、私がこの世界にトリップしてきた時点で、ある程度しょうがないこともあると思うの! 小学生なら起こり得ないことでも、二十六歳OLなら起こってしまうってことは!

いや……そこまで考えなきゃいけなかったのかな。私が考えた設定を元に、ザンはこの一年で恋を育んでしまった。悪いこと、しちゃったのかな……。

「まあ、時間が飛んだのは宮代のせいじゃない。その間に勝手に事態が進行したのはしょうがない」

まるで私の考えを読んだかのように、倉本主任。この人は本当に、私の表情をよく読んでしまう。

「とりあえず、結婚式まではどうにかして守ってやる」

「何を？」

「お前の貞操！」

「……ああ」

「ああって……」

とうとう倉本主任は脱力して、長椅子にどっかりと座り込んだ。自分の片膝に片ひじをついて、もう片方の手で長椅子の片側をちょいちよいと指す。私もそこに座った。

つまり、私とザンが怪しい雰囲気になっちゃったら、倉本主任が赤ペンで邪魔を入れてくれる、ってこと？

「でも……そんな、倉本主任だつてずっとこちらを見張ってるわけにはいかないでしょ？ 少しは寝て下さい。そう、今これから！

私、朝になつてもなるべくザンに会わないようにしますから」

「わかった」

「食事もちゃんと取って下さいよ？」

「わかった」

絶対この人聞いてないよ。でも、何か考え事をしているようなので、私はいったん口をつぐんだ。

8 囚われる思い

「ヨウちゃん、か」

ぼそり、と倉本主任がつぶやいた。

ああ、弟さんのことを考えてたのか。

愛海先生は、弟さんのことをすごく可愛がってたんだな。弟さんの描いた絵を、ずっと大事に持ってたくらいだもん。主任もそのことを思ってるんだろう。

そんな弟さんをモデルにしたザンと、何だか変なことになっちゃって、ごめんなさい。

「あの設定、やっぱり入れたらいいんじゃない……？」

「あの設定？」

「『巫女は処女でなくてはならない』……そしたら、結婚だって形ばかりに……」

そこまで言ったものの、私は罪悪感を覚えて口をつぐんだ。

そして、自分が罪悪感を覚えた事に、ショックを受けた。

もう、私はザンのことを、ただの小説のキャラクターだなんて思っていないんだ。だから、嘘をついたり傷つけたりしたくない。

……ちよつとちよつと、すっかりしないと。私は帰るんだよ？

元の世界に。

「こいつ、さつきも、巫女がなかなか海上から戻ってこないって、何度も海面を見上げてた」

倉本主任が、ぼそつとこぼした。

そんなこと言わないでよ……その顔で、その声で。

そう思ったけど、私は黙って彼の話を聞く。

「ザンはたぶん、結婚して家族を作ることに、人一倍あこがれてる

んだろうと思う。養父母に可愛がられて育ったとはいえ、神官という身分があるために他の家庭との交流もないだろうから、ごく普通の家庭がどんなものか知りたいという気持ちも強いんだろう」

私がじつと主任を見つめると、彼は肩をすくめた。

「いや……俺も結構フクザツな家庭で育ってるんでね。色々、ザンの気持ちを想像してしまう」

「そう、なんですか？」

……もしかして、ザンの目を通してラグーンの世界にいるせいで、倉本主任はザンにずいぶん感情移入してるんじゃないだろうか。

「でも、私は帰るんです！」

私は、ザンの姿に宣言するように言った。

「きっかけを作っちゃったのは私で、それは悪いことしたなって思いますけど。でも、本当の結婚なんてもちろんできないし、しません。今日は状況把握に手一杯で何もできなかったけど、必要なら明日からだって、つれない態度を取るくらいやってみせます」

ああ……落ち込む。ザンみたいな人を、嫌いでもないのに振らんくちやならないなんて。振る側だって辛いんだっ。

「早く、そっちに帰りたい」

口に出したら泣きそうだよ、もう。

不意に、倉本主任の手が私の肩に回った。

ぐっ、と力が入って、抱き寄せられると、思った。

——彼は、そつと手を離して言った。

「……このまま、お前を連れて帰れたらいいんだけどな」

視線が絡み合った。でも、それも少しの間だけで、逸らされる。少し、沈黙が落ちた。

主任が、自分の膝をポンと叩く。

「余計なことを言って悪かった！ 璃玖がこっちに帰ることだけ考えよう」

「そうしましょう！」

ドライに行こうドライに！ 元々私はそういうキャラじゃないの。

「で、言いにくいんだがな、璃玖。結婚式まで、たぶんもうあまり時間がないぞ」

「え？」

「ザンとナキが、話してたんだ。塔の完成セレモニーと結婚式を、同時にやったらどうかって」

それを聞いたとき、私が考えたのは、自分の貞操の危機のことなんかじゃなかった。

前回の『夜』に倉本主任が言ったセリフで、何がおかしかったのかに気づいたのだ。

あのととき、まだ塔は計画段階で、デザインも何も全く決まっていなかったのに、倉本主任は言った。

「白い塔」って。

なぜ、これから建つ塔が白だとわかったの？ 愛海先生の弟さんが描いた塔は、青いクレヨンで描いてあったのに？

それに、だんだん私のことを「璃玖」と名前で呼ぶようになってきて……。

私は背筋がぞくりとするのを感じた。

倉本主任とザンの人格が、混ざり始めてるんじゃないだろうか？ このままだとどうなるの？ 倉本主任もこちらの世界にとらわれて、戻れなくなるんじゃない……。

早くこの物語を終わらせないと、取り返しのつかないことになるかもしれない。

先生は何と言ってたっけ？ 区切りとなるような出来事が終わって、私がヒロインとしての役割を済ませれば、元の世界に戻るかも……？

『もちろん、『めでたしめでたし』系でねー』

一つ、その条件を満たすことができる方法がある。

私は密かに、ある決意を固めた。

本当に倉本主任が危なくなったら、この方法を実行するしかない。私のために、主任を巻き込むわけにはいかないよ。

「璃玖？ また疲れてボーっとしてるのか？」

倉本主任が、私の前で軽く手を振る。

「考えてたんですよ。どうしたらザンと結婚しないで済むかって！」

私はわざとつぼく、少しイライラしている演技をして主任をにらんだ。

主任には、気づかれないようにしなくては。

8 囚われる思い（後書き）

9 / 6 拍手小話更新しました！

9 心残り

翌朝の朝食後、私はズーイに貝殻インターホン（？）の使い方を聞いて、ザンに連絡をした。倉本主任に言った通り、とりあえず今朝は顔を合わせないようにしたかったので、こうやって簡単に女神のご神託を受けてくることを伝える。

ザンもこれから用事があるらしくて、特に突っ込まれずにほっとしたよ。

自分の部屋を出てすぐの所でウミガメくんを呼んでみたけど、来なかった。

お、倉本主任、ちゃんと私の言ったことを聞いて少し仮眠を取ってるのかも。よしよし。

フィッシュボウルの外壁を一人で登って、上からあたりを見回してみたら、城の裏手の方でウミガメくんを見つけることができた。今までに比べたら面倒だけど、大した労力でもない。私はもう一度フィッシュボウルを降りて、ウミガメくんのいた方向に向かった。

その途中、渡り廊下で呼びかけられた。

「巫女殿、おはようございます。ちょうど良かったです」

町長のナキさん（実は一年ぶり）が、微笑みながら歩み寄ってくる。

な、なんかこの人、迫力増したなー。やっぱりちょっと疲れてそんな感じはあるけど、眼光鋭いというか。塔の建設プロジェクトに燃えてるのかしら。

「おはようございます、どうしたんですか」

「塔の完成も間近になったのですが、女神マーナにはお変わりあり

ませんか」

「ええ、全然お変わりありません」

相変わらず酔っ払ってるような感じだしね。あの酔いつて、いつ覚めるんだろ。

「塔ができれば、女神さまも楽しみにされてるようですよ」

付け加えると、ナキさんは「それなら良かった」とうなずいて続けた。

「実は、完成セレモニーの時に、巫女殿に女神の降臨をお願いしていただきたくて」

「……？」

「つまり、塔の頂上のあたりに、女神においでいただけないかと思っ
ているのです。もしかしたら、我々にも女神の声が聞こえるかも
しれない」

ああ……そっか。

今までは、ここの人たちは海中にいる女神マナーしか見た事がないのよね。で、愛海先生は海中ではしゃべらないから、声も聞いた
ことがない。

でも今度は、塔が海の上の空気中につき出すことになる。空気中
にいる愛海先生が何か言えば、塔の中にもそれが聞こえるかもしれ
ないんだ。なるほどなるほど。

「それじゃあ、女神さまに申し上げてみますね」

「ぜひお願いします。……待ち遠しいですね？」

ナキさんは、ちょっと意味ありげな笑みを浮かべた。

えーと、つまり完成セレモニーと結婚式が同時だから、結婚式が
待ち遠しいでしょ、っていう冷やかしですか？

「ええ……」

私はちよつと視線をそらして、はにかんで見せた。

それどころじゃないんだけどね！ ホントはね！

愛海先生は、もともと大きな目をさらにまんまるく見開いて両手を口にあてた。そんなポーズも、相変わらずお美しい。

「ザンと、璃玖さんが、婚約——っ!？」

「なんか、そんなことになっちゃって。すみません」

海の上。今日もさんさんと日差しが降り注ぎ、空は高く海は光り輝いている。

私はウミガメくんの背につかまった状態で波に揺られながら、ちよっとうなだれていた。

「アリでしょ！」

思わずといった調子で言い放った愛海先生は、でもすぐにあわてて私の顔を覗き込む。

「あつ、でも、璃玖さんはもちろん嫌なのよねー？」

「嫌っていうか……そりゃあ、ザンはすごく素敵な人ですよ。通常の状態だったら、よろめいちゃいますよ私。通常だったらの話ですけど。残念ですねえ」

私はちよつと目をそらした。

外見で言えば好みとは違うタイプなんだけど、あんなイケメンに「大切にする」なんて言われて、よろめかない方が……無理でしょ。

すると愛海先生は、「くうーっ」とか言いながら両手をこぶしにすると、こう言った。

「あーっ、いつか現実で弟と璃玖さんが出会ったらいいなあ！もしたら本当に恋に落ちて、結婚しちゃうかもしれないわよねー？」

「……はい？」

今、なんと？

「先生……あの、失礼ですけど、弟さんって亡くなったんですよね？」

「えー？ やだ、死んでないと思うわよ、たぶんー」

たぶん、死んでない？

「ちょ、待って下さい。夜の海が、弟さんとの最後の思い出っておっしゃってましたよね？ それにザンは、弟さんが大人になってたらこんな感じだろうっていう、願望だって」

愛海先生はウンウンとうなずいて、

「そうなのー。両親の離婚がきっかけで、子どものころに別々の家に引き取られて以来、弟とは会ってないのよー」

な、な、な、なんですと——！？

確かに先生、死んだとはハッキリ言っていない。だってそんなこと普通ハッキリ言わないものだし。

私、勘違いしてたのか！！

「両親が離婚した頃、私はもう小学生だったから『自分のことは自分でできる』ってみなされたんだけど、弟は小さすぎて……」

先生はいったん言葉を切って、目を伏せた。

「……とにかく、両親のどちらも弟を引き取らなかったの。それで、親戚の家を転々と……きつと辛い思いをしたと思うわ。だから私、ラグーン城ではせめて、って思ってた……」

……ああ、それで、シユリさんとヤーエさんのキャラクターができあがったのか。

理想の養父、養母である二人。ザンが幸せであるように。

「ね、璃玖さん」

先生は微笑んで私を見た。

「もし、私の書いたこのファンタジーが出版されて、弟の目に触れたら、私のことに気がつくかもしれないわよねー？　子どものころに話したことを覚えてれば、だけどね？　そしたら連絡がくるかしらー？」

愛海先生はトロンとした瞳で、遠い水平線を眺めた。

「それだけが、私の心残り……なの……。あれ？」

先生は瞬きをして、私を見た。

「心残り……？」

「あ、ね、先生先生！」

私は背筋がぞくりとして、反射的に話しかけた。

「下の街の町長さんに、頼まれたことがあるんですよ。塔ができあがったら——」

ナキさんに頼まれたことを先生に伝えながら、私は自分の心臓がドクンドクンと脈打つのを聞いていた。

今、先生、自分が死んでいることに気づきかけた？

物語が完結しないうちにそれを知ったら、どうなってしまうんだろう。そこで物語は中断するのかな？　その時、私は？

私がこちらに閉じ込められるのはともかく、せめて倉本主任が『こちらにいない』ってわかってる時じゃないと、彼がこちらに『残って』しまいそうで怖い。

「わかったわ、『結婚式の時に』塔の上あたりに行けばいいのねー。璃玖さんが呼んでくれれば、いつでも行けるわよー！」

親指を立てる愛海先生は、いつも通りの笑顔に戻っている。

「『完成セレモニーの時に』、ですからね！　結婚はどうにか回避したいんですってばっ」

私は念を押した。倉本主任が読むことを意識して。

とにかく今は、私の思いつきを実行できるように、物語を持って行きたい。元の世界に戻るかどうかは五分五分だけど……。

決戦は、『結婚式』の日。

9 心残り（後書き）

これにて第二章終了、次話から最終章です。

色々と予想して下さってる方（いらしたら嬉しい♪）にとってもハラドキドキの展開にしたいな！ できるか！？

1 その日までは

青い光に満ちたフィッシュボウルの中を、私は落ち着かない気持ちでぶらぶらと歩いていた。

いつものように、真夜中にここに来たのに——倉本主任が、なかなか現れないのだ。

疲れて眠っちゃってるのかな？ だったらもちろんしょうがないけど……でも、話したいことがあったのに。

ザンのモデルである、愛海先生の弟さんが、生きているらしいこと。

そして、その弟さんとの再会が、先生の心残りであること。

このラグーンの物語は、再会のきっかけになるようにという希望が込められていること。

心残りが、先生をあんな風に酔っ払ってるような記憶があいまいなような状態にしているのなら、弟さんを探して会わせてあげたいと思う。そして探してあげられるのは、今は倉本主任しかいない。

でも、二十年以上音信不通の弟さんが、簡単に見つかるとは思えないし……今は時間がないから無理か、やっぱり。

まずは私が現実世界に帰ることが先決だね。そうしたら、私が弟さんを探すのに。

奥の段差に腰かけた私は、ぼんやりしているうちに昼間のことを思い出した。

先生と会った後でラグーン城に戻ってきたら、ちょうどナキさん

が城を出てテラスから降りるところだった。街に帰るらしい。

ウミガメくんに頼んで、私はナキさんの近くに着地してもらった。

「お、巫女どの。お疲れさまでした」

「ナキさん、女神さまが、塔が完成したら来て下さるそうですよ」

ウミガメくんから降りながら言っていると、ナキさんは「良かった」とうなずいた。

「すみません、お帰りの所を引きとめて」

「いやいや、こちらこそお疲れの所をありがとうございました。ザン殿が、お戻りを待っておられましたよ」

軽く手で城の方を示されて、私はあいまいに笑った。

「そ、そうですか」

うーん、会ってまたラブラブウェーブが来たらどうしよう。

私がちつとも急がずにグズグズしていると、ナキさんが言った。

「あの……巫女どの。もしかして、巫女どの、あまり結婚に乗り気ではないんですか……？」

「えっ、あー……」

な、何て答えよう。

「私は、女神さまによってこの世界に連れてこられましたけど、その……」

永住するつもりで来たんじゃないんですー。

とも言えないし、嘘もつけずに言葉を濁していると、ナキさんが軽く目を見開いた。

「もしや……いつか、女神の世界にお戻りになる？」

「……………かも？」

答える私が疑問形でどーする。

そ、そうだ、昔話の『かぐや姫』っぽく答えておこう！　なんで

これ、今まで思いつかなかっただろう！

「いつか、女神さまの世界からお迎えが来るかもしれないと思うと……」

遠い目をしてみせた。

お迎え、ある意味もう来てるからね。倉本主任がね。

すると、ナキさんは微笑んだ。

「私はね、巫女どの、女神マーナが時おり海からこちらをご覧になっているのを見て、ずっと思っていたのです。マーナはもっと、こちらに近づこうとされていると」

そして続けた。

「そうしたら、あなたを遣わして下さった。これからは、塔だつてあるではないですか。もしかしたら、二つの世界が溶けあう時が来ているのかもしれないよ？」

二つの世界が溶けあう、か……。愛海先生がこの世界のために何かしたいと思ってるのは確かだけど、でも今の方向で大丈夫なのか？

そんなことを考えながら、私はウミガメくんにもう一度乗ってラグリーン城に戻った。

彼にご飯をあげようとフィッシュボウルに行くと、ザンが奥の長椅子で書類を読んでいた。

「リク」

こちらに気づいて微笑みかけてくれたので、

「ただいま」

とだけ答えて隅の壺の方へ行き、ウミガメくんにご飯をあげるのに集中した。

でも、ザンが時々こちらに視線をやるのも気になったし、ウミガメくんは海藻をくわえたらさっさと行ってしまったしで、間が持たない。

何か理由をつけて部屋に戻ろうとして振り返ったら、ザンが立ち上がってこちらに近寄って来るところだった。

「リク……どうかした？ 今朝からなんだか……」

私がザンを避けているのに、さすがに気づかれたらしい。いつものように、長身を少しかがめて私の顔を覗き込んだ。

「ねえ……ザン」

私は下を向いて口ごもりながら、さっきナキさんに言ったのと同じことを言った。

「私は女神さまにここに連れてこられたけど……いつか、今度はお迎えが来るかもしれない。もしそうになったら……」

私が元の世界に帰ってしまったら、勝手だけどザンには別の幸せを見つけてほしいと思う。

だから、その可能性はザンにも知っておいてほしい。

「うん……それは、僕も、考えた事があるよ」

はっ、と顔を上げると、ザンが私を見つめていた。

「初めて会った時から、どこか他の場所に君の気持ちがあるのは、気づいてた」

お見通し、だったのか……鋭いな。倉本主任みたい。

「それでも、結婚するの？」

私が尋ねると、ザンのはっきりとうなずいた。

「将来そういうことがあるとしても、その日までは、君は僕のものだ」

強く抱き込まれた。ザンの胸に、私の吐息がこぼれる。私はそっと、彼の背中に手を回して抱きしめ返した。

私の知らない一年の間に、私の婚約者になった人。きっと彼から、

私にプロポーズしたんだろう。

その時、彼は何と言ってくれたんだろう……もちろん、そんなことは聞かない。もう一度言わせるなんて、そんなこと絶対したくない。

目を閉じて、私は言った。

「……早く、結婚式の日が来るといいな」

こんな風に、何日も過ごすよりは。早くその日が来るといい。

もし私が元の世界に帰れなかったら……。

その時はきつと、私はきつと、この人のそばで暮らすだろう。そう思った。

2 瞳（前書き）

豆知識……？

2 瞳

「璃玖」

声がして、ハッと顔を上げる。

そう、私は今、真夜中のフィッシュボウルにいたんだった。

奥のカーテンの陰から、ザンが——倉本主任が、こちらに速足で近づいて来るところだった。

「悪い、遅くなった」

「いえ。大丈夫ですか？ 今、いつの何時ですか？」

倉本主任、ちゃんと休めたんだろうか。

「日曜の昼だ。俺は大丈夫だから」

何か、しゃべり方が急いでるみたい。

「あのー、弟さんのこと……」

「うん、読んだ。死んだわけじゃなかったんだな」

「す、すみません、私の早とちりで！」

ひー、また怒られるっ。私が肩をすくめると、彼は柔らかな口調で言った。

「いや、まああの言い方じゃ、そう思うよ僕も」

——今、倉本主任、自分のこと『僕』って言った。

私は唇を噛んだ。

そんな私に、彼はまたいつもの口調に戻って続けた。

「それより俺、もしかしたらその人のこと、わかるかも」

「えっ！？ 弟さん！？」

私は仰天した。

あっ、そうか、倉本主任は少なくとも私より、愛海先生との関わりが深い。何かヒントになるようなことに思い当たったのかも！

「そ、そしたら愛海先生の心残りがなくなるかもしれないですよね！」

「それで璃玖が、解放される可能性もあると思うんだ。先生は、璃玖をこの世界に引き込んだり解放したりっていうのは自分ではコントロールできてないみたいだけど、閉じ込めっぱなしってことは望んでないと思う。お前のこと気に入ってるんだし……弟の嫁に望む程度にはな？」

うつ。昼間の先生との会話、読んだんですね。

「ちょっと俺、調べてみるわ。少し会社を離れたりするかもしれない。原稿は持つて行くけど、移動中は読めないかも」

コピー用紙の束を持つてくの？

「なっ、なくさないで下さいよ」

小説がバラバラにでもなったら、私どうなるんだろうとか考えるとな。私もバラバラ？　みたいなスプラッタなことを考えてしまうわけで。

「大丈夫。今、ツカに文字が移ってるから。コピー用紙の代わりに置いてみたら、そっちに文字が現れてるんだ」

ああ、ツカ……それならバラバラにはならないかな。

ツカというのは、束^{つか}見本のこと。これから出す予定の本とまったく同じ紙・サイズで作る、でも中身や表紙は真っ白な本のことだ。セットものや全集ものを出す時に事前に作って、化粧箱を作る時にサイズの参考にするとか、カバーだけ巻いて宣伝に使うとか、そういう用途の見本。

もちろん、本が実際に完成してしまえば束見本は不要になるので、私なんかはよくもらって帰って甥っ子のラクガキ帳に進呈してるんだけど、愛海先生のこの物語は今、その真っ白な本に浮かび上がってるらしい。

突然、倉本主任が両手で私の頬を挟んだ。

「しつかりしろよ。何度でも言うけど、お前は戻るんだからな、こっちに」

一瞬、呼吸が止まったけど、私はいつものように笑った。
「もちろんです」

この、倉本主任の黒い瞳を、また見られるかな。

すると、彼も私の瞳を見つめ、その姿勢のまま言った。

「こんな、自分の身体じゃないような感覚じゃなくて、直接お前の瞳を見たい。名前の通りの、璃玖の瞳を」

えっ。そ、それって……。

「くらッシュ、私の名前の意味、知ってるんですか？」

思わずあだ名の方を口走ってしまった。

「気になる女が、変わった名前してたら、意味くらい調べる」
「何だかむすつとした顔をして言うと、彼は早口で続けた。」

「明日の夜は会えるかわからないけど、何か分かったらなるべく早く知らせられるようにするから。勝手なことしないで、僕を待って。じゃあ、行って来る」

私の頬を親指でちよつと撫でてから手を離すと、倉本主任はまた速足で去っていった。長身がカーテンの陰に消える。

い、今、なんて言った？ 気になる女？ 私が？

私の名前は、『璃』が宝石とか水晶、『玖』は美しい黒い石のことだ。母が、生まれたばかりの私の瞳を見て、この子どもの無垢な瞳が大人になっても澄んでいるように、とつけてくれた名前。

く、くらッシュってば、私の瞳が名前の通りだって……。

うああ、こっちが恥ずかしくなります！

巻きスカートの前の部分をぎゅーっとつかんで悶えつつ、私は複雑な気分でした。

倉本主任、少しこの世界から離れるんだ。それなら、ザンとの融合も進まないかも。それはホツとする出来事だ。

でも……早く帰ってきて欲しい。矛盾した気持ち。

——僕を待つてろ、か。また『僕』って。
急がないと。もう時間がない。

私は首を横に振って色んなものを振り切ると、自分も足早にフィッシュボウルを後にした。

翌日は、朝からズーイさんにつかまった。

「花嫁衣装ができあがってきましたよ！ 少し直しますから、着てみて下さい！」

ぎゃあああ。そうか、すっかり失念してたけど、この一年の間に結婚式の準備が進んでるのね。

ズーイさんとお針子さんらしき女性に着せつけられた花嫁衣装は、女神マーナの服装に似ているインドのサリー風のものだった。色も同じ白。光る糸で貝殻のような模様が織り込んであって、とてもとても、綺麗だった。

ズーイさんは、衣装を着た私を褒めちぎってくれたけど、私は申し訳ないような気持ちでいっぱいだった。

「どうなさったんですか、リク……どこか苦しいですか？」

ウエストのあたりをチェックしてくれる、優しいズーイさん。この世界の人は、みんな優しい。

私は笑顔を作って、お礼を言った。

「ズーイさん、色々ありがとう」

彼女は、ちょっと不思議そうな顔をしていた。

3 真夜中の彼

ほとんど衣装合わせだけで午前中が過ぎ、午後になってから私はザンに会いに行った。彼は今日もフィツシュボウルにいた。

「こんにちは、ザン」

ザンはこちらを見て、優しい微笑みを浮かべた。

「リク」

そばに行くと、彼は黙って私の腰に手を回した。軽く引き寄せて、そのままじっとしている。

ザン、ちょっと元気がない。

そんなの当たり前か……彼だって複雑な気持ちでいるんだ。私が女神の世界に帰ってしまうかもしれないと思いつつ、私と結婚しようとしている。

やがて、彼は私の身体を離すと言った。

「さつき、ナキから連絡があったんだ。今日で、ひとまず塔の工事が終わるって」

「え、完成？」

「いや、海の上に出る一歩手前だって。その部分は、セレモニーの時にみんなの目の前で完成させて、みんなで海の上の世界を見ようって」

「そう……」

ついに、あの塔もできあがるんだね。

「最終確認や資材の片付けに数日あれば、後は……」

ザンが口をつぐむ。

私は先を引き取った。

「じゃ、五日後くらい？ 一週間後くらいかな？ 結婚式」

「……ねえ、リク」

「何？」

「いや」

何か言おうとしたザンは、黙ってもう一度私を抱き寄せると、私の髪に頬を寄せた。

ザンと別れた後、私はもう一度ウミガメくんを探して背中に乗せてもらうと、海の上に行った。

「愛海先生――」

きらめく太陽の下、波に揺られながら呼ぶと、女神マーナの白い姿がまばゆく光りながら現れる。

「はい、璃玖さん」

「こんにちは。あと数日で、塔の完成セレモニーだそうですよ」

「ホント！ 楽しみだわー。あのう……結婚式もー？」

先生……両手の人差し指をつんつん突き合わせてもじもじポーズって、美人だからって何でも許されるとでも……とでも……許されるよねーもちろん！ くはあ、下を向いて上目遣いってたまらん！
「今の所、やる方向ですよ」

悶えてる場合じゃない。私は表面上は冷静に、先生に伝えた。

ある意味、その日が来れば何らかの決着がつくんだと思うと、早くその日が来てほしいんだ、私は。

「ねえ先生、弟さんのことなんですけど。もう本当にずーっと、連絡が取れてないってことなんですか？」

私が聞いてみると、先生はしょんぼりした様子でうなずいた。

「そうなのー。私が高校生の時に母が亡くなったから、その時に弟の引き取られた先を転々と探して行って、連絡を取ろうとはしたのよ。でもことごとく親戚に邪魔されてー。……きっと、弟の分の遺

産が目当てだったのねー」

う、うわあ。先生、実はかなり波乱万丈の人生をぐりぬけていらした？

「あ、じゃあ、ラグーン城の中にあるお社って……」

「そう、母のためのものよー」

そうだったのか。一度は、死んだ私を祀ったものかと思っちゃったのよね。

その日の真夜中も、私はフィッシュボウルに行ってみた。

でも、倉本主任の言った通り、彼は来ていなかった。弟さんのことを調べるのに、時間がかかってるんだろう。

がらんとしたその場所で、しばらく待ってみたけど、何も変化がない。私はため息をひとつついて、自分の部屋に戻ろうとした。

「リク」

後ろから、声がした。

振り向くと、青い空間に、ザンの姿があった。こちらへ近づいて来る。

「あつ、ど、どうでしたか……」

言いかけて、私ははっと口をつぐんだ。この歩き方、表情……。

倉本主任じゃない。ザンの方だ。

「どつ、どうでしたかじゃなかった、どうしたの、ザン……こんな夜中に」

変なごまかし方はこの際しょうがない。だいたい「こんな夜中にどうしたの」って、私の方がどうした、だよな、こんな場所で。

「リク」

青と緑の混じった瞳のザンは、もう一度私の名前を呼ぶと、ここにいる理由を聞くこともなく、私の右手を取った。

とても、静かな表情だった。

「……外に出ない？ 塔を、見に行こう」

テラスから降り、砂地にふわりと着地する。

ザンは、抱き上げていた私をそっと降ろして、また手をつないで歩きだした。私は黙って、彼の後について行く。

人気のない街の中、ポツンポツンとわずかに点る灯籠が、ドーム状の家々を照らす。時々、小さな魚の群れがわきをすり抜けて行く。街を抜けると、後は海上からのわずかな光に頼って進んだ。途中でちよつと振り向くと、黒々とした海藻の森の間に、街の明かりが星のように光っていた。

イ・ハイ山の山道は、工事の人が何度も通ったのかとても歩きやすく、山頂の塔まではあつという間だった。

白いねじれキャンディのような塔の入口は、ドアもなくアーチが曲線を描いている。

中に入ると、そこは学校の教室二つ分くらいの広さの、円形のホールになっていた。ホールの中央に、私よりも大きな巻貝が一つ鎮座していて、貝殻を透かして明かりが点っている。

見上げると、塔の内側には螺旋階段がぐるぐると貼りついていて、最上階まで中央は吹き抜けになっている。天辺には、白い天井が見えていた。

ザンは私を見て、ちよつと微笑みかけると、手を引いて螺旋階段を上りだした。

長い螺旋階段もそれなりに大変だったけど、ウミガメくんに乗っ

て呼吸を止めたまま海の上まで行くよりは楽で、多少息切れはしたものの塔の最上階に着いた。

ここには床があつて、仮に作られたのか天井はガラス張りになっている。水面に近いたため、水を透かして入ってきた陽光が、部屋を明るく照らしていた。

壁には縦長の窓がいくつもあつて、海をカラフルな魚が泳いでいるのが見える。

「まだ、この上に作るんだけどね……今のところは、ここが最上階」ザンがやつと口を開いた。

並んで天井を眺めていると、ザンの左手が私の右手を、ぎゅっと握った。

彼を見ると、彼もこちらを向く。

「リク。今夜、二人だけで結婚式をしない？」

4 二人きりの結婚式

ドクン、と心臓が大きく一つ鳴って、頭の中と胸の中が熱くなった。

「……どうして？ 結婚式、みんなの前で、するんじゃないの？」

私はそう聞いた。早く決着がつくことを望んでいたけど、急な展開にひるんでしまう。

「うん、みんなの前でもするけど。二人きりでもやりたいんだ」

ザンは静かな声で言った。そして、また天井を見上げる。

「女神マーナの、見届けの元で」

はつとして顔を上げると、愛海先生の真つ白な姿が、塔の周りをゆっくりと回っていた。白い泡と、長い尾を引いた愛海先生は、窓から私たちを見て不思議そうな顔をしている。

「だめかな？」

そう尋ねてくるザンと、海の中の愛海先生は、こうやって見比べると本当に似ていた。

性格も少し似ている気がするな……乙女なところがある点とか。二人きりで結婚式、だなんて。

「……いいよ」

私はうなずいた。

今、倉本主任がこちらの世界にいないなら、ちょうどいい。物語を、終わらせよう。

水面の波模様が、部屋の壁や床に映って揺れている。ザンや、私の身体にも映って、揺れている。

まるで自分たちが水に溶けているような、不思議な浮遊感がある。

「私、こちらの結婚式がどんな風なのか知らないの。教えて？」

私が尋ねると、ザンは微笑んだ。

「特に決まった形式はないよ。女神の名の元に、自分が誓いたいことを述べるんだ」

そして、彼は私を見つめると、きつとずっと考えていたのである言葉を、口にした。

「僕は、たとえ別の世界に生まれたもの同士でも、いつどこにいても……リクを愛することを誓います」

それを聞いたら、私は声が出なくなってしまった。

もしかしたら、私の知らないプロポーズの言葉は、これだったのかもしれない。そう思うと、この世界に来て初めて、涙がこぼれた。

ザンは、たぶん私の言葉を少し待っていたのだろうけれど、やがて私の額に自分の額を当ててささやいた。

「それから、誓いのキス……」

涙に曇る瞳をまばたきでクリアにして、私はザンの海の色の瞳の中に、倉本主任の色を探した。

ザンが言った。

「彼なら、今はいないよ。僕だけを見て、リク」

私はハッとしたけれど、思わずちよつと微笑んでしまった。

さすがだね。気づいてたんだ、もう一人の自分に。いつから？ どのくらい知ってるの？

でも、聞く必要はなかった。もう二重人格もおしまいだから。

物語のヒーローとヒロインは、結婚式を挙げる。誓いのキスをして——エンドマーク。

「これで、『めでたしめでたし』だね……」

私はつぶやくと、ザンの顔を見上げて目を閉じた。ザンの両手が、私の頬を包むのがわかる。

吐息が、唇にふわりとかかって……。

ぐに。

「また説教されたいようだな？」

「い、いひゃいひゃいひゃいひゃい！」

頬の肉を思い切り左右に引っ張られて、私はまた涙目になってしまった。まばたきをすると、ザンの瞳が黒く染まっているのが見える。

倉本主任！

「ひどいつ、結婚式の誓いのキスでこれって、軽くトラウマですよ。あっほら、愛海先生ボー然」

「うるさい。何が『めでたし』だ、それで物語を終わらせようと考えてたのか。また一人で勝手に突っ走りやがって」

頬を押さえる私の前で、ザン——倉本主任は仁王立ちで腕を組んでいる。

「だって、早くしないと倉本主任まで元の世界に戻れなくなると思っ……それにこうやってお話を終わらせれば、私だってもしかしたら帰れるかもしれないし？」

ぼそぼそ言い訳をすると、倉本主任は強い力で私の腕をつかんだ。

「俺の事を思ってくれるなら、ギリギリまで俺を信じて待ってくれ。もし失敗に終わってたら、お前を失うところだ。『冗談じゃない』でもっ」

「とにかく！俺は戻って来たんだから手短かに話を進めろぞ」

倉本主任は強引に話の主導権を奪い取ると、こう言った。

「いいな、ザン」

そのとたん、彼の瞳にまた、海の色が満ちた。

「ごめん、リク」

ザン！？

「タカのいない間に、君と二人の時間を少しでも持ちたかったんだけど……まさか、君が結婚式で物語を終わらせようとは思ってなかったんだ」

「ザンなの？ 主任、ザンとお互いに『話』をしてたんですか！？」
私が混乱していると、彼の瞳は再び黒く光った。

「ややこしいから俺が説明する。昨日の『夜』に、俺は全部ザンにぶちまけたんだ」

倉本主任が衝撃の事実を述べる。

そ、それで昨日の『夜』は、なかなかフィッシュボウルに現れなかったの？

「だからザンは知ってる。ここが物語の世界であること、俺と璃玖は物語の外から来た存在であること。そして……」

彼は一度言葉を切ると、あたりをぐるりと見まわした。窓の外で、愛海先生が首をかしげながら浮かんでいるのを見る。

「……巫女が女神と話をするのが目的なんだから、この塔ってどこかが外とつながるはずだよな？ え、伝声管もあるのか？ どこ？」
ぶつぶつ言ってるのは、ザンと会話してるんだろうか。変な感じ。

螺旋階段の近くの窓に、貝殻の模様のステンドグラスみたいになった部分があった。倉本主任はそこに近寄ると、愛海先生に向かって手招きをした。

先生が顔に疑問符をいつぱい浮かべながら、すいっと近寄って来る。彼はステンドグラスに向かって語りかけた。

「先生、聞こえますか」

先生はうなずいている。あの模様の部分を通すと、声が聞こえるの……？

「俺です、倉本です」

窓の向こうで、先生が頬に両手を当てて口を開けるのが見えた。

「えーっ!？」って叫ぶのが聞こえそう。うん、そりゃ、驚きますよね。

「先生、弟さんのことを『ヨウちゃん』って呼んでたのに、弟さんをモデルにした神官に『ザン』と名前をつけたのはなぜか、覚えてますか」

先生は首をかしげている。な、なんとなくつけたんじゃないの？
「覚えてないか。親戚がよってたかって、情報を隠蔽してたみたいだから……」

彼はつぶやくと、もう一度声を大きくして、こう言った。

「弟さんの名前。『ヨウザン』って言うんじゃないですか」
女神が、ハッと目を見開くのが見えた。

急に、天井の向こうの水面が暗くなった。

波が大きくうねり、塔がゆらゆらと揺れる。彼がこちらへ手を伸ばし、私は彼の胸に飛び込むようにしてつかまった。

やがて揺れがおさまってきて、あたりを見回した私は息を呑んだ。
ガラス越しに、澄んだ満月が見える。

海の上に、本物の、夜が来ていた。

5 女神の覚醒

塔の天井のガラス張り部分は、およそ直径二メートルというところだろうか。この上にさらに建て増しする時のためか、取り外しができるようになっていた。

私とザン、そしてザンの中の倉本主任は、協力してガラスを外した。そして、脇に立てかけてあった梯子を使って、ぽっかり空いた天井から頭を出した。

塔は今、緩やかな波の上に最上階の部分を表して、月光に照らされて白く光っている。本当の夜が来て月が現れ、潮が引いたらしい。明るい満月から視線をめぐらせれば、空には満天の星。天の川が空を流れる。

そして、海に向こうには黒い影が、光の粒をたくさんちりばめて横たわっていた。

陸地だ。人の住む灯りが点っている。

物語の世界と、現実が、つながっている……？

愛海先生は、塔の上に腰かけていた。

『女神マーナ』の白い姿ではなくて、綺麗な長い黒髪の、『愛海先生』の姿だ。

あの日——会社に訪ねて来て、私に原稿の入った封筒を託した時と同じ、シフォンのチュニックを着ている。

「璃玖さん。それに……ザンと、倉本さん」

ニコリと微笑んだ愛海先生は、しゃべり方がしっかりしている。ついに酔いがさめたらしい。

先生の隣にザン（倉本主任）が座り、その隣に私が座った。天井から塔の中に足を降ろしているの、足だけがあの空気と水の間みたいなものに浸かっている、変な感じだ。

「思い出したんですか」

倉本主任が尋ねると、先生はうなずく。

「ええ。そのう……私の身に起きた事も、ね。ごめんなさい、璃玖さん、ずっと隠してくれたのね」

私は首を横に振った。

「私はただ、どうすればいいのかわからなかっただけです。本当に、女神さまの言葉をラグーン城に伝えるだけしかできない巫女で……」

「ううん、そうじゃない」

愛海先生は微笑んだ。

「璃玖さんは、女神とラグーン城の人々の橋渡しをする巫女なのと同時に、現実と物語の橋渡しをする巫女だったんだわ。あなたが来なかったら、私はずっとここで、現実感のない物語の中を揺れているだけの女神だった」

現実感のない物語……。

先生は、ザンに向き直る。

「……そう、弟の名前、どうして倉本さんが知ってるの？」

黒い瞳の倉本主任が答える。

「変だとは思ってたんです。俺、この塔ができる前からどんな塔になるのか知ってたし、それに『ヨウちゃん』って呼び方に聞き覚えがあつて」

彼は肩をすくめて苦笑した。

そう、塔ができる前から倉本主任は『白い塔』って、色を知っていた。それはてっきり、ザンと人格が混ざったためだと思っていた

けど、違うの？ それに、呼び方にも聞き覚えが？

「俺の名前の『鷹』は、本当は『タカ』って読むんじゃない。よく間違われるので、面倒だからそういうことにしてただけで、本当は『ヨウ』と読みます」

彼は一度言葉を切ると、こう言った。

「先生の弟は、俺です」

私と先生は、ポカンと口を開けた。

「はあ？」

「はあ？ じゃないよ。えーと、先生の覚えている弟『ヨウちゃん』は、本当は『鷹山』と書いて『ヨウザン』っていう名前だったんだ。歴史上の人物から取ったんだな」

倉本主任は、手のひらの上に指で漢字で書いて見せた。

「俺は、離婚した両親には引き取られず、親戚の間を点々としてごちやごちやしてる間に改名させられ、一文字だけ残して『ヨウ』になった。俺も小さかったから、元々そういう名前だったと思い込んでいた。でも、先生はたぶん本来の名前を何となく覚えていたんだな。消えた『ザン』の部分を、弟をモデルにしたキャラクターに名付けた」

「本当に、ヨウちゃんなの？ 倉本さんが？」

「すみません、未だにぼんやりとしか思い出せないんですけどね…」

…」

倉本主任は肩をすくめて言った。

「でも、夜の海のことは、なんとなく。誰かと手をつないで行った覚えがあります」

「だから、倉本主任は初めから、ザンとだけ接触できたんですか？
ザンの台詞を操作したり、ザンの瞳でこの世界を見たり……」

私が目を見開いたまま言うと、倉本主任はうなずいた。

「そう。元々、俺とザンは同一人物だからだったんだ。……心配かけたな」

やっと腑に落ちて、私は大きくため息をついた。緊張がほぐれる。

「私、弟さんを探し出すの、絶対間に合わないと思ってました」
すると、彼はニヤツと笑った。

「先生の過去をたどって行って弟を探しだすのは大変だろうけど、俺が自分の過去を調べるならまあ何とかな」

そして、少し表情を陰らせる。

「……先生が生きている間に、気づけたらよかったんだけどな」

愛海先生はくしゃりと顔をゆがめ、それでも口元に微笑みを浮かべた。

「ううん、嬉しい。私が話したこの物語のことを、覚えていてくれたんだものね。塔のことも……」

先生はちよつと目元に手をやると、顔を上げて、今度はさっきより大きな笑顔になった。

「ふふ、私のイメージと全然違った風に大人になったのね！ まさかあんなコワモテになってるなんて。あの可愛かったヨウちゃんが」

私はちらりと彼の顔を見た。ここにいる彼は『ザン』の姿だから、とっても綺麗な顔をしてるんだけど、倉本主任の顔は……ね。ぷぷ。

「子どもの顔なんて、どんどん変わりますよ」

「そりゃあそうよね。私の顔は？ 覚えてなかったの？」

「女の人なんて、もっと変わるじゃないですか」

「それもそっか。……でも良かった、立派に編集者をやってるってわかって」

「複雑な少年時代を過ごしましたが、一応、人の道を逸れずに大

人になりました」

真面目くさって倉本主任が言うと、先生は声を上げて笑った。

そして、陸地を指さした。

「見て、現実とラグーンの世界が繋がったわ。やっと璃玖さんを返してあげられる」

「……先生は……？」

私が思わず尋ねると、先生は私を優しい瞳で見つめた。

そして、ゆっくりと立ち上がって空を見上げる。

「そうね。もう私はこの世のものでは……」

その時、座っていた私はいきなり誰かに、足をつかまれた。

「わ……」

「璃玖!？」

身体が滑り、私は再びあの空気もどきの中に没して、床に落ちた。

5 女神の覚醒（後書き）

残り二話の予定です。

6 物語の結末

ナキさんだった。

塔の中に落ちた私を立たせて、羽交い絞めにしたナキさんは、天井の上にいる先生たちを見上げながら、少し後ろに下がった。

「あなたが、女神……マーナ」

ナキさんは、行動とはうらはらに落ち着いた声で言った。

「話は聞かせていただきました。巫女は、元の世界に戻るのですね。でも、マーナには残っていただかないと。あなたの力が必要です」
そして、さらに一步下がった。

「こちらに、降りて来ていただけますか。そうしたら、巫女を解放します」

「ナキ、さん」

私は、ただ驚いて茫然としていた。恐怖感が全くないのが、自分でも不思議だった。

どうして、と聞こうとした私の視界で、愛海先生がずっと立ち上がった。

そのまま、さっさと梯子を下りてくる。今は人間の姿だから、こちらの世界にも普通に入って来れるんだ……とどうでもいいことを考える。

ザンは梯子を使わず、一気に飛び降りた。

愛海先生は私たちと向かい合って立ち止まり、いつものようにニッコリと笑った。

「私はもうこの世のものではないから、成仏しなきゃーと思ってたけど、やめた。私、残るわよ。この世界で暮らすわ」

「は？」

ナキさんがひるんで、腕の拘束が緩む。何か武器のようなものを持つてるのかと思っただけ、全然そんなことはなかった。

単に、どこかに行つてしまいそうだった女神をとっさに引きとめる方法が、他になかっただけみたい。

私がおそろおそろナキさんから離れると、ザンが近づいてきて私を引き寄せる。

見上げたら、その瞳は一瞬海の色になつて、また黒に戻つた。二人とも、様子を見ているみたい。

その“彼”の瞳が、二人分の心配を浮かべて「大丈夫か」と問いかけていたので、私はうなずいてみせた。

愛海先生は、はきはきとナキさんに告げた。

「でも、あなたがもし女神の力を当てにしてるなら、それは無理。あなたはひょっとして、女神の力を利用して、海の上の世界から何か自分の利益になるようなものを得ようとしたのかしら？」

うっ、とナキさんが絶句する。

え、そうだったの！？ それであんなに、塔の建設に熱心だったのか……。

先生は続けた。

「海の上の、私の世界は、素敵なものだけで満ち溢れているわけじゃないの。期待させたならごめんなさいね。でも、女神の力なんて必要ないのよ」

先生は、“彼”を振り返つた。

「ラグーンの世界で弟を幸せにしようとしたけど、ザンはどこか寂しい気持ちを抱えて大人になつたみたい……でも、現実の弟は、厳しい世界でもちゃんと立派に大人になつたのね」

“彼”の手を、きゅっと握る。

「私、ちゃんと覚えておくわ。物語の後ろには現実があるってこと

を。そうしたら、物語はもっと面白くなるわね、きっと」

私は何だか、さっきまでの白い姿の女神よりも、今の先生の方が神々しく見えるような気がした。

先生は、本当の意味で、この物語の女神になったのかもしれない。

“彼”——倉本主任は、先生の手を握り返して言った。

「俺も、忘れません。俺をずっと心配し続けてくれていた、あなたのことを。……姉さん」

先生は、今までで一番、綺麗な笑顔を見せた。

次に先生は、私の手を取って言った。

「璃玖さんは、ずっと私を見守ってくれたわね。質問された覚えはあるけど、一度も私を否定しなかった。女神にとっては、最高の巫女さんね」

私は首を横に振った。

「編集者としては、力を発揮できなかった気がします……」

この世界を編集します、なんて。はは、おこがましいったら。

「ふふ、でもきっと将来は素晴らしい編集者になってね！」

先生が笑うので、私も……笑った。

ああ、お別れなんだ。

先生は、手を離してナキさんの方へ下がった。そして、呆然としているナキさんの肩を、元氣よくぽーんと叩いた。

「私もこの世界を良くするように頑張るから、よろしくね！」

私は思わず笑いそうになった。女神様に肩を叩かれて、ビックリだろうなあナキさん。

「リク」

その口調に、ハツとして振り返る。

ザンが、私に話しかけていた。

「半人前な僕と、結婚しようとしてくれてありがとう。振り回してごめん。……でも、君を迎えに来たのが『ヨウ』で嬉しいよ。僕は彼の中にも存在するから」

「そう、なの？」

「マーナが……姉が弟を心配する気持ちそのものが、僕だ。その気持ちに『ヨウ』に届いたんだから、『ヨウ』がそれを忘れない限り、僕は存在する」

ザンの親指が、私の頬をそつとぬぐって、私は自分が涙をこぼしていることに気づいた。

「じゃあ、また、会えるんだよね？」

私が尋ねると、ザンは微笑んでうなずいた。

「会えるよ。いつでも」

私は、自分が以前考えた事を思い出した。

世界は、循環している。空も陸も海も、つながっている。

そしてきつと、物語と現実も切り離せない。現実から生まれた気持ちに物語の中に見つけて、物語から感じたことを現実の自分に響かせて。

ラグーンの世界で弟を守ろうとしてきた愛海先生自身、辛い夜から目を背けていたけれど、ふと夜空を見上げればそこには月が輝いていて。

これからは、マーナもザンも物語の住民たちも、ラグーンだけでなく、この循環する世界の中で生きて行くんだ。

月光が強くなったような気がして、ハツと見まわしたら、塔の中が光で満ち溢れつつあるところだった。

倉本主任——それともザン？ の手が、私を抱き寄せる。

光の向こうから、先生の声が響いた。

「ありがとう、ヨウちゃん、璃玖さん……私と一緒にこの世界を作ってくれて。『めでたしめでたし』で世界は完成して、あなたたちがここを覚えていてくれる限り続いて行くの」

彼の手が、私の頬に触れた。

私は瞳を閉じた。

唇が、重なった。

エピソード

「……く。璃玖！」

「はいっ！」

ガバッと起きあがると、おでこが何かにガツンとぶつかった。

「ぐほっ！」

「あだっ！……っえ！？ 倉本主任！？」

目の前にいるのは、顎を押さえて涙目になっている倉本主任。うわ、無精ヒゲボーボー。

会社だった。

ちつとも砂だらけになんかなっていない、いつもの書籍部の部屋。ブラインドの隙間から明るい朝の光が差し込み、床に縞模様を作っている。私はその床の上に座りこんでいた。

「戻った……！」

私は自分の身体を眺めまわした。服装も、あのピタTと巻きスカートの格好から、シャツとスカートに戻っている。そばには社内用のミニールが転がっている。

ハッとして、私は倉本主任の胸倉をつかんで引っ張り寄せた。

「うおっ、何だっ」

あわてる彼の瞳をのぞきこむ。

黒い瞳……。

「ザン、は？」

「いるよ。もう、俺の一部だ」

主任は静かに言う。そうだけど……。

「あつ、お話は!？」

急いで見まわすと、床の上に真つ白な表紙の本が落ちていた。手を伸ばして、そつと本を手取る。

そのとたん、本はさらりと崩れて、砂になってこぼれ落ちた。

「あ……」

がつくりして肩を落としていると、倉本主任の手がそつと髪を撫でた。

「先生、言つてたじゃないか。俺とお前が覚えていれば、世界は続くつて」

「ん……」

顔を上げる。一瞬、彼の瞳が他の色に反射したような気がした。髪を撫でる手に、懐かしいような切ないような、不思議な感覚がした。

至近距離で見つめ合う。

「倉本主任……」

「璃玖」

「歴史上の人物のヨウザンって、誰ですか」

がくつ、と倉本主任の頭が落ちる。

「おま……山形の誇り、上杉鷹山公うえんすぎやうざんを知らんのか」

「ご、ごめんなさい知りません世界史選択だったし」

「あ、そ……今度ゆつくり説明してやる……」

倉本主任の声がだんだんスローになって、頭が傾いだ。そのまま前のめりになって……。

頭が、私の膝の上に落ちた。

「わ、ちょ、くらっシュ!？」

「もうダメ……寝かせて……結局この三日、ほとんど寝てない……」

「今っていつ!？」

「……月曜の……あさ……?」

次に聞こえたのは、深い寝息だった。

「寝ちゃった……」

私の膝枕で眠る、倉本主任のコワモテの顔。

今までマジマジと見たことなんてなかったけど、確かに口元にちよつとだけ、愛海先生の――ザンの面影があった。

「……ありがとう」

私はそつと、倉本主任のあごのあたりの無精ヒゲを、指先でなでた。

私がラグリーン城で、ザンを表面しか見ないようにしていたように、今までは上司としてしか見た事のなかった、倉本主任。

私を助けに飛び込んでくれた彼を、もつと知りたいな、と思った。

床の上の小さな砂の山を眺め、私はラグリーン城に思いをはせた。

何か、名前をつけてあげたいな、と思う。もう私と倉本主任の心の中にしか残っていない、この物語に。

弟思いの少女のイマジネーションの海に生まれた、珊瑚のお城の物語に……。

あれ? さつき、今日は月曜だって言った?

くるつと壁掛け時計を振り向くと、時刻は八時過ぎ。

やばいよ、もうちょっとしたら、ほかの社員さんが出勤してくるんじゃない？ その時こんな姿を見られたら！

今さらながら、キスした人を膝枕しているというこの状況に動揺した私は、熱くなる頬に気づかないふりをしながら倉本主任を揺さぶった。

「倉本主任！ ここじゃまずいですって、応接室のソファで寝てくださいよ。ねえ、くらっシュ！ タカさん！ じゃなかった、ヨウちゃんってば！」

【イマジネーション・ラグーン 完】

エピソード（後書き）

読んでいただいて、ありがとうございました！

あとがき

7月1日から2ヶ月半ちよつとに渡ってお付き合いいただきました、『イマジネーション・ラグーン』、完結いたしました。読んでいたでいて、本当にありがとうございました。

よ、良かったよ、9月中に終わって……！ 暑いうちに終わらせたかったんです。

前作が「トリップ↓森の中」、だったので、今回は「トリップ↓海」にしてみよう、夏だし！ という（それと、前作は元の世界に戻れない話だったので今度は戻る話にしようという）単純な発想から始まったこの物語。今回は完璧に王道から外れていたと思うのですが、いかがでしたでしょうか。

振り返ってみれば反省点もいっぱいのも物語で、本当にまあ。

出版関係の豆知識は必要だったのか、とか。

リユウって何のために出て来たの、役割って目撃者としてだけ？とか。

見切り発車でスタートして、第一章が終わるあたりまでラストが見えてなかったんですね。というか、エピソードはだいたいこうと決めてたけど、そこにたどり着く道筋は全く見えてなかった。その割に、伏線も回収して物語が収束したのでヨシとしましょう！ ……して下さいお願いします（m——m） 見切りのくせに伏線を張るから首を絞めるんですね……最終章はハラハラしながら書きました。

こんなことを考えながら書いていました、というのを、箇条書きにしてみます。

● 璃玖の名前について。「りく」という名前、今でこそ男の子の名前に多いようですが、昔は女性名としてよく使われてたようですね。大石内蔵助の奥さんが「理玖」さんだそう。少しレトロな名前が好きな遊森でした。『乳母さま』も『金フェス』もレトロだもんな。

● 璃玖と愛海の服装について。璃玖が本文中で言っている通り、インドっぽい雰囲気です。愛海はサリーを身につけていますが、璃玖はサリーのインナーとして着るものだけを着ています。昔のインドのお姫さまが着ていたという「チョーリー（チョリ）」をイメージ。

● ホタテベッドについて。ボッティチェリの名画『ヴィーナスの誕生』参照。

● 愛海が白い蛇になっただけのことについて。色々調べていたら、心理学において蛇や竜は母性を象徴する、って記述を見かけたので、この世界の母（創造主）である愛海には合うかな～と思って白蛇にしてみました。簡単な説明終わり（^^;）

● キャラクターの年齢について。ちゃんと書いてなくて申し訳なかったのですが、璃玖26才・倉本30歳・愛海33歳です。

● 「くらッシュ」という呼び名について。私がかつて勤めてた会社ではこんな風に呼んでたんですけど、他の会社はどうなんだろう？
Iッシュ、Sッシュ、お元気ですか（^^）

● ラグーン世界のドーム状の建物について。海流の影響を少なくできるように、と思っただけこの形になりました。

● ちょっと心配なことについて。「写真を裏焼きにする」というミ

すが、今でも起こりうるミスなのかどうか……。

●上杉鷹山公について。江戸時代の名君。米沢藩を財政危機から救い、発展の基礎を築いた人物。「鷹」の字が「ヨウ」って読むことに途中で気付いた人、手え上げてー！

ご意見ご感想、誤字脱字など、ぜひお寄せください。

この物語を見つけて読んで下さって、本当にありがとうございます。
た。

いったん完結設定にさせていただきますが、番外編も、書きたいな
♪ だって、璃玖と鷹をもうちょっと……ねえ（^m^）

遊森 謡子

本編あらすじ（完全ネタバレ版）（前書き）

「その後のふたり」の章から読む人のための、本編あらすじです。
現代恋愛ものだけ読みたい人向け？

本編あらすじ（完全ネタバレ版）

とある小さな出版社で働く宮代璃玖（26）は、懇意にしてもらっているエッセイストの愛海（33）がファンタジー小説の世界に進出するのを楽しみにしていた。

しかし、愛海は小説のプロローグ部分の原稿と設定資料を遺して事故死してしまう。璃玖は、愛海の担当編集者である上司の倉本鷹（30）から、遺族に返すようにとその原稿を預かった。

ある夜、会社に一人で残っていた璃玖はその原稿を読み始めるが、突然小説の世界に引っぱり込まれてしまう。

物語の舞台はふたつ。空と海と砂浜しか存在しない海上の世界と、海の底にある珊瑚礁の城『ラグーン城』だった。

璃玖は海上で“女神（創造主）マーナ”に姿を変えた愛海と再会するが、海上と海底を行き来できるのが璃玖だけだったため、ラグーン城では『女神と会話のできる巫女』だとみなされ丁重にもてなされる。

戸惑う璃玖だったが、この世界に閉じ込められたままになるのを防ぐため、愛海が死者であることを愛海自身から隠し、またこの世界が未完の小説の世界であることを住人には隠すことにする。

ラグーン城には神官ザンがあり、愛海は彼について「弟が成長していたらこうだろう」という想像で作ったキャラクターだと璃玖に説明する。

巫女としてザンと毎日のように会うようになった璃玖だが、複雑な生い立ちながらも普段は穏やかで優しいザンが、時々荒っぽい言葉づかいをするのを見ていぶかしむ。また、愛海が死者であり愛海の弟もすでに死んでいるなら、この世界は『死者の世界』なのではないか、という考えが浮かび、自分もすでに死んでいるのではない

かという疑いを持つ。

酩酊しているような状態の愛海、夜の来ない世界、話していないはずのことを知っているキャラクター……数々の出来事が、璃玖の不安に拍車をかけるのだった。

ある夜、ザンから手紙で呼び出された璃玖が指定の場所に行くと、あの荒っぽい人格の彼が「自分は倉本だ」と名乗る。倉本は璃玖と異なり、元の世界にいたままでザンの視点からこの世界を見ていたのだ。

彼女を救い出そうと考え行動する彼に、璃玖もようやく落ち着きを取り戻す。

しかし一方で、毎夜ザンの人格が眠っている真夜中に倉本と会うために、『神官と巫女は恋仲である』という設定が自然発生。何も知らないザンへの態度に悩む一方で、倉本との関係を意識し始める璃玖。

そんな中、城下街の街長ナキによって、海上と海底の行き来を自由にするための塔を建設する話が持ち上がった。

それを知った愛海は、塔の完成を早く見たいと言う理由から、物語世界の時間を強制的に一年先へと進めてしまった。

一年後の世界では塔はほぼ完成に近付いており、さらに璃玖はザンと婚約関係にあった。仰天する璃玖は、早く元の世界に戻りたいという気持ちを強める。

また、愛海の弟は死んでおらず、幼いころに両親の離婚で生き別れ状態になっていることも判明。

さらに璃玖は、ザンや倉本とそれぞれ会話するうちに、同居する二つの人格が融合しつつあるのではないかという疑惑を持つ。そし

て彼女は、自分が早く元の世界に戻るか、もしくはそれを諦めてでも元の世界と物語世界の接点を断たねば、倉本まで戻れなくなるのではないかという可能性に思い当たる。

璃玖は倉本のため、「ヒロインとしての役割を終えたら戻れるかも」という愛海の言葉をヒントに、密かにある決意を固める。

結婚式の日が近づく。倉本は、愛海の心残りである「弟との再会」をどうにかすれば璃玖が元の世界に戻るのではないかと考え、弟を探し始めた。そのため、頻繁には璃玖に会いに来れなくなる。

ある真夜中、倉本ではなくザンが璃玖に会いに現れ、完成直前の塔へと彼女を誘う。璃玖がどこか別の場所へ帰ろうとしていることに気づいたザンが、二人きりで結婚式をしようとしたのだ。

一方璃玖も、物語に閉じ込められる危険を承知の上で、ヒロインとしてザンと結ばれることによって倉本のいない間に物語を完結に導こうとしていた。

2人が誓いのキスを交わそうとした瞬間、倉本がザンの中に出現する。倉本は、実はザンに全てを打ち明けていたことを明かし、塔の上から海上の愛海へも呼びかけて、調べた事実を告げる。それは、愛海がザンのモデルにした生き別れの弟が倉本自身であること、倉本とザンはそう言う意味で同一人物なのだということだった。

事実を知り、自分が死んでいることを知った愛海は酩酊状態から覚め、海上に本物の夜が訪れる。辛い経験の象徴だった夜の海で、現実の弟が道を逸れずに大人になったことを知り、安心する愛海。物語には現実の裏打ちがあることを実感し、世界は何もかもつながって循環しているのだと気づく璃玖。

女神の力を利用しようとしていたナキが乱入するハプニングはあ

ったものの、愛海は女神ではなくこの世界の住人として力を尽くすことをナキに宣言する。

そして璃玖は、ザンを内包する倉本と、ハッピーエンドの象徴であるキスを交わし、現実に戻っていくのだった。

1 spices & sweets 前編(前書き)

実在の場所が出てきますが、ちょっと記憶が古くて(^^;) おかしい所があったらこっそり教えて下さい！

「いたのか」

「わっ」

振り向いたら、給湯室の入り口に、家に帰ったはずの倉本主任が立っていた。

髭も服も、こざっぱりとしている。腕まくりしたワイシャツにズボンだけ、ネクタイもなしという軽装だ。

「璃……宮代も帰ったかと思った」

「倉本主任こそ、どうしてまた会社に」

あの世界から帰った月曜日の、夕方だった。もう宵の口といったいい時間。

結局あの後、倉本主任を無理矢理たたき起こした私は、彼を会社から追い出した。こんな状態で仕事なんて、絶対無理でしょうこの人。病欠病欠。

私もいったん会社を出てから、会社に『通院による遅刻』ってことで電話を入れ、大急ぎで帰宅してシャワー浴びて着替えてから、昼にもう一度出社した。

さすがに週始めから休むのは、下っ端としては抵抗があるしさ。それに、倉本主任と同時に休んで色々勘ぐられないくないしね！

「休めましたか？」

聞いてみると、倉本主任は片手を首にやって、こきつと鳴らした。「気がついたら、山手線二周してた」

ああ。家まで保たなかったのね。

「まあでも、家に帰って寝なおしたけどな。そっちは？」

「私は……」

言いかけた時、足音がして、帰り支度をした先輩社員が通りかかった。

「あれ、倉本主任。具合どうですか」

「寝て食ったら回復した」

まあ、病気じゃないものね。

流し台に向き直った私は、背中で二人の話を聞きながら、洗いかけだったカップを洗う。

「ちょっとやること思い出してな」

「そうですか、でもお大事に」

「あ、お疲れさまでーす」

私も首をひねって、声をかける。うーす、とか何とか言いながら、廊下を去っていく足音が聞こえた。

「璃玖」

呼ばれて反対側を振り向くと、目の前にワイシャツの胸元。顔を上げたらもうそこに、倉本主任の瞳があった。

近いよーうわー近いよー。何なのこの、オフィスラブっぽい雰囲気。

お、オフィスラブ？

自分の思いついた単語に内心動揺して、視線をそらす。彼の手が伸びて……。

ぐに。

「……いひやいれす」

「いや、お前がちゃんとここにいろか、ちょっと確認」

倉本主任は私の頬から手を離すと、つねったところを親指で軽くなでた。

もしかして、それを確認するために、わざわざ？

あの世界から戻ったばかりで、精神が高揚した状態だった私は、

疲れも感じずに今日の仕事をこなし終えていた。校正用紙に赤を入れ、写真を貸し出す会社に問い合わせをし、書店からの発注をまとめて倉庫会社に指示を出す。

ほかの社員さんたちももちろんいつも通りで、誰も私と倉本主任があんなことになっていたなんて知らない。

まるで、ここ数日の出来事が、夢の中の出来事のようにだった。でも……。

「今ので、夢じゃなかったんだ、って実感しましたよ」

頬をおさえて恨みがましく言っと、彼はふっと表情をゆるめて言った。

「夕飯、食いに行こう」

新宿駅西口の地下道を、駅方面へ並んで歩く。動く歩道もあるけど、私は自分のペースで歩く方が好きだった。

「そつえば、やっとお腹が空いてきました」

私はお腹を押さえた。

「あの世界に酔ったっていうか、なんだか食欲なかったんです」

「昼、何も食ってないのか？」

「ゼリー飲料みたいなものしか」

私は肩をすくめた。

「ラグーン世界の食事、見事に魚介類と海藻ばかりで、最後の方はちよつときつかったんですよねえ」

「今頃は先生が……姉が、たぶんぶち切れて改革してるんじゃないか？ あの人、グルメだから」

「『設定が甘かったわ！』とか言ってる？ 砂地で何か栽培始めてるかもしれないね。ラッキョウとか」

適当なことを言ったら、倉本主任は軽く声を上げて笑った。

主任が笑っていると、久しぶりに見た気がする。

「何？」

視線が合つて、私はさりげなく前を向いた。もうバスロータリーが近い。

「いえ。そうだ、カレー！　カレー食べたいです！　米と肉！」

というわけで東口側まで抜け、アルタ近くにある中村屋本店に入つて、インドカレーを注文した。

食器の音や人のざわめき、食べ物の香りが、やっぱり海の底とは違つた雰囲気私を包む。

「おいひー」

運ばれてきた熱々を、口に運ぶ。スパイスの香りが鼻に抜ける。これこれ、これよ、米と肉。これが食べたかったの。ああ幸せ！戻ってきたーって感じ！

「倉本主任は？　今日はちゃんと食べましたか？」

グレイビーボートからカレーをすくいつつ、倉本主任に聞く。夕飯食いに行こうって言つたくせに、コーヒーしか頼んでない。

「さつき地元駅で立ち食いそば食ってきた」

ふーん。

「いつもそんな食生活なんですか？」

「うん……いや……」

「ご飯作ってくれるような人、いないんですか」

すぱつと聞いてみると、にらまれた。元々顔が怖いので、にらむとさらに怖い。

倉本主任はぐつと身体を乗り出して、私に顔を近づけると、地を這うような低い声で言った。

「いなくて悪かったな。だいたい、お前とあんな濃密な体験をした男に、そういうこと聞くか？」

「ちよ、言い方がエロいですよ倉本主任」

私は自分の目が、どこぞの魚のように泳ぐのを意識しながら、続

けた。

「ご飯、作る人いないなら、今回助けていただいたお礼に……」

「作りに来てくれるのか？」

「お弁当作ってきましようか」

「なんだ……」

「あ、いいらないですか」

「いる」

了解です。思わず笑ってしまう口元に、スプーンを運ぶ。

「……お前こそどうなんだ」

「んん？」

「書籍部に異動してきたときは、確か彼氏いたよな」

何でそれ知ってるの。まあいいけど。

「情報古いですねえ。もう一年以上フリーですよ私」

「いち……！？」

倉本主任はカップを口に運ぶ手をとめて、私を見た。私はまた、すいっと視線をそらす。

「何だ、それならさっさと……ちっ」

何をぶつぶつ言って舌打ちしてるんですか、ヨウちゃん。

私はまた、笑いそうになった。

どっちが払うかでひとしきりもめ、上司権限を振りかざされておごつてもらうことになった。ごちそうさまです。

二階にあったレストランを出て階段を降り、ビルの外に出る。

新宿駅の東口側に来たら、いつもは紀伊国屋書店にまっしぐらな私だけど、今日は家に帰って少しはゆっくり休まなきゃね。でも……。

隣のフルーツ専門店『高野』は、もう店仕舞いしていた。ショーウィンドーにディスプレイされたカラフルなフルーツを、見るともなしに眺めていると、倉本主任が言った。

「もう一軒つき合え」

え。

「主任、私ちよつと今日は、飲めるほどの元気は残ってないです」

「いや、別腹の方」

「へ？」

1 spices & sweets 前編（後書き）

グレイビーボート…カレーを入れる、魔法のランプみたいな形をした入れ物。

ちなみに中村屋は「カレー」じゃなくて「カリ」です。ボルシチも美味しいです。あーお腹がすいてきた。

1 spices & sweets 後編

うわあ、倉本主任、似合わない！

私は、黙々とフルーツタルトを平らげている強面の彼の顔と、女子率の高いスタイリッシュな店内を見比べた。

コムサストア内の、『カフェ・コムサ』。初めて来ました。

こんな時間なのに結構混んでる……意外と夜のスイーツって需要あるのね。

まるで時計店か宝石店のような形のガラスケースは、周りをぐるりと見て回れるようになっていて、大きなケーキやフルーツてんこ盛りのタルトがずらり。

ここ、普通のカフェよりもケーキ一切れが格段に大きいんだ。

「……意外なお店をご存じですね」

聞いてみると、

「前に、先生……姉に聞いたことがあって。でかいケーキが食えるって」

そ、そうなんだ。

「そういえば、くらッシュって甘いもの好きだった……」

今さらながら思い返してみると、会社の誰かが旅行とか行ってお土産にお菓子を買ってくると、手を伸ばすのが早かったような。姉弟そろって、お酒も甘いものもいける両刀なのね。

「ここに来るなら、お前と一緒にかな、と思ってな」

重々しく言う彼に、私は淡々と突っ込む。

「ていうか、女子と一緒にじゃないと来にくいですよねこういつとこ」
「……」

私はガトーショコラを一口食べてから、店内をゆっくりと見回した。

そして、空いている席に愛海先生が座って、フルーツタルトをほおばってニコニコしているところを思い描いた。

「一緒に来たかったですね」

倉本主任も同じことを考えていたのか、すぐに答えた。

「そうだな」

しばらく黙って、向かい合わせでケーキをつついた。

食べ終わった頃、倉本主任が言った。

「送る。石神井公園だっけ」

「え、でも主任確か――」

どこに住んでるんだっけ。

「成増」

はい、そうでした。

本当に私、今まで倉本主任のこと意識しないでいたんだな。今日だけで、というかこの数時間だけで、くらッシュトリビアが増えた気がする。

「石神井まで来ちゃうと帰るの大変でしょう？」

「そんなに遠くない。バスあるしな」

そう言っていると、彼はニヤリとした。

「家に上げるとか言わないから」

私も、さらに反論を重ねることはしなかった。今日くらいはもう少し一緒に、戻ってきたこちらの世界を歩きたかったから。

たぶん、倉本主任も同じ気持ちでいるのだろうと思うと、嬉しかった。

混み合う西武線の車内で、ドアの横あたりに並んで立つ。時々ぽつぽつと言葉を交わす。

でも、電車が揺れて身体が触れ合っても、夜の窓ガラスに私たち

の姿が反射するのが目に入っても、私は倉本主任と視線を合わせないようにしていた。

彼の視線を感じながら。

私の家は、駅からそれほど遠くない住宅街の中だ。すぐにアパートの下までたどり着いた。四階立てのわりと新しい建物で、一応オートロックはついてるし、落ち着いた焦茶色の外壁が気に入っている。

「ここです。……ありがとうございました」
軽く頭を下げた。

街灯が、足下に二人分の影を作っている。遠くから、電車の走る音がかすかに響いて来る。

倉本主任は少し黙っていたけれど、軽く身を屈めて私の顔をのぞき込み、淡々と言った。

「あの世界で、俺と『めでたしめでたし』って、迷惑だったか？」
「いいえっ」

私は即座に、首をぶんぶん横に振った。

それは違う。絶対に違う。

「じゃ、何で今日ずっと、こっちを見ないんだ」

「ううう、それは」

ああ、やっぱバレてた。彼の瞳を見られないでいたこと。

主任の両手が私の頬をはさんで、強制的に見上げさせられる。ともに視線がぶつかって、私はうろたえた。

まずい。まずいまずいまずい。心臓爆発しそう。

「お前の瞳を見たいって、あっちでも言っただろ」

「ちょ、ちよっとタンマ」

タンマって古いわ！

彼はいったんは手を離してくれたけど、その両手をゆっくりと私の腰に回して引き寄せた。

「『巫女は処女が基本』とかいうセリフを平気で言い放ってたくせに……何でこんなに、身体固くしてるんだ？」

大きな手が、背中を優しくなでる。

私は倉本主任の肩に額を押し当てて、下を向いてじっとしていた。これが、彼の匂い。

「タンマ終わり。こっち見ろ、璃玖」

低い声が、身体に直接響いてくる。

「ええと、白状しますとですね。み、見つめられると」

「ん？」

「二人分の視線を感じる気がして、緊張するんです！」

ああ言っちゃった。バカみたい。恥ずかしい。

一瞬の間の後で、倉本主任は喉の奥でくつくつと笑い出した。

「意外な弊害だな。それで今日、視線そらしまくってたのか」

「……そーです。話してるうちに慣れると思ったのに」

だってまだ、記憶が生々しすぎて。ザンの優しい笑顔が浮かぶんだもの。

って同一人物なんですけどね！ わかってるんだけど！

倉本主任の手が、今度は髪に触れる。

「急に切り替えるのは無理だよな。ごめん。……それなら、俺が嫌なんじゃないんだな？」

嫌、どころか。

私は、そつと彼の背中に手を回すと、ぼそつと言った。
「助けてもらって、惚れました」

急に、彼の右手が頭を抱き込むように回され、大きな手のひらが私の両目を一度に塞いだ。視界が遮られる。

「！」

くっ、と上を向かされ、唇を奪われた。

あの世界の、光の中のキスとは違うリアルな感触に、身体が震える。

でも、強引なのはそこまでで、繰り返されるそれは優しくかった。目を塞いでいた手が外され、唇にささやきが降る。

「俺はずっと惚れてたよ」

自分のことを、『熱しくく冷めやすい』って評価していたけど……今確かに、心のずつと奥で何かが揺さぶり起こされるのを感じた。

それは、あの世界からこちらに持ち帰ってきた、大事なものの。

まともに視線が合ってしまい、私はあわてて腕を突っ張って、彼から離れた。

目隠しキスとか！ 殺す気ですか！

「と、とりあえずこの程度から。お弁当とか。ゆつくりとその辺からのおつきあいをお願いしますっ」

上司と社内恋愛なんて、私の手に負えるんだろうか。ホント、徐々に慣らせていただかないと。

「不満を感じないでもないが、まあいいか」

倉本主任は、もう何もしないという意思表示のように、両手を組んだ。

「じゃあ、別の話。今度、姉の納骨が済んだら、一緒に墓参りに行かないか」

「あ……」

私はやつと気を取り直し、うなずいた。

「私も行きたいと思ってました。行きます」

墓前で、お礼を言いたいな。今までのことも、あの世界でのことも。先生、あちらで楽しく過ごしてるかしら。

成仏してないのに、墓前に行つて意味があるのか、というアレはナシの方向で。

「せっかくだから、宿も取るか」

「……え？ 宿？」

「わざわざ静岡まで行くんだし」

「そーだったー！ お墓、静岡！」

「日帰りだつて行けますっ。それ全然『別の話』じゃないし！」

動揺する私に、倉本主任はまた軽く声を上げて笑った。

そして、もう一度身を屈めて軽いキスを落とす、言った。

「弁当も嬉しいけど、俺こういう甘いもの好きだから」

ぐはっ。そのセリフが甘いです！

彼は片手を上げ、一歩下がった。私が中に入るのを、見届けてくれるみたい。

「……おやすみなさい」

私は彼の視線を背中に感じながら、ほてる顔を隠すようにアパートの中に逃げ込んだ。

くっ、何だか向こうのペースで悔しい！

そうだ、業務連絡用に倉本主任の携帯のメルアドは知ってるんだよね。なんか色々と負けたくない気がするので、あとでメールしてやろうっと。

「おやすみなさい、鷹^{やぶ}さん」

つてね。

【s p i c e s & a m p ; s w e e t s おわり】

2 千の想いをかさねて（前書き）

倉本視点です。最初だけシリアス、後はゆっくり会話をしましょう。

2 千の想いをかさねて

会社を出ると、高層ビルの合間の狭い空はすでに真っ暗だった。明るい地下道に潜り、彼女との待ち合わせ場所へ向かう。――少し遅くなってしまった。

ちょうど帰宅時間の地下道には、仕事帰りの人々があふれていた。朝は駅からこちらへ人々を運んでいた動く歩道も、今は駅方面へゆったりと動いている。

この、人の流れに乗る時間が、俺は嫌いではなかった。働く場所も内容も違う人々の間に漂う、奇妙な連帯感が。そして、ただ流れに乗っていればいいこの時間は、自分の内面に思いをはせる時間でもあった。

割合、自分は淡々とした性格だと思う。いや、そういう性格を自ら形成してきた。

両親が離婚したころのことは、あまり覚えていない。両親の顔さえも、記憶の彼方だ。それが幼かったためなのか、心理的な自己防衛のためなのか、今となってはよくわからない。

物心ついた頃には、父方の親戚の間を転々とする日々を送っていた。そんな環境では、感情の振れ幅が大きいとろくなことがない。お荷物に思われて、また別の場所へ行かされるだけだ。そのことに早めに気づく程度には、俺は老成していた。

犯罪に走る若者のニュースを見るたび、あれも一種の情熱なのかな、と冷めた頭で考えた。

周りに干渉されずにさつさと一人立ちするため、勉強に没頭した。写真家をやっている（らしい）父親から、俺の口座に気まぐれに送金されてくる金と、奨学金とアルバイト料があれば、国公立の大学の授業料はこと足りるからだ。

いざ一人立ちしてみれば、生きるのがずっと楽になった。学生の頃のように、家庭環境と社会的な評価がイコールではない生活。誰も、俺の過去や親戚のことなど、深く詮索するものなどいない。

逆に俺も、他人には深く干渉しないのが普通になっていた。仲のいい友人もできたが、お互いの家の行き来などはしない。女性も似たようなものだ。来る者は拒まず、去るものは追わず。

子どもの頃とは違い、少しは（常識の範囲で）思うままに行動してもかまわない状況になったけれど、常に一步引く癖がついていた。欲しいと思うものに遠慮をする必要もなかったが、いざそうできるようになってみれば、どうしても欲しいと思えるようなものもなかった。

そういうところが、他人には『さばさばした性格』と取られているようだ。プラスの感情もマイナスの感情も長続きさせない、執着心のない性格なだけなのだが。

そんな俺が初めて、表面だけでなくもっと深く知りたい、手に入れたと思ったのが、彼女だった。

新宿駅の東口側に出ると、スタジオアルタ前は人でごった返していた。やはりここを待ち合わせ場所にしないでよかった、こんな場所に彼女一人を待たせたらすぐに変な輩が寄ってくる。

指定した銀行の方へ歩く。その前に彼女はいるはずだ。

別世界から取り戻して、やっと振り向かせた彼女。早足になる。

璃玖は銀行の壁にもたれ、誰か知らない男と隣合わせで話をしていた。

ごく普通のスーツ姿……誰かに似ているな、と思つてすぐに、その誰かが浮かんだ。あの海底の城の、リュウだ。

璃玖はすぐにこちらに気づき、にこりと微笑んだ。その笑みに何も陰りがなかったので、俺は密かに安心する。きっと、あの男はただの知り合いなのだろう。

彼女はその男に向き直り、二人は一言二言交わした。そして彼女がこちらに小走りにやってくる後ろで、男はこちらに軽く会釈をしてからその場を離れていった。俺も会釈を返した。

俺の腕の届くところに来た璃玖は、はにかんだ笑みを浮かべた。会社にいる時はアップにしている胸までの髪を、今は下ろしている。天然のウェーブヘアが、なめらかな頬を縁取って揺れる。

「知り合い？」

軽く尋ねると、璃玖はさらりと答えた。

「あ、元カレです」

おい。

「あっちもこの辺で、誰かと待ち合わせですって」

「……彼女と？」

「さあ、聞きませんでした。行きましよう」

いつもと全く変わらないドライな彼女につられ、並んで歩き出す。

黙っていると大人しそうなのに、たまにこう、サクッと切りこま

れるんだよな。

彼女をちらちらと見ていると、やがて目が合った。最近やっと、『俺の』目を見てくれるようになった。

名前の通りの黒く澄んだ瞳が、俺の表情を読んだ。そして、隠さずに話してくれる。

「あっちが転勤する時に、別れたんです。結婚してついに行くって選択肢もあったんでしょけど、向こうも言いださなかったし、こっちもそのつもりが全然なかったし」

「……」

「さっき彼に会っても、誰と待ち合わせなのかとか全然興味がわかなかったな。私、執着心がないみたいで」

俺と同じ自分評。どきりとする。

しかし、彼女は前を向いて歩きながら、すぐにこう続けた。

「……今までは、ですけど」

また視線が合ったが、今度はすぐにそらされた。照れているらしい。

もしも、自分が璃玖の前の恋人だったとして。

さっきのように璃玖と話している時に、今の恋人が来たら……と想像してみた。

あんな風に会釈できるか？

無理だな絶対。視線で殺して奪い返す。

「……俺もだな」

「え？」

「いや。璃玖との付き合いは、今までとは違う、ってこと。だいたいさっきのあいつもあんな風にこっちに会釈とかできる程度の気持ちで璃玖を彼女にしてたとか一体どういう」

「鷹さんみたいな顔の人に睨まれたら、会釈くらいしちやいますよ」

……悪かったな悪人面で。

俺の名前を呼んだ彼女は、表情こそ変えなかったものの、ふんわりと頬を染めていた。肌が白いので——そういえば泳げないと言っていたから、焼くこともあまりないのだろう——赤くなるとすぐわかる。

「そんな顔してると、誰かに偶然会っても言い逃れできないぞ」

頬に触りたい気持ちを抑えて、言った。

「『倉本主任と偶然会って、仕事の話を聞いてもらってたんです』って？」

彼女はちよつと笑った後で、上目遣いになって何かを思い出すような表情をした。

「あー……吉沢さんと上田さんには、バレても大丈夫じゃないかな」
同じ書籍部の、璃玖の先輩社員の二人だ。

「何で？」

聞き返した俺は、すぐに自分でその理由に思い当たった。

「……え？ あの二人？」

「たぶん」

璃玖がうなずく。

「だって、吉沢さんがメール打つと、その直後に上田さんが携帯見てるから。そうじゃないかなって思ってたら、まあ色々」と

小悪魔な笑み。俺のみぞおちのあたりで、何かがざわめく。

俺はヤレヤレという表情を作った。

「お前さ。そういうことには気づいてるくせに、何で俺がお前の」と好きなのには気づかなかったわけ？」

「んがつく」

昔のサ。エさんみたいな声を上げた璃玖は、すぐに反撃に転じた。
「倉本主任だって。私がフリーなの、ずうっと気づかなかったくせに」

「じぶん」

双方、相打ち。

「ま、でもね、本当に気をつけなきゃいけないのは静岡に行く時だ
と思うんです」

彼女が話を戻す。

「小彩が……あ、えーと、社内恋愛の経験がある友達なんですけど。
会社の近くより、離れた場所で二人でいるのを見つけた時の方が、
言い逃れができないって」

「ま、そうだろうな。先生の墓参りって言うのも、二人きりの理由
としては弱いし……変装でもするか？」

俺の返事にまた笑った璃玖は、少し沈黙してから、こう言った。

「あのプラン、イキにしてもいいですか？」

『イキ』というのは、いったん行った訂正を取り消して元の状態
を生かす、という意味の校正用語だ。うちの部署では普段の会話で
も使う。

「あのプラン？」

俺が聞き返すと、彼女はまっすぐ見つめ返してきた。

「静岡でお泊まり」

「……おう」

わけのわからない返事をする、彼女は真面目な表情で言った。
「長い時間一緒にいればいるほど、お互いのことが良く見えるって
もんですよね。私、鷹さんのこともっと知りたいし、鷹さんにも私

のこと知って欲しいと思って。いいですか？」

「決まってる。すぐに宿を取るよ。……別に、今日俺んちに泊まりに来てでもいいんだけど？」

低くささやくと、璃玖は瞳をきらりと転かせて、

「あ、明日予定があるからダメ」

だそうだ。相変わらずドライな奴。彼女は続ける。

「スポーツジムに通うことにしたんです。泳げるようになりたくて！」

まあ、あの世界で泳げなくて苦労したもんな。

「そうか。頑張れ」

……そして俺と会う時間はさらに減っていくわけだな。などと子どもじみたわがままは言わないが。

気がついたら、過去や、日々の仕事で凝っていた俺の中の部分がほぐれ、気持ちがあくつらいでいた。

こうして日々、会話を交わすたび、俺と彼女の空気が少しずつ溶けあっていく。千の言葉、千の触れ合いが、居心地のいい空間を作っていく。

俺は軽く彼女の肩を叩いた。

「とにかく、軽く夕食済ませよう。その後、お前のお勧めのケーキ屋に連れてってくれるんだろ？」

彼女は手首を上げ、細いシルバーのブレスレット風の腕時計に目をやった。

「あっそうそう。夜十時までだから急がなきゃ」

そうして俺たちは夕食後、ルミネエストの『HARBS』で、デイナーフォークがケーキ用フォークに見えるほどでかいフルーツミルクレープを堪能した。

食べながら俺が、

「そう言えばさっきの彼、リュウに似てたな」
と言ったら、璃玖がフォークを取り落としていたが、今俺は気分が
良いので、そこは突っ込まないでいてやろう。

【千の想いをかさねて 終】

2 千の想いをかさねて（後書き）

M i l l e c r ? p e s 【ミルクレープ】：「千枚のクレープ」
二人が重ねて行く千の想いの間には、どれだけ甘々なものがはさま
ってるんでしょうねえ。

『イキ』の他に『トルツメ』なども、普段の生活で使える校正用語
♪ それと、ちよっぴり別の物語とリンクしてみました（＾m＾）

3 小話集 【お弁当はやめよう】（前書き）

内容は拍手お礼小話なのですが、拍手画面に載せると他作品に拍手下さった方にネタバレしてしまうので、こちらにupしました。倉本がやや可愛め。

3 小話集 【お弁当はやめよう】

【お弁当はやめよう その1】

彼女が、弁当を作ってくれるようになった。

もちろん昼食を外で食べる日もあるし、彼女の都合もあるので、その辺は前日の夜に連絡を取りつつ週に二回程度。朝、会社に行くときの下に紙袋に入れて置いてあるのだが、買ってきた弁当に見えるように使い捨て容器に入ってる所が、芸が細かい。

俺は微妙な幼年期を過ごしたので、弁当らしい弁当を誰かに作ってもらった記憶がない。妙にこそばゆいが、嬉しかった。

ちなみに俺が気に入ったのは、オムライス弁当。ケチャップ多めのチキンライスを、薄焼き卵で包んである奴。

「ああ、あれ簡単だからまた作りますよ」と璃玖はあっさりしたもののだが、実は俺が心の中で、弁当じゃなくて目の前でなら半熟トロトロのオムライスも作ってもらえるのかな、などと夢想していることを彼女は知らない。

そんな日々が始まって二週間が経った、ある夜のこと。新宿西口、思い出横丁某店にて。

「お弁当作るの、やめましょう」

「もう!? 何で!?!」

「だって、私と同じ内容のお弁当持ってたら、おかしいじゃないですか。バレちゃうでしょ。まずいからやめましょう」

「……えーとだな。誰に?」

「?」

「俺とお前と一緒に食べないのに、誰が二つの弁当の内容を見比べ

るんだ？」

「おお」

おおって。

というわけで、とりあえず弁当は続行となった。ふう。

【お弁当はやめよう その2】

「スーパーとかでさ。フリーズドライの食い物、売ってるだろ」

「ありますねえ。インスタントのお味噌汁とか、お菓子に入ってるイチゴとか」

「あの『フリーズドライ』っていう文字を見ると、璃玖を思い出すんだよな」

「はい？」

「まあ、ドライなのは璃玖で、フリーズするのは俺なんだけだな。ははは」

「……………」

「……………」

「（ニコリ）お弁当いらないなら、そう言ってくればいいのに」「すみませんでした（滝汗）」

【お弁当はやめよう その3】

静岡行きも迫った、ある夜のこと。新宿歌舞伎町、元コマ劇近くの洋食屋にて。

ドライな彼女の無情な一言、再び。

「お弁当作るの、やめましょう」

「また！？ 今度は何で！？」

「だって最近忙しくて、なかなか会社でお昼食べられないじゃないですか。作っても、夕方まで食べられなかったりすると傷むし。出先に持って行くには、お弁当大きすぎて邪魔だし。ひとまずやめましょう」

「う……」

「でも……ね。代わりに、はい、これ」

小さな紙袋を渡された。軽くて硬い感触。

「ビスコッティです。お菓子ってあまり作ったことないんだけど、割とうまくできたので持ってきた。日持ちするし、そこそこ腹持ちもするから、お腹が空いた時につまんで下さい」

連絡事項は終わったばかりに、アイスティーのストローをくわえる彼女の、頬が少し赤い。

「……甘いな」

「え？ あ、健康のこと、気に始めるお年頃ですか？ あの、それ一応、てんさい糖で作ったから、身体にはいいと……」

お年頃って。

俺は手の甲で、彼女の頬を撫でる。

「お前の存在が、俺には甘くて幸せだったこと」

「ごほっ」

口元を隠してむせる彼女。

……これ、早く食いたいな。

【お弁当はやめようシリーズ おしまい】

4 シュガーグレイズド 前編（前書き）

行間に色々なものをたっぷり含ませて書いた、つもり……。璃玖と鷹の交互視点です。

4 シュガーグレイズド 前編

車窓の景色は、飛ぶように過ぎて行く。新幹線に乗ったのは久しぶりで、スピードで身体が軽く座席に押し付けられる感覚さえ、心地よい高揚感を誘った。

十月最初の土曜日、「ひかり」の車内。これから、静岡県にある愛海先生のお墓に向かうところ。昼には浜松駅に着くかな。

窓際の席でしばらく外を眺めていた私は、軽く腰を浮かせて座り直すと、隣の席に目をやった。

発車するなり、倉本主任——鷹^{よう}さんは、すぐに寝入ってしまった。担当していた本が昨日校了で、さすがに疲れているらしい。月末も重なったしね。

私が彼の寝顔を見るのは二回目だけど、一回目も小説の世界から帰ってきた時だから、疲れた寝顔しか見てないことになるな。

そんなことを思いながら、眠っている時はやや『悪人度』が下がるその顔立ちを眺め——そのまま視線を下にずらした。

私の手は、しっかり彼の手とつながれていた。

ついさっきこの人は、

「いつもはこんなことしないけど、今日はいいいな」

とつぶやきながら私の右手の指と自分の左手の指をゆっくりとからめ、こちらを見てちよつと笑ってから目を閉じて、

「今のうちに寝とく」

などと言ってそのまま眠ってしまったのだった。

うつ……なんか照れる。私、あんまり外で恋人といちゃいちゃし

たことないタイプでして！

それに何よ「今のうち」って？

そんなことを考えだしたら手が汗ばみそうで、私はぺいっと彼の手を離れた。鷹さんは軽く眉間にしわを寄せたけど、起きる気配はない。

あーもー、利き手を取られてると何もできやしない。ねえ。

あ、車内販売のワゴン来た。

「すいませーん、コーヒー下さい」

コーヒーゲットして、持ってきた文庫本を開いて、オーケイ平常心力モン。

でも結局、視線は本の上をつるつる滑って、ページがちつとも先へ進まないのだった。

姉の墓は、浜名湖の近くの市営墓地にあつた。彼岸も過ぎた墓地は人気がなく、開放感のあるその場所は深閑としている。午後の陽射しに、彼岸花の赤だけが華やかだった。

姉は俺たち姉弟の母親と同じ墓に入ったため、墓石にはもちろん母方の名字が刻まれている。俺自身はその名字を名乗ったことがないので、それを見ても血のつながりを感じるようなことはまるでない。

「……姉が、ペンネームを名前だけにした理由が、わかるような気がするな」

俺がひとり言のようにつぶやくと、手を合わせていた璃玖が立ち上がって、俺の隣に身を寄せた。

「鷹さんを探すのには、かえって……」

それだけ言って、彼女は口を閉じる。姉以外の故人も眠っている場所だからか。

そう、俺を探すには名字は邪魔だっただろう。もし愛海と言う名前に馴染みのない名字がついていたら、それが姉の名前だとはよい思えないだろうから。

「いいんですか、お母さまの親戚に、弟だって名乗り出なくて見上げて尋ねてくる璃玖は、軽くこぶしを握ってみせた。

「乗り込むならお付き合いますよ」

俺は思わず、軽く吹き出した。

「今さらいいよ。姉の遺産を狙つてるとでも思われるのが落ちだ。それに、形見の品はもらったからな」

俺は、手にした大判の封筒を軽く上げて見せた。姉の小説のプロローグ部分と設定資料、それに俺が子どものころに描いた地図が入っている、あの封筒だ。これを形見として俺のものにする許可を、墓前で得ようと思って持って来ていたのだ。

璃玖は顔をほころばせた。

「そうですね、賢明です。その顔で乗り込んだら警察呼ばれちゃう一言多い。……それにしても、ずいぶん長いこと手を合わせてたな」

言っと、彼女は真面目くさった顔でこう言った。

「先生を呼んでました。化けて出てくれないかと思って」

「あ？」

「だって」

璃玖はちよつとあたりを見回して、人気のないのを確認してから言った。

「先生はあの世界で幸せに暮らしてるはずで、成仏したわけじゃな

いんだから、こちらの世界に化けて出てくれるかもしれないじゃないですか」

墓場の真つただ中で、何という会話か。

「ちなみに璃玖、怪談とかは」

「大好きです」

即答の彼女に、俺は軽くため息をついた。

小説の世界でも堂々としたものだったし、俺の恋人には怖いものはないのだろうか。まあいい、ゆっくりと探り出してやる。

「さて……今から移動すれば、ちょうど宿にチェックインできる時間かな。行こうか」

促すと、璃玖は足元に置いたトートバッグを手にして肩にかけながら、含み笑いをした。

「ウェルカムスイーツとか出るといいですねえ？」

こいつがこんな風に軽口をたたくのはたいてい照れ隠しだ、と、さすがに最近はわかってきた。俺は横目で彼女を見る。

「そうだな。今ちよつと俺、甘いものに飢えてるから」

ふーん、という感じで、彼女はさりげなく視線をあさつての方へ投げた。今度は俺が、含み笑いをする番だった。

鷹さんが取ってくれた宿は、落ち着いた雰囲気湖岸の温泉宿だった。変に気取ったところじゃなくてホッとした……たぶん私と鷹さんは、こういうところの好みが似ていると思う。

チェックインを済ませてから夕方まで、二人で浜名湖沿いを散歩した。シーズンオフなのでお客さんも少なく、普段人波にもまれ

ている身にはさすがしく感じられる。湖面を渡って来る風は、ほのかに金木犀の香りがした。

「すぐそこが、あの海なんですよね」

見上げると、鷹さんの横顔がうなずく。そう、幼いころの愛海先生と鷹さん姉弟が、ご両親の離婚で離ればなれになる前に二人で見に行ったという夜の海——その海岸が、この近くなのだそうだ。

「でも、行くのはやめておこう。何だか、ウミガメが迎えに来そうな気がする」

「うわ、ありそう」

私は思わず彼の言葉に同意してしまった。

というのも、あの世界から帰ってから何度か、ウミガメくんの背に乗る夢を見たことがあったからだ。それだけ強烈な体験だったということかな。

今もあの世界があるのなら——ううん、あると信じているから、何かの拍子にあの世界に行ってしまういそうな気がする。心配をかけそうだから、鷹さんにそんな話をしたことはなかったけれど、きっと同じような感覚なのだろう。

彼は少し力を込めて、私の肩をぎゅっと抱いた。捕まえておこうとでもいうように。

夕食の前に温泉を楽しんでから、浴衣をまとう。女性には宿が浴衣を選ばせてくれて、落ち着いた柄が好きな私は、紺地に白の桔梗を選んでいた。

鷹さんは私を見て何て言うかな、と思ったとたん、温泉から出た後にもかかわらずのぼせそうになったけど。

4 シュガーグレイズド 後編

で、ね。

夕食が部屋食で、仲居さんが給仕してくれるわけですがね。私たちをカップルとして扱ってくれるのですよ。そりゃそうなんだけど、いつもは関係をオープンにしていけない身なので、なんかもうそれが気恥しくて気恥しくてしょうがない。

だいたい、今まで二人で何度も夜に外食したけど間接照明のお店が多くて、こんなぴっかりと明るい和室で差し向かいって言うのも落ち着かない。

そこへさらに、

「浴衣、すごく似合うよ」

などと彼が褒めてくれるので、反射的にまぜっかえした。

「そういう鷹さんもすごく似合ってて、丁半賭博を始めそうです」

「褒めてんのかそれ」

すいません。顔が顔なので和服姿になると迫力がありすぎて。あ、辛子色が秋らしいな……って浴衣しか褒めてないか。

彼は、そういえば、と続けた。

「あれも似合ってたけど。あの世界での格好」

「げ」

あの、巫女の装束！？ 肩と胸しか隠れてないような短いピタTですか！？ かなり恥ずかしかったんだよねあれ……愛海先生の趣味だろうけど。

「あの時は、結構やばかったんだよな」

「何が？」

「別人の身体の中にいるんだから、と思って自分を抑えてた訳だよ、

俺は」

それだけ言つて、彼はお猪口をあおつた。

……こつちは、お酒なしでも酔いそうです。

食事の後、せつかなのでもう一回温泉に行つてから部屋に戻つてみたら、明かりが消されていた。行灯だけがほのかに室内を照らしている。

何ですかこれ演出ですかこれ、と突つ込む間もなく。

並べて敷かれた布団の上に座っていた鷹さんに、

「おいで」

と呼ばれた。

あの世界に助けに来てもらった時、彼が私を大切に思つてくれているのを、その言葉や行動から感じていた。

でも今夜は、言葉がなくても、それを全身で強く感じて。ものの数分で『照れゲー』が振り切れてしまった私が、

「お、お味はいかがですか？」

などと茶化すと、彼はちよつと顔を上げて、

「この間一緒に食つた、何だっけ……白くてふわふわした。フロマージュ何とか？ アレみたいだ」

聞くんじゃなかった……よけい恥ずかしくなったよ。

「無理にスイーツに例えなくてもいいです」

「甘いんだからしょうがないだろ」

——こんな私が、今、甘いんだとしたら。それはきつと、この人に甘くされたんだと思う。

溶かしたお砂糖で、真っ白にくるまれるみたいに。

キスの雨が降ってくる。雨の一粒一粒が集まって、流れになる。

そのうねりに、私は幸せな気持ちで身をゆだねた。

気がついたら、私は透き通った青に包まれていた。

ラグーン城の世界だと、すぐに気がついた。

でも、以前訪れたときと違うのは、私が水の中にいて呼吸ができているということ。身体が自然と動いて、前に向かって泳いでいる。後ろを振り向こうとした時、何か白いものが目に入った。なんと、今度は愛海先生ではなくて、私の足が白い蛇のような尾になっているのだった。

眼下に、ラグーン城とその城下町が広がっている。そこは以前よりもはつきりと、色彩豊かになっていた。何か稲の穂のようなものが波打っているのも見えるし、魚の群れも以前より多い。街も人が増えて賑やかだ。私がいたときよりも、ずいぶん豊かになったみたい。

すいすいと飛ぶように泳いでいくと、すぐ目の前にイ・ハイ山がそびえ、頂上に白いねじりキャンディのような塔が現れた。塔の外壁に沿って高みへと加速する。自分の身体が発光しているので気づかなかったけど、陽光らしい光は見えず、海上は暗いようだ。

加速した勢いで、イルカのように海の上に跳ねた。

海上は夜だった。明るい満月が、水面を銀色に照らしている。

そして、塔のてっぺんには、愛海先生が腰かけていた。目が合うと、にっこりと笑いかけてくれる。

幸せそうで良かった、と思いながら、私は再び頭から海に飛び込んで行った。白く細かな泡が、視界いっぱい広がった。

はっ、と目を見開いた璃玖が、びっくりしたような顔をして瞬きをした。

その表情で、俺はすぐに気がついた。彼女が今、どこか別の場所から帰って来たことに。

真夜中だった。俺と璃玖の泊まっている、宿の部屋。枕元の行灯が、和紙を透かして穏やかな光を投げかけている。

何となく眠れずにいた俺は璃玖のすぐ隣で片肘をついて、もう片方の手は彼女と指をからませたまま、彼女の穏やかな寝顔を眺めていたのだ。

大丈夫なのかと内心緊張しながら、目を開いた彼女の様子を確認める。彼女は少しあたりを見回して現状把握してから、俺を見て微笑んだ。

「わたし、いつてました？」

「馬鹿」

俺はため息をつく、と、転がりながら彼女の腕を引いて、身体を胸に乗せた。彼女の右手がぎこちなく動く。力が入っていたため、指がこわばっているらしい。

「大丈夫なのか？」

「はい。先生に会っちゃった」

やっぱりか。俺は彼女が落ち着いた様子なのを見て、やっと安心して言った。

「びっくりした。またあつちの世界から戻れなくなるかと思った」

「それは大丈夫、いつも……」

「『いつも』？」

ちよつと「しまった」という顔をする璃玖。いつもこんなことが起こってるのか？

彼女は何でもないように答える。

「あれから時々、ラグーン世界の夢を見るんです。でも鷹さんのことを考えると、すぐに夢から醒めるの。今回はずいぶんリアルな夢だったけど、同じでしたよ」

俺はしばらく考えてから、彼女がやつと外して握ったり開いたりしていた手をもう一度とって、俺の首に回させた。抱きしめて、耳のそばでささやく。

「璃玖。一緒に暮らそうか」

「へ？」

彼女が焦った様子で顔を上げた。俺の言葉が本気なのか冗談なのか、量っている視線。

「俺の存在が璃玖をこちらへ呼び戻すなら、夜も一緒にいた方がいいだろ。もうどこかへ行かないようにな」

俺は、真面目に言った。

すると彼女も、真面目な声音で答えた。

「ばれる確率が格段に上がりますよ。そしたら、一緒に部署にはいられないと思う」

それは、俺も考えたことがあった。

他の部署で、部内恋愛の末に結婚したカップルがいたが、女性の方が異動になった。うちの会社はそういう慣例がある。

「私、少なくとも今は、書籍部にいたい。好きな仕事なんです」
「うん」

確かに彼女には合っている仕事であり、社風だと思う。

俺は璃玖に両腕を回して、すっぱりと抱きしめた。

「そのことなんだけど……ちょっと考えてることがある。璃玖にしわ寄せが行かないようにするから」

「え？」

「もうちよつと、色々固まったら言うよ。……じゃあ、そういうマインス条件がなくなったら、一緒に暮らそうな」

「決定ですか!？」

「決定。相性いいし」

何のですか何の、と言いかける璃玖の唇を、俺は柔らかく塞いだ。

そんな甘い夜が明けた翌朝。チェックアウトを済ませ、このまま帰るのもなんだからどこかに寄ろうかと言う話になったのだが。

「この辺だと遊園地とか……」

と何気なくつぶやいたら、彼女の瞳がきらりと光った。

「遊園地でもいいんですか!？」

「え、何、好きなのか遊園地」

「大好き。絶叫系が」

来たよコレ。

「……却下」

「え!？ 何で!？」

「だってお前、昨夜より明らかに幸せそうな顔してる。気に入くないから却下」

「そんな、比べられませんよ鷹さんと遊園地は！ 鷹さんがスイーッなら絶叫系はカレー？ ほらどっちも美味しい。選べない」

「何だそれム力つくぞ。じゃあ昨夜みたいに『鷹さん、おねがい、おねがい』って言ったら付き合ってやる」

「鷹さんお願いお願い!」

「軽っ！」

くそ、やっぱりこいつには勝てる気がしない。

【シュガー 그레이ズド おわり】

4 シュガーグレイズド 後編（後書き）

遊園地……浜名湖パルパルのこと

5 Coffee & Doughnuts

新宿高層ビル街の中でも、その特殊な形から「三角ビル」の愛称で知られる住友ビル。

年も押し迫ったある金曜日、上階の某和食系居酒屋にて、わが書籍部のメンバーによる忘年会、兼、送別会が行われていた。

宴もたけなわ、部長を始めとする十人ちよつとが、個室の和室でわあわあと盛り上がっている。

私はウーロンハイのグラスを傾けながら同期の友達と世間話をしていたけど、頭の片隅では別のことを考えていて、半分上の空。

その上の空の原因は、今日送別される当の本人なのだけけどね。

「さて、それじゃあ最後に、今日の主役に一言いただきましょうか！」

なぜか仕切り役を買って出ている先輩社員の上田さんが拍手を始め、ばらばらと他のメンバーがその拍手に続く中、主役が立ち上がる。

倉本主任——鷹さんだった。

鷹さんは今月で、うちの出版社を退社するのだ。

「じゃ、『手短に行くぞ』！」

彼の最初の言葉に、何人かが笑う。私も思わず口元を緩めた。

「新卒で入社してから八年、書籍部に異動してからは五年お世話になりました。版元の「は」の字も知らなかった自分ですが、多くのことを学ばせてもらって感謝してます」

上座を向いて軽く頭を下げる鷹さんに、俺に足向けて寝るなよ、と部長が応えて場が和む。

そんなくだけた別れの言葉を聞きながら、私は数週間前のことに思いをはせていた。愛海先生のお墓参りに静岡に行った、その少し後のことだ。

「会社、辞める？」

私は紙カップのコーヒーを倒しそうになって、あわてて両手で支えた。

「うん。前から考えてはいたんだけど、知り合いから仕事の話をもらっててな。ライターの仕事でやっていけそうなんだ」

鷹さんは早くも、ドーナツを一つ食べ終えている。え、本当に早っ。

退社後、例によって私たちは会社の外で合流し、夕食を軽めに済ませてから甘いものを食べに来ていた。今日は新宿南口、クリスピー・クリーム・ドーナツ。平日なので思ったよりは混んでいない。

「この、ガツンと甘いのがいいんだよな」

という鷹さんは、「ケーキ食って『甘さ控えめで美味しい』とか言う奴は、ケーキなんか食うな」という極論をお持ちの甘党。そうは言っても、さすがに毎日食べたりしてないみたいけどね。

「元々、自分で何か書く仕事はやりたいと思ってたんだ。姉と似てるかもな」

そう言っつて紙カップを傾げる彼は、何だか活力にあふれている。

私が今の会社を志望した動機は、この会社が出している本が好きだからだけど、鷹さんは会社自体に思い入れがあるわけではないのだそう。まず出版業界に関わり、そこから先をどうするかを常に考えていたらしい。

それなら、私は応援するだけだ。

二つ目のドーナツに手を伸ばす彼を見ながら、私は頬づえをついて言った。

「そうですね……この会社、何年ですか？」

「八年かな」

「十年だったら退職金の額が違ったのに、残念ですね」

現実的な話をする私に、鷹さんは苦笑する。

「お前ね。俺はあと二年も待つ気はないよ」

言葉の裏にあるものを視線に乗せつつ、彼は言った。

「どこに住みたいか、考えといて」

そう、もしも社内恋愛が公になると、片方が異動になる慣例がうちの会社にはあったため、私たちは二人の関係を秘密にしていた。割を食うのは経験の浅い方、そして女性であるということもまだ根強く影響するであろうことを、鷹さんは考えてくれたのだ。

「そういうマイナス条件がなくなったら、一緒に暮らそう」と言われたのは、ついこの間。い、一緒に暮らすって！？

そもそも、私は未だに鷹さんを自分の家上げたことすらない。男性に限らず、誰かに家の中を見られることは、私にとってとはとても恥ずかしいことだった。

だって、物の配置のひとつひとつ、皿やカップのひとつひとつで、自分の精神面をさらけ出してしまう気がするんだもん。あと、本棚のラインナップとかね！

そんな話をしたら鷹さんは、

「璃玖って本当に、見かけによらず恥ずかしがり屋だよな」

と面白そうにしていた。見かけによらず、は余計です。

それなのに、私たちが一緒に暮らしてる所を想像すると、あああああ。

彼はさらに、

「あ、一緒に暮らす前に、璃玖のご両親にも会っておきたいな」

なんて言うので、私はもうお腹いっぱいになってしまって、顔が赤くなるのをこまかすように自分のドーナツを両手で彼の前に押しや
った。

「どうぞ」

「……いや、さすがに俺も夜にドーナツ三つは……」

「私もう、しばらく甘いのはいらないかも」

「え、ちょ、どういう意味？」

言葉を深読みしすぎてあわてる鷹さんを微笑ましく思いながら、
私はブラックコーヒーを飲み干すのだった。

上に話を通した鷹さんがついに辞めることが決まり、その日が近づくと、ドライな私にもさすがに寂しい気持ちがじわりと湧いて来た。
た。

鷹さんが仕事を他の人に引き継いだり、自分のデスクを整理したりしているのをつい見つめてしまって、あわてて仕事に戻ることもあった。

そんな私の様子に気づくと、私が仕事で外出した時などに、鷹さんは携帯に電話をくれた。

『どこか遠くに行くわけじゃないんだから』

「いえ、何だか変な気分だけです。もう『倉本主任』とか『くらすシユ』って呼べなくなるんだな、と思ったら」

『そのうちお前が『みやッシユ』って呼ばれるのかな』

うげげ。昇進しても、鷹さんにそんな風に呼ばれるのはなんか嫌だ。

「や、やめて下さいよ。璃玖って呼んで」

思わずそう言ったら、電話の向こうが一瞬沈黙。
そして、渋い低音の声が優しく響く。

『……なんか今の、来た。』『璃玖って呼んで』っていいな』

あわわわわ。

「も、もう切りますよっ」

『璃玖。今夜会える?』

「仕事次第です! わかりません!」

『俺の家、来いよ』

「話聞いてます!?!」

そ、そう……それで初めて、成増にある鷹さんのアパートに行っ
たんだった。

いかにも寝に帰るだけという感じで、家具の少ない部屋だったけ
ど、本棚だけは立派で本がぎっしりだった。

一緒に暮したら、二人分の本で大変なことになりそう……と思っ
たら、少し未来を想像することができた。

「——というわけでライター業頑張るので、仕事回して下さい。優
先的にやらせていただきます。ギャラはびた一文まかりませんけど」
和やかな笑いに包まれて、鷹さんの短いあいさつが終わろうとし
ている。

同期の女の子が「ねえ二次会出る?」とひそひそ話しかけてきて、
そちらを向いていた私は、次の鷹さんの言葉で注意を引き戻された。

「あー、最後に、私事だけと言っておきたいことが」

皆が注目する中、彼がまっすぐに私を見た。
……嫌な予感がした。

「宮代璃玖さん。俺と付き合って下さい」

一瞬ののち、その場は一気に騒然となった。

「怒るなよ」

「……怒ってません」

「じゃあ、照れるなよ」

「無茶言わないで下さいよっ」

都庁近くの陸橋から車の流れを見下ろして、私は顔のほてりを冷まそうとしていた。ため息をつく、白い息がふわりと風に流れて行く。

こんな顔じゃ、恥ずかしくて電車にも乗れやしない。それなのにこのひとは！

「一石二鳥だと思ったんだけど？」

鷹さんは私の頭をくしゃりと撫でた。

「これでいっぺんに周知徹底できたから、俺が辞めた後、璃玖に手を出そうって奴はなかなかいなくなるだろうし。ついでに今日の二次会に出ないで済んだし」

そう、会社の皆さんに、「後は若い二人で！」と笑顔で送り出されてしまいました。あああああ！

そりゃ、一番いい形だとは思いますが、はい。

会社籍中に二人の関係がばれて、どっちかが異動する話になっ

てから鷹さんが辞める辞めないって言いだしたら、すごく感じ悪いし私もいたたまれなくなっちゃうけど。辞めるのが決まってから私に……こ、告白しました、っていう形なら。

恥ずかしいけどね。ええ、恥ずかしいですけどね！

「はあ……来週どんな顔して出社すればいいんですか。いつそ、告白されたけどお断りしましたってことにした方が気が楽」

「おいおいおいおい」

突っ込む鷹さんに背を向けて、夜空を仰ぐ。高層ビル群の衝突防止灯の赤い光が闇に浮かび上がり、そのゆっくりとした点滅のリズムが、私の心を落ち着けてくれた。

ようやく彼を振り返ると、私は右手を出した。

「嘘です。よろしくお願いします」

鷹さんは口の端を上げて、私の手を取った。そして、その手を引いて私を胸に抱き寄せた。

もう、見られても構わないんだもんね。私は鼻先を、彼のコートの胸にすり寄せた。

「明日、さっそく物件探しに行く？」

「告白の翌日に？」

顔を見合わせ、思わず嘖き出す。

「実際には夏から付き合ってるのに、変なタイムラグができたな」

「それはおいおい埋まっていきますよ」

私は身体を傾げて彼を軽く押し、駅の方へ促した。

そうだ、両親に会わせる話もあったっけ……と考えながら、私はふと鷹さんに尋ねてみた。

「あの……鷹さんのお父さまって、今は」

「さあ。俺は知らないよ」

「そうですか」

鷹さんが何の感情も含めずに答えたので、私もそれ以上は聞かなかった。今は、この話をする時ではないような気がして。代わりに、別のことを言った。

「……明日物件見に行くなら、今日はうちに泊まります?」

鷹さんが驚いた顔になるのを眺めながら、明日の朝のコーヒーはとっておきのモカマタリを開けちゃおう、と決める。

告白されたその日に上司をテイクアウトなんて、私もなかなかやるじゃない?

【Coffee & amp; Doughnuts おわり】

5 C o f f e e & a m p ; D o u g h n u t s (後書き)

タイトルは、2人で食べる朝ご飯のイメージです(^m^)
ラグーンと乳母さまのバナナを作ってみました。アルファポリスさまのPR画像として載せてきたので、良かったら下のボタンをぽちっと押して見に行ってみてください♪

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4764u/>

イマジネーション・ラグーン

2011年10月17日20時34分発行